

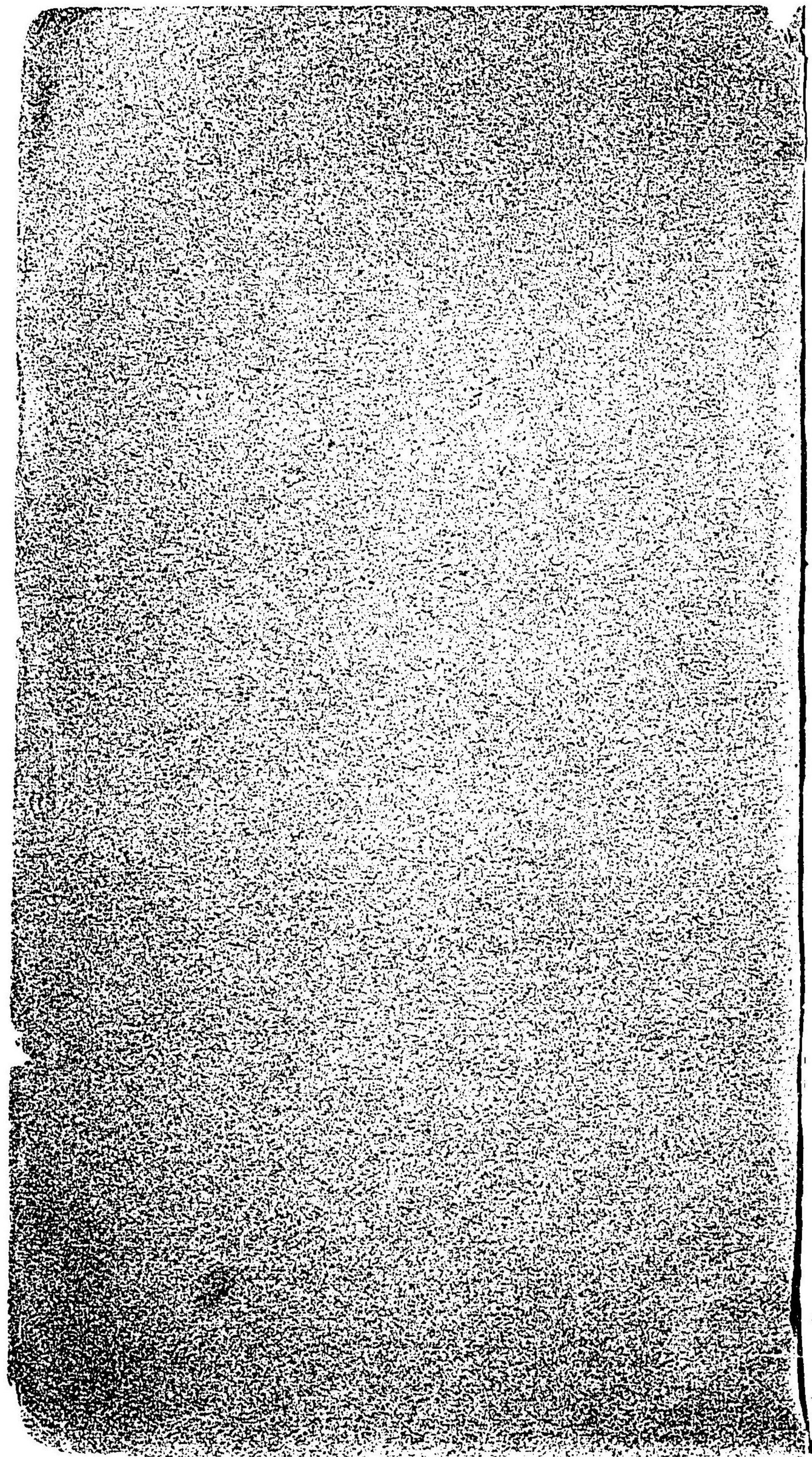
武藏坊藏辨慶

後篇

素行机業口流

五福





武藏坊辨慶はしがき

石かけを這う蟹でも一番強そうな奴を辨慶と云ひ、ナヨイと書を見ても強そうな奴が着る着物の縫工がいつも辨慶編の着物を着せるにあらすや、シテ見れば昔しからの豪傑の内でも辨慶と云へば先づ其大逆物なることい是を以ても知るべし、其或人勇猛なること既に編と委しく述べたり、今爰に後編の惣まくりを云へば義経が吉野より奥州へ落ちたる迄の辛苦を辨慶一人で背負つて立ち中よも辨慶が安宅の關の勸進帳とし云へば芝居の狂言よししても辨慶の市川團十郎の役、義経の中村福助の役なり是を以ても其骨折り左こそと察せられる、富樫の前で辨慶が白紙を恭々しく取出だしてソレ熟々とやらかすが訓き生存競争の今日の世の中如何に利口な人があるとい云へ遠く本編の主人公も及ぶべくもあらず、或る人虚言を以て關を通るは彼の智も非ずと、決して然らず虚言も方辨と云つて釋迦も方辨經を作り孔子も出家難と虚言を遊べて論語を





持12
868

武藏坊辨慶

武藏坊辨慶 下の巻

第一 席

素石齋桃葉講演
加藤由太郎速記

却説前二に二人の郎黨を附けまして都へ歸さんといふ時、遺品として義經公が時給の笛と鼓と太刀と此三品を渡す、其所で吉野山で静に別れを告げ玉ひ、夫れより主従十五人にて吉野山へ登り玉ふ、此吉野山の深山として七堂伽藍備つたる所の靈所でありまして雪を踐分け段々と登り玉ふと彌々雪の深くして身体凍んどなし玉ふ、流石の義經堪兼ね玉ひしか、幾コリヤ辨慶何れもて今宵一夜を明すべきや、辨去ればあり向ふに見ゆる五重の塔

下

作れり、機は臨み變は應ずるの虚言の誠は結構なものでござる、本編を讀んで辨慶の智のすみくならぬを知り玉ひ、辨慶の本の古ゆかしい杯と仰しやるそうだが怪からん理由で成程名は古いかは知らねど中の委しき本の出来たのは頼朝時代から今日迄、是れ一版でござる然んか生意氣なことを云わす一本を購ふて讀んで見たまへナール……と感心することあり然も演者桃葉氏今賣出しの若手の先生、其辨舌のうるわしさ、又面白さの東洋は類ひ少なひ速記本編に愛讀賜われかしといつものながらはしがさを汚す者は

明治三十有一年しかも
花咲く彌生のなかば

兩輪堂主人より代つて
江東木場街の
加藤由太郎より

武藏坊辨慶

こそ然るべし、彼の中央にありければ、決して人の氣注ぐべからず、先づ此所にて一夜を明し玉ひ、善然らば……」とあつて一同此五重の塔の内に入つて辨慶と常陸坊は法師の姿を幸ひに大きな鐵鉢を持つて食を求めに出て行く、誰知る人もあるまじと思ひし、然るに吉野の法師共認めしものと見へまして塔の内より怪しき所の法師出でたり、兼て鎌倉より来た御法沙有之る義經主従はあらざるか、義經の身内は深山の荒法師にして武藏坊辨慶常陸坊海尊ある者ある由、其兩人こそ先刻出でたる二人は相違あるべからず、方一判官主従あれは生捕よいたして鎌倉へ差出ださば是れ當山の幸ひなりと云ふ折しも後より聲掛けて甲那れは確かか、判官主従は相違無し、打取つて鎌倉殿へ差出だし御恩賞に預らん、其聲は驚いて回顧つて見れば是れを當山の取締りをあす大悪僧よて身の丈七尺餘り色黒く鬼髯左右に別れ、眼中鋭く力量七十

武藏坊辨慶

人力は餘る四川の善次と云へる者なり、夫れより人々を集める、岩倉の法師を始めとして追々来る者凡そ二百人ばかり、鉦着けたるもあり、鉢金入りし頭巾を被り、其外様々ある打拵よて得物を携へ、法師は似合ぬ所の有様あり、此時辨慶海尊鐵鉢を持つて食物を買ひ其歸るさ吉野山何となく騒がしく、方一君の身の上も廻りしことの起りたるも非ずやと立歸つて来て見れば別條もありませんから安心をさし、又々様子を見つて、確かす我君を覘ふ者に、せも一山の僧侶、那方此方、駈廻るを見て、確かす我君を覘ふ者に相違なし、然し案内知らざる所の山中にて敵の大勢をそふら得ば容易に防戦おし難し、君よ早く下山なし玉へ。義經公の聞し召されて、善僧くさ所の法師共の振舞かな、オザ一ト蹴散かし、して呉れん。と既よ仕度よ及べれるを海尊是れを押留めて、海尊の大切なる身の上も、高の知れたる法師兎も角も辨慶に任せぬ

武藏坊辨慶

つて此所を落ちさせ玉ひ 忠信「イヤ」 高の知れたる法師共と
の仰せの如く吉野法師の尋常の敵よあらず侮る者ハ亡ぶ我一人
踏留まり一命捨てとよらへハ一人たりとも御跡ハ慕ハせ申さず
某しよ許玉ひ。君振回つて涉覽あるは是ぞ奥州に名高き佐藤昌次
元春の四男、權太郎秀衡が目を注け義經の侍供をいたさせし兄の
三郎嗣信ハ屋島の浦みて討死かし、日本一の譽を現ハし、己一人差
したる功もあらずして奥州侍供なすを歎かハしく存じ居つたる
所の佐藤四郎兵衛忠信なり、義經是れを涉覽遊ハして涉涙をハツ
ハラと流し玉ひ 義「汝一人討死かしたれハどて我罪科を免るハ
よもあらず、且又奥州へ参り元春よ對面あしたる節予が逢ふてい
ふべき言葉あるべからず、汝ハ吾と共よ奥州へ参れよ 忠信「仰せ
至極有難く候得共兄ハ然るべき御奉公をいたしたり某し一人何

武藏坊辨慶

んの功も無し何とて父よ逢わすべきの面あらんや、何卒此度の御
役命せられ候得ば父も定めし満足よ存じ候わん、某しを左ばかり
よ不愆よ思召さば君の御偉名を賜り候へ、君よ變つて討死候わん
某し君の影武者と成つて討死いたしたるあれば義經既よ死せり
と思ひ、万々御跡ハ慕ふまじ、早々思召し立せ候へ。義經是れを聞し
召されて 義「汝の忠節我心魂よ貫きたり、去りあがら惜き若者予
是れを殺すよ忍びづ……とはいへ汝が左までよ申すあれば如何
よも此所の汝よ任せて我身体を汝よ移さん、汝万一冥土へ参り聞
歴の前よ出で候時は九郎判官義經と名乗つて通れヨ。緋緘し赤地
錦きの御直衣、白星六十四間金銀形打つたる龍頭の御兜、君万世の
友成の太刀よハ虎の皮の尻鞆を掛けて賜りまししたるから忠信大
きよ悦び押戴さ 忠信「然らば早々御立退きの仕度あらせられよ
其所で出立の仕度よ及ぶ草鞋を穿く時は辨慶が草鞋は逆様よ穿

武藏坊辨慶

六
けと云ふ、由つて一同も反對に草鞋を穿きました。が是れば雪の中
を下つて往つて其足跡が登つて往つたやうに見へると云ふ辨慶が
當意即妙、扱て主従は跡を忠信に托して下山をする。成つた、既に
出立よ及んだ跡で吉野法師が五重の塔を挿取巻きました。時に
あつて五重の塔に乗込ひ者が無い、只取巻てワ〜騒いで居り
ます。内よ五重の塔の三重目の所へ赤地錦の御直衣、絳しの御履
を草摺長く着流して龍頭の兜を召され毛靴を穿玉ひて勾欄よ足
を掛けたる時よ、甲ツン出た義経が出た。乙ヤ〜生擒れ、丙召
捕れ……と天地に轟くばかりの騒ぎであり升 忠信最早是れま
でいある。と心得た忠信其儘よト〜と五重の塔の三重目より飛
降りました。時よ一同バラ〜と左右も崩れて相見へたる
は兼ねて義経は神變不思議の大將でチロイ〜飛ぶてへことを
聞いて居りました。だから飛降りたどの思ひない、全く飛んで何所へ

武藏坊辨慶

七
切つて來るか分らんと思ふから左右も聞くと大地へ着いた時よ十
重八重も挿取巻きました。打物を取つて的確なる所の忠信であ
ります。すから東西も切つて廻り、餘人の兎もあれ四川の善次角半を
打倒さんと角半目掛けて切込みました。時よ角半大薙刀を取つ
て打つて掛る、暫くの間だ一上一下と渡り合つて居りました。が
よ角半を其れへ切つて落し、此腕前も離あつて近付く者もあら
りけり、忠信の右と左りも切廻りました。から今の大勢も堪り兼ね
て岩も當つて碎ける水の如くバラ〜と逃去つたり、忠信ホツと
一ト息吐て其儘此所よ生害せんと思ひました。が忠イヤ待て
如何に死する覺悟と雖も吾等を見て義経公で無いと見極めを付
ければ狗死も相成る、左すれば矢張り君の一大事、此りやア免れる
所まで逃れて見んものを……と此所で引揚げて京都三池通り小
柴入道の娘尾車と申す者の我君堀川も御所を擣へて伊勢盛の國

武藏坊辨慶

世話いたして置きました己れの外妻でありますから此尾車の許へ人知れず引揚げました

因に由つて申上げ升が忠信は是より鎌倉方より追手を受ける

と云ふ所所謂基盤忠信と云ふ所に相成り升が本編ニ關係が無いから器して置きます

却説義経公は吉野山を出立いたしましたが京都小室五條の山門

暫く身を沈着け玉ひ一同ニ打向ひ義切て是れより奥州へ参るニ何れから参るべきや辨慶進み出で辨去ん候東海道の本道なれども人目繁し東山道は往來少く候得共山多く殊ニ所多く候間だ是れより北道ニ趣き越前敦賀に出で出羽まで船よて下向仕るべし然し灰かニ聞くニ國々ニ新關を設け吾等を召捕らんとす由あれば此儘ニてニ通行ニ計ふまじ如何なる姿よて進むべきや増尾權之頭兼房 兼イヤ夫れこそ心易し先づ御

武藏坊辨慶

なされ出家沙門の姿よて通行然るべし 兼増尾の言葉道理なれども吾等今一度旗揚げをささんと思ひし故今一身の置所あしとて剃髪あすも残念あり外ニ計器ニあらざるか片岡の八郎進み出でイヤ出家の願ニ宜しからず第一思ニわしき姿なり且身に寸鐵を帯ること能はず法衣鐵鉢ニてニ敵は拒がれず某し愚案をなすニ山伏の姿こそ然るべし山伏となれば金剛杖を携へ腰ニハ打と稱ける太刀を穿き然らば敵ニ出逢うとも是れにて一方を打破るも何んの雜作も候ニんニと存じ候一同の者も是れを聞くニ一同成程此ニやア法主より山伏の方が好い及物がなくつちやア詮方があい如何ニも山伏の方が然るべしと評議一決をした義経公聞し召されて 兼其儀上策なりとあつて決定いたしましたたが又も義経公 兼爰ニ一ツの難義あり其理由如何んと云ふも越前の三池加賀の萩尾出羽の羽黒是れを山伏の三行所と云ふ是

武藏坊辨慶

れよあつて修業をせされば山伏の故事を知らず万一新開ありて此故事を問われれば如何いたして答へんや。此時辨慶、辨、ヤ、夫れこそ心易く思召せ、君の源家の嫡流にして去ること多存じ無きい伊道理の次第あがら常陸坊海尊の諸國ありつて昔く佛門の修業をせり、又某しん嗚呼ケ問敷ければ、山ありつて修業をせし又佛門より深く入り、中も天台太子金剛の妙法を旨と極め候得ば山伏の用ゆること都て何んの雜作も候ん、早々思召し立せ玉ひ、又關所にて何れの客僧と問われれば、越後まで、熊野の法師羽黒へ詣でたしと答へ玉ふべし、越後より先きの羽黒の熊野へ登ると答へ玉へ、扱て或る人の話し、出羽の國羽黒山の別當荒浪、説教と云ふ者の吾等も能く似たりと云へり、由つて吾等の荒浪説教と名乗り候ふべし、常陸坊の筑紫坊と名乗り玉へ、然し人々吾も服せされば詮無し、吾言葉も從ふや如何よ。一同の者も是れを聞く

武藏坊辨慶

と問ふる然んこと一向に知らぬ、武士道ありて免も角も修業、道杯と来た日よや一向に知らぬのでございませすから辨慶も其職任すより外も無い、一同吾々の存せぬこと故何卒宜しく伊願み申す、辨、ア、然らば一同は名前を命けん各々是れへ出でられ、増尾權之頭、熊井の太郎、杉目小太郎、龜井、片岡、伊勢、駿河、義經公皆夫れへ出で、伊願の喜三太迄居並びました時、辨、先づ増尾が相摸坊、熊井が駿河坊、杉目が伊勢の坊、龜尾が下總坊、龜井が近江坊、片岡が山城坊、伊勢が伊勢坊、駿河が志摩の坊、喜三太が九年坊、然んな名前付付けあからうけれども、各々も名前を付ける辨慶、改め義經公も打向ひ、辨、君も人も面を知るが故、大和坊と付け奉る修驗者の伊姿にて笠深く被られ、シテ人々の跡も尾てお出でわれ、又喜三太の常体の旅姿にて一二里位いづ、先きへ参り關所、辨慶所あり、早々知らせ、此時片岡の八郎辨慶も打向ひ

武藏坊辨慶

八イヤ先達一寸伺ひ候兜巾、鈴掛け、笈其等の品々は如何いたして拵拵へあるや、辨其假の心易し。と言ひつゝ、喜三太又一封の書を渡し南都東大寺に遣はしたる所早速東大寺より右の品残らづ調へて渡しましたから各々夫れを身又着して早々出立と云ふ事に相成ける増尾進み出で、櫛之頭一條今出川に在する北の方今回奥州へ落ち玉ふ又就て何様の姿又成り拵へて伊供又召具したまへ。義經公是れを聞玉ひて、義吾れも思へども汝等に心を兼ね此者の連れ難し。辨慶聞て、辨山伏の姿よて伊女性に連れ難し、然し伊一人殘し參らせんも伊痛はしく候間如何もしてお連れ申すべし、然し世の中の人の心の反覆は斗り難し、彼の伊方の思召次第よて兎も角も仕るべし。義ヲ、道理ある汝の言葉、然らば様子を尋ねんと仰せわつて義經公修驗者の上は晴小袖を召されければ増尾辨慶イヤ伊供と立上がりました、義經兩人を召連れ

武藏坊辨慶

夜中一條今出川へと行き玉ふ、屋敷の内は開けてある琴の音の喉々たり、唯、脚の君の様子、義經公横笛を取上げて琴又合して吹上げる脚の君此笛を聞玉ひ、扱ていと心注ぎ庭へ下立ち玉ひます、れ跡より女中雪洞を持ち伊供をする、枝折戸の所で出玉ひ戸外を伺へ、紛ふ方無き義經公故、脚の君悦び玉ひ、脚先づ、伊通り下さるべしとある。義許し玉へと言ひつゝ、奥殿を通り互ひ又顔を見玉へば伊言葉も無く只涙のみ、北の方の堪り兼ねたかヨ、とばかり泣伏し玉ふ、義經の背撫さすり、義先年大物の浦よて別れしより某しも諸國に漂泊して音信をいたさしりしが先づ堅固よて満足よ存づる。就て、吾等此度奥州へ下向いたす、由つて其方も召連れたくは存すれども身を忍ぶ身の心よ任せず其方を連れ參られず、明年春又相成れば迎ひの者を遣すべし、先づ夫れ迄の暫時此所よ於て忍び玉へ、暫くの別れと成れば今宵一寸暇乞

武藏坊辨慶

よ参つたり。と仰せあれ。北の方へ消入る。か。り。泣伏し玉ひ。
う。顔。を。揚。げ。玉。ひ。て。脚。の。君。實。人。の。心。と。飛。鳥。川。昨。日。は。替。せ。し。新。
枕。忘。れ。ん。と。す。れ。ど。も。忘。れ。兼。ね。た。る。良。人。の。御。姿。今。日。は。如。何。な。る。吉。
日。ぞ。や。漸。く。思。ひ。の。届。い。て。か。お。目。は。掛。り。し。甲。斐。も。あ。く。永。き。別。れ。の。
夫。れ。の。み。な。ら。ず。今。召。進。れ。賜。は。ぬ。も。の。を。何。と。て。明。年。迎。ひ。玉。ふ。や。
平。家。都。を。落。ち。玉。ひ。て。三。年。が。程。の。さ。す。ら。い。と。荒。き。浪。も。漂。ひ。て。愛。
さ。こ。の。の。み。を。憂。思。ひ。泣。明。か。し。た。る。身。あ。り。し。も。外。日。君。の。情。け。を。受。
け。迷。ふ。山。路。の。そ。れ。あ。ら。で。嬉。し。戀。し。の。其。間。も。無。く。君。の。運。の。拙。さ。
か。落。付。き。玉。ふ。ほ。せ。も。あ。ら。せ。ず。相。見。る。こ。と。も。儘。な。ら。ず。消。ゆ。る。べ。か。
り。の。産。と。無。く。又。夜。る。と。無。く。泣。明。し。八。千。八。聲。血。を。吐。く。思。ひ。の。時。鳥。
外。日。大。物。の。浦。邊。よ。て。別。れ。い。た。せ。し。其。時。よ。り。袖。は。涙。の。濡。り。勝。ち。
夫。れ。は。氣。分。も。只。な。ら。ず。醫。師。を。求。め。て。尋。ね。そ。ふ。ら。へ。万。一。身。重。よ。
な。ぞ。や。と。申。さ。れ。し。が。日。敷。も。積。る。よ。從。つ。て。誰。か。よ。斯。く。と。い。わ。た。帶。

武藏坊辨慶

包むとすれど包まれず、今も六波羅へ聞へる。鎌倉に下されて
解かの如くに成らんかと思へ。最悲しきのあるにあらぬ。妻
の身の上、夫れを都へ打捨て海山遠き陸奥へお落ち遊ばす心あら
只一思ひも刺殺して何れへなりとも下向させられて下され。と言
ひさして膝も縫りて泣き玉ふ。主従三人共涙も暮ました。此時辨
慶、辨、妊身とあつて、長途の旅路、彌々、難哉ならん。去りあが
ら此儘、棄置さそふらへ。何れも出生の伊子様も敵の手も涙るべし。こ
レ意恨も意恨の上あるべし。義経公如何のせん。茫然たり。權、イ
ヤイヤ、伊心配、伊無用なり。某、疾くより考へ居りたり。伊、覽の如く
我君は、はじめ山伏の姿にて下向仕りそふらう故。君も、稚子の伊
姿も、伊田立召され、只、伊難哉なる。伊、動行、爲、言、葉、使、ひ、男子、の
如く、荒々しくなし。主へ歩み玉ふ。も左りの足より、踐、始め、玉へ
去すれば、人よ、知れざるべし。北の方へ是を聞玉ひて、涙を拂ひて

武藏坊辨慶

北切てく 頼母敗き言葉を申されるものかきと天へも登る心な
り義經公上なる衣を脱ぎ玉へハ鼠の衣服も高の袴山伏の伊打拵
も成り玉ふ辨慶忽ち北の方のお髪を取上げ房々どせし伊黒髪を
肩よりくらべてアツ、ど切り末を細くして稚子鬘も取上げ夫れよ
り薄化粧をさし玉ふ眉を細く引き花田色重ね絹山吹の一重絹唐
織の小袖淺黄の帷子白の大口の袴門沙の直衣水色の脚絆赤き柄
のチヤ刀を帯し伊持物の笛と紺地錦の行袋よハ法華經五の巻を
入れ、今ハ仕度全く整つて誰が見ても誠の稚子とこそ相見ゆる、義
經公是れを伊覽あつて 義天晴れなる稚子振りよ。と悦び玉ふ増
尾習く此体を見て居られたが 權ハ、ア……ア、一有為天變の
世どハいひあがら君ハ正しく清和の後胤北の方ハ其位ハ大納言
の伊息女にて金殿玉樓にあつて花に戯れ、月を眺め、かりそめの伊
遊びも綺羅を盡し多くの女中共ハ侍づかれ荒き風も當たら

武藏坊辨慶

ざりし伊身、又我君ハ戰場も向ひ玉へハ百万の敵を掌も握り、金城
鐵壁をも破り向ふ所敵無く武威四海も轟ける伊身なりしに今ハ
憐れ果敢無き此伊姿天高しと雖も昇るも由無く地厚しと雖も潜
む所無く遙かの山路を驢玉ふ伊運の程こそ思ひやられると思ハ
す涙も掻暮れたり、辨慶眼を怒らして 辨道ハ何を申す權之頭兼
房、我君の遠き伊首途あるが思ハしきことを申して涙を流すハ何
事かと云ハれて増尾心注ぎ 權實ハ不調法を申したり、イザ首途
の伊酒宴の用意仕らん。と立上がる折しも表ハ大勢の足音、常陸坊
眞ッ先きよドヤ、と這入つて来る、漸く北の方も勇み立つて主
従、此所もあつて車座も成り酒宴に及ぶ、頓てのことよ酒宴も相濟
み夫れより伊出立も相成る、時ハいつや、人皇ハ八十二代後鳥羽
院の御代文治二年ささらぎの上旬なり、伊仕度整ひて住馴れし九
重の都を跡もさし陸奥差して立出で玉ふ、其後ハ忍び草の生出で

武藏坊辨慶

十八
ければ義經公夫れを取上げ玉ひ北の方へ向ひ
す草あるぞと問玉へ北の方へ取取つ
住馴れし都をあとと忍び草

おく白露の涙なりけり

と詠じ玉ひ是れより大津の宿へと差掛る、是が大津伊難の一席で
あり升……

第二席

扱て此大津の宿の頃、未だ宿といへど家もばらくにあつたので宿屋と雖も大した宿屋もあるまいが大津瀬田の役所と云ふ瀬田の役所より山科左衛門と云ふ者が五十人程の人数を曳て此所の守つて居り升就中此頃の山科左衛門が大津の宿屋を残りす呼上げて客の有無を八釜敷く吟味をする主従、此所まで来て辨慶先も立つて兩側を氣を注げ、来るが忙がしい宿屋へ泊れ

武藏坊辨慶

バ猶目も立つて陸方がない、成丈け忙がしく無さそうと云つた所が人数が多いから餘まり小सान所でもいけつと氣を注げながら來るとこの大津の西側へ宿屋で大津屋次郎と云ふ女房をおさだと云つていたつて、悠張つた婆ア、宿屋ばかりじゃ喰へないからと百姓半分の宿屋半分、此宿で草分けの家でありますから至つて小穢へ家で只モイマ、ツ廣いばかり辨慶、是れから好いと思つたから自分で掛合うと身勝が大きいので宿屋で驚くといけませんから片岡の八郎も申付けると宿屋の女房のいふより、さだ、客さまのいたし升が風呂が毀れたつ切りで立ちませんのですから風呂だけ戶外へ入して下され……といふ、八、ウ、風呂杯、無くつても好い吾々の同行十三人であるから厄介も成るさ、さだ、ハ、ア、何うも有難ふ存じます、ア、上んあせへまし、ハ、ア、好いから來なさいと云ふと、一回ハ、ア、然ふかと云つて、甲、

許せよ 乙「許せよ 丙「厄介も成るぞ」と遣入つて来る其人物を見
ると何れも確乎したのばかり さだ「恐ろしい大きな人があるも
んだ。ど中にも辨慶を見て喫驚して居る。先づ奥へ案内をしたお茶
を上げたり何んかするが奉公人も大勢居る理由で、無し女房が
忙がしそらうまゝくして居り升 さだ「早くハヤ歸つて来て呉
れ、バ好い」と亭主の歸りを待つて居るが亭主だつて遊んで居る
じやア無い今日も山科左衛門の役所へ呼ばれて一同の宿屋が出
て 役人「コレ」宿屋の主人此度鎌倉殿の御沙汰には義經公儀
山伏も成つて奥州へ下向いたす由万一夫れと見たらバ直様是れ
ある關所へ届け出でる多くの褒美を遣わすであらう、左様相心得
る 一同へ、エ委細承知仕りました。一同が委細承知した承知し
たといふ中で彼の正直者の大津屋の次郎考へて居りましたが
次「モン」役人様如何きものでございませう山伏さんが泊りま

した時又眞實の山伏が参つたら何んかものでございませう矢張
り伊知らせ申すのでござい升か 役人「其所は眞實の山伏あら注
進いたさあくても好いワ 次「エー……デゲスが何も偽山伏だ
からと云つて顔も偽物と書てあるでも無し、私共が見たつて眞物
だか偽物だか分らねへでゲス 役人「夫れだから氣を注げると云
ふのだ 次「氣を注げねへで泊める理由でもござりませぬへが万
一氣を注げて居る内は偽物が泊つたらバ何ういたしませう 役
人「だから夫れの無いやうな氣を注げるてんだ 次「夫りやア無理
お話しでゲス眞物だか偽物だか分りませぬ 甲「ワ、ワ、大津屋
マア伊役人の方で氣を注げるると云ふのだから畏りました是れか
ら氣を注げ升と伊受けをして置きやア好いのだ 次「伊受けをした
所で眞物と偽物が分らねへから詮方が無へ 甲「分らあくつても
何うでも然んなことば掛やアしねへ畏りましたと退んなせへ

武藏坊辨慶

次「じゃアアア伊役人様長りましてござい升」一同の宿屋の亭主も分らねへ奴だと思つたけれども草分けのこと故なだめすかして大津屋の次郎を引張つて来た一同も別れて己れの家へ歸つて来た。さだ「ライ、和郎さん、次「何んだ、さだ「何んだで無へ家は忙がしいの、何して居るだなア、次「何んだ忙がしい、さだ「伊客様が大變な来たい、次「ヘエ、夫りやア珍らしいことんだ家へ伊客が大勢来るなんて……何んな客だい、さだ「山伏さんが大勢来たんだ、次「エ、山伏さん……幾人だ、さだ「十人からでなア夫れで忙がしいんだ、次「然うか、と次郎の羽織を引掛けて義經公の前より出で挨拶をいたし伊茶代等の禮を述べ伊飯を上げると云ふことども相成りまして膳や何かを退けて寢床を女房が述べと此方で床の延べるから其所へ置て行けと云ふから、さだ「有難ふございませと女房の引退つて来た次郎の膳へ向つて是れから飯を喰を

武藏坊辨慶

うと思ふ、さだ「和郎さん、次「何んだ、さだ「山伏さんが泊つたの、飯なんぞ喰つて、好いかな、次「あせ、さだ「妾が見たんだ、かあ那の義經様の家來に辨慶さんてへ大さあ坊さんがあると云ふ、次「ウム、さだ「何うも乃公が考へるの、辨慶さんも居るし義經さんも居るやうに思はれる、那れを和郎縛つて其筋へ差出したら大層金子儲けた只届けても伊褒美の呉れるてへことだ何うだ、次「白痴なことを云はねへもんだ、然んあことが出来るもんか、万一眞實の山伏だつたら何うするよしんば夫れが義經様にしろ辨慶様も爲る届けて褒美を貰はねへたつて喰ふも困る理由じやア無し、又喰ふも困るとした所が義經様へ方悪い所の少しも無へ何所で聞ても兄さんの頼朝様が悪いのだ、然んあことを御上へ注進しちやア宜しくねへ、日濟まねへこんだ、さだ「チ、ッ……(舌打)和郎は然んあことべい云つてゐるから不可ねへ人が好

いから斯んあ貧乏して居るんだ和女乃公が此所の家へ来てモ一
 十三年からよ成るがエリ方の明た着物と着せたことい無へヒや
 ア無へか斯ん大きな屋敷骨をして居ながら……次、篋棒奴
 着せやうと着せゆへと亭主の櫛もあらア着せられる餘裕があれ
 ば着せてやる此家の途客が泊つたことが無へ商賣が繁盛爲ぬ
 へのだから詮方が無へ然んな詰らねへことを云やアがつて……
 さだ、和郎が注進しなけりやア乃公が關所へ届けて褒美を貰う
 から其積りで居あさい……辨慶今廁へ往つて廊下の所へ歸つて
 來ると此話し如何あらんかと獨り耳を引立つて居りますと
 さだ、能うとす和郎様か然んかことを云つてるなら乃公一人で
 褒美を貰う其時又愚痴を云ひなさんか、次、コレ何所へ行く
 だ、役所へ行くんだ、次、コレ白痴奴……亭主の云ふことを……
 さだ、亭主も何も無へや和郎さんよ付いて居りやア貧乏生涯し

あきやア成んねへ私一人で褒美を貰つて來る、次、此厄ア紛ふ云
 ふことを吐しやアがると承知しねへと女房の手を取つて、捨倒し
 た、さだ、アレ近所の伊方來て下さいますし次郎の氣が違つて居
 りますんでございます、慈を知らねへでございす、次、八釜しい
 と云ふと忽ち杖轡を引抜けて置て繩を出して兩腕を確乎と縛つ
 て突然戸棚へ打込んで、次、ホッ……と一息を吐て次郎仕度と直
 して客人の座敷へ出て來て、次、フヤ伊客様未だ伊休みみ成りま
 せんか、義、イヤ亭主何かと厄介……次、ハ、伊客様へ鳥渡申
 上げます、此先きよ参りますと大津の瀬田の役所がございます
 一回、ウ、ム、次、其所を山科左衛門様へかたが番人を連れま
 して其所を固めて居るのでございす、明日よ成りますと是
 非其所へ貴郎方が伊掛りよ成るのでございす、貴郎方のこんで
 ございすから伊差支へもございす、めへければモ、ア伊願い

武藏坊辨慶

ふ成りますると山科さん外の者と違ひまして殿重の調へでございませうと由りまして先づ一日や二日の手間が掛ると云ふ理由でございませう、就て此川岸に船がどわすが此川岸から船よ今晩伊乗んなさいまして出掛け成りますと明朝成ると越前海津の濱まで参りますすが宜しければ伊供を仕りませう、次郎が船頭いたして参ります夜明けまで乾度参り升がナニ夫れも手間が取れても好いから二三日掛つて持わんから役所へ行くも仰しやり升れば夫れ迄でございませうがなんぼ賊の山伏さんで白痴氣た話してございませうが如何でございませうか是を聞た時に義経公龜井片岡伊勢殿河顔と顔を見合した、辨慶此時、莞爾笑つて辨イヤ亭主夫れは千萬辱け無い吾々何も偽山伏では無いから持わんとは云いながら二日も三日も手間が取れては誠ま困る賊の毒だが然ふして呉れんか、次長りました宜しく

武藏坊辨慶

伊仕度をあさいましと次郎は早速其船の仕度をいたし升、蔵坊好いか往來と違ひ船中にて押取巻かれた其時は如何とも詮方もあるまい、辨決て伊心配及ばん當家の主人はあか、左様も者あらず辨慶確かよ伊受合申すと云ふ一同も辨慶も引受ける、と云ふので安心をした外の者は疑ぐる所はあるが辨慶は次郎が女房を縛つて戸棚へ入れた所を見て知つて居るから安心をして彌々捕つて海岸へ来りますと次郎船を拵へて、次是れへ伊召下さいましたしドヤ、皆んな乗込んで仕舞つた所へ一人の町人体の男、甲一寸伊待ち下さいませし此船は何方まで、次ハイ海津の濱まで行くだ、甲、濟みませんが便を下さいませし駄賃は何程でも出し升でございませうが、と乗込んだ是れは伊殿の喜三太あり彌々主従十四人各々船中へ乗込んだ時、大津屋の次郎が漕出したした船板を帆といたしませたことで船よ海上何事も無

武藏坊辨慶

く夜明方又海津の濱へと着しまして一同悦んで「ヤ〜」と海岸へ上がりました時、次「旦那様方モ一此所までお出でござればモ一安心でございます夜も残らず明けましてございますから、義「イヤ亭主大き又骨折であつた、次「大き又有難ふ存じ升旅宿代を頂いて泊り申さねへてへのは能くございませんが是れも詮方がございません……イヤ何う仕りまして船賃の入りません旅宿代を頂いて朝飯を上げることでも出来ませんやうお理由で是れにて別れ申しますと船の舳を直す様子、辨慶此時義經公に打向いまして、辨「彼れの吾々を義經主従と知る者も相違無し最早是れ迄参れば、安ん心彼も、伊姓名を名乗り、伊聞かせ玉い然すれば、彼も満足も心得ませうと云ふから、義「左様か……辨慶「小手を揚げて、辨「コッヤ次郎〜暫く待て〜、次「ハイ何か御用でござい升か、船を再び海岸へ着けて上陸いたしました時、辨「イヤ其

武藏坊辨慶

方の天晴れなりのだ、是を清和天皇の後胤八幡太郎義家の五代の孫左馬頭義朝公の八男九郎判官伊豫守源の義經公である世に出でなば、重く取立て得させる、次「へ、エ、次郎の承わり、大地へ面形を付けるやうな低頭平身をいたして、義「是れ次郎是れを取らせ、るであらうと黄金作りの伊太刀を下し置かれました次郎の悦んで大津を差して取つて返した、切て主従海津の濱より道を急いで日の八ツ頃、相成り腰越と云ふ所、掛る然るも北の方、何分に、も、伊苦痛の体故、人無き所、一同代る〜互い、肩に背負い、漸うのことで是れ迄来りし故、一同勞れて仕舞つてモウ歩けん妙、あもので大勢で旅をして居ると勞れて仕舞うと誰か出掛けるだらう〜と待つて居る、一人出掛ける者があると據る無く、皆出掛けるが斯ふ成つて仕舞うとお互ひ顔を見合して居て先、立つものも無い然るも辨慶一同の氣を勵まして、辨「サア〜斯くて

武藏坊辨慶

あるべきで無いと主従十四人を勵まして道を急いで泊りに着き
玉ふ、翌日三の口の手前松並木へ差掛ると往來の者が 甲「ヤ、
イ山伏さんが剛う来た 乙「恐ろしい山伏さんだあア 甲山伏さ
んを見る度々々氣の毒だ、又一日か二日留められて調べられなき
やア成らねへ、其度々々修業の邪魔も成るが何の位へ困るか知れ
ねへ 乙「困るだんべいヨ。と話しをしながらスタく 百姓の摺違
ひ様も行く、切てハ一同此先き又關所ありと覺へたりと休んで居
り升所へ伊厩屋の喜三太が取つて返して 喜「申上げます、此先き
又三の口と申す所あり義經主従奥州へ下向いたすと知つて態々
作りたる者、常國の住人鶴賀小太郎、加賀の住人井上左衛門の兩人
よて番兵五百人程を従ひ相固め候故此所の通行相成る間敷くと
存じ候 義「能くも注進いたしたり 辨「主従十三人を是れより人
數を二ツと別け我君と北の方龜井片岡伊勢駿河此六人の吾等が

武藏坊辨慶

先立と相成て伊連れ申さん、跡の者の筑前坊(常陸坊海尊)先達と成
りて召連れヨ 筑「畏つた、と其所で人數を二ツに別けて常陸坊の
人殿を跡へ残して眞つ先きよ立ち、今關所の前へ來つて見ます
と關門を出來へて誠又殿重の有様、三ツ鳩の紋付いたる幕並びよ
井桁の紋付いたる幕打廻し、辨慶心中よ小太郎左衛門の兩人よ相
違無い。と心得、此時辨慶具を取上げてフーッと吹上げた、番兵是れ
を見て 甲「扱てハ山伏伊勢あれ。と撞木を取つて板木をボクリリ
ボクリリ關門をギイイと開いて 甲「イザ山伏還入り玉ひ 辨「心
得て候なり。と一同ドヤく 七名道入つた途炭よ木戸をドヤンと
閉切つた所へ番兵三十人ばかり七人をギリく 甲「取巻た 辨「ア
イヤ如何なれば、其の如く仰々しく騒ぎ玉ふア 甲「ヤ事も愚かや
鎌倉殿の伊舎弟義經公山伏と相成り奥州へ下向いたすとの事、由
つて途中よ於て彼等を召捕ら速よ鎌倉へ下せと云ふ殿命あり、故

武藏坊辨慶

に各々を一應關へ申す其思召しよて扣へられヨ 辨ハ、又し
ても義經公のことよて吾等迷惑を受けることか、義經主従の既よ
美濃の國關青野ヶ原よて搦め取られしと承りしが夫れども
人の噂さ確かあること知らざれども兎にも角よも吾々の出羽
の國羽黒の行者よして吾の大黒堂の別當讚岐と申する者あり、召
連れたる山伏數人皆修業の者なり、一時も怠り難し、關べることあ
れば何れありども早々に關べられヨ抑も當國の何者が守りたる
や 甲參ん候當國の住人鶴賀小太郎、加賀の住人井上左衛門の兩
名にて守られたり 辨然らば兩人の内何れなりとも早く是れへ
來つて關べられヨ番兵も是れよ困つたなぞ困つたと云ふに二
人とも今他行をして居て不在で關べることが出來ない 辨早く
關守よ出でられヨ 甲ライ 乙エ、 甲何うしたもんだらう
乙何うしたつて居ないのだから詮方が無い 甲と申して只此儘

武藏坊辨慶

に待たして置く理由よ行かぬ 乙然ふさ……誠よ伊僧違伊
氣の毒であるが少々猶豫を願ひまして 辨抑ななぜでござい
升 乙關守只今不在でケス……エ、左衛門殿の私の用事よて鳥
渡夫れ迄參られたが小太郎殿の伊用よて海津まで參られた程無
く歸るであらうから少々伊扣へ下さるやう願ひたい。辨慶承り
つてアハ、と大口明て打笑ひまして 辨イヤ大切の關所を
預りながら兩人の關守兩人ながら居らざると申すの不念なり、立
越へおバ此事奏問よ及び、屹度沙汰あるやういたすべし、如何よ
方々伊聞の通り急ぐ旅よ候得共關守の歸るを待ち布施物に預
からん、幸ひ旅の勞れもあれ彼所の所よて一休みいたすべし。と言
ひつゝ、立つて笈を關所の椽側へ下ろして夫よ續いてドヤ、皆
笈を關所の椽側へ下して休み始めた 甲ライ大變おことに成つ
ちまつた、關所が笈で埋つて仕舞つた、役人の座る所も無くなつて

武藏坊辨慶

仕舞つた、詮方が無へ。と思つて居たが辨慶暫く立つて 辨アイヤ
番兵吾々共湯を一杯振舞玉ひ。詮方が無い湯を一杯やる 辨未
だ關守の歸られないか 番へイ未だ歸りません 辨困つたもん
だあア……アイヤ番兵 辨へイ 辨拙者も一寸案内爲る 甲厄介だねへ
辨アイヤ番兵 番へイ 辨拙者もモ一杯湯をやつて呉れ 番
兵長りました 辨番兵關守は未だ歸らんか 甲モ一程無く歸り
ませう 龜井拙者も鳥波剛へ案内爲て呉れ 甲厄介だあア何う
も……と番兵も實も困つて居りますと關所の外でブ……
甲アイヤ 又山伏が來たぜ、今日の大變な日だ。と思つたが詮方が
無いから搦木を取つてボシ……と叩いてギイ……と門を開き
甲アイヤ修驗通り玉へ 辨心得て候。と云ひつゝ、這入り掛けて
ヒヨイと見た 辨ア、扱ての各々方何れを廻りしか大變早か
りし、大先達よて候ふか、何故此所よては猶豫召されしぞ 辨去れ

武藏坊辨慶

バ又判官のこどもて止められたり、判官殿の爲みの幾度か修業の
邪魔となすが 辨然し此所よて何故休み玉ふぞ 辨去れ關守
兩人とも他行いたせし由にて其故二人歸る迄此所よ留められた
り、身も暫く待たれよかし 辨ア、然らば吾等も大分勞れたり
關所の關守が不在とあらば幸ひ此所にて一ト休み仕らんと又々
アヤ 關所へ這入つて來て椽側の所へ各々箆を下し始めた
番兵アイヤヤ大變だ此りやア……前の奴等で澤山お所へ持つ
て來て又跡から斯ふ大勢來られた日やア猶厄介だと思つて居
る、サア何時まで待つても小太郎左衛門が歸つて來あい 辨コレ
番兵茶を一杯呉れ 甲又始めやアがつた。番兵も困つて仕舞つた
關守の何う爲たのだと心配をして居る 辨時よ番兵剛へ參る一
寸案内を爲る 番兵へイ 辨番兵關守の未だ歸つて來ないな
甲未だ立歸りません 辨困つたなあ……番兵モ一杯茶を呉れ

武藏坊辨慶

甲「へい……」 筑「番兵 甲「五月蠅へ奴だあア……」 エ、何んで
 ス 筑「此人が茶が飲みたいと申すからモ一杯持つて来てやつ
 て呉れ 甲「新規の奴の方が贅澤だ、前の奴の湯が好いと云つたが
 今度の奴の茶が好いと吐しやアがる……」 同役「
 何う為やう 乙「此りやア困つたねへ 甲「困つちまつた 筑「ヤヨ
 番兵 乙「ハ、ア 筑「早期限又相成る夕飯の用意及べれヨ 甲
 サア大變だ期限又成るから飯の仕度を為る 乙「冗談じやア無へ
 せ此人數で。バク、喰いれちやア堪らまい 甲「斯う為やうじや
 ア爲いか歸らなくつても通して仕舞をう 乙「然ふだねへ 甲「夫
 れで好いじやア無へか、眞物だか偽物だか分らぬへの通して仕
 舞つて好いか知らん 乙「夫れが云草がある、修験者と云ふ者の渡
 船を渡つても關所へ掛つても船賃だの手形だのと云ふものを取
 りませんヨ、だから關手を於て呉ると云ふ、關手を出さねへやうあ

武藏坊辨慶

ら眞物だから通したつて捕ねへ、關手を出すやうな奴なら必づ
 偽物だから直ぐ搦め取つて仕舞うと云ふ此奴の何うだらう 甲
 成程夫りやア面白い、じやア然ふ云ふことにしやう…… 扱て客借
 達只今迄待たせやしたか關守兩氏とも只今以て立歸りません
 餘まり遅くも成り升るしいたし升からエ、宜しいから當所を伊
 通り下さるやうな、然し關手を置てお通り下さるやうな…… 辨
 慶「ナニ關手を置て通れ……」 黙れ 番兵「へい 辨「吾々修験者の關
 手船賃杯を置く覺へん無いら、羽黒山伏の吾々を何んど心得居る
 左様なことを升すと其分よの拾置かんど芝太刀の柄へ手を掛
 ける 番兵「イヤ左様仰せられませが鎌倉殿より關手を取つて兵
 糧の助けませいの仰せであります、墨付がございます 辨「ナニ
 其方よ墨付あれハ某しの方にも伊降書あり、其方共の鎌倉殿よ
 りの墨付あれハ某しの方よの主上の伊降書あり、但し給命たりと

武藏坊辨慶

も反古よいたせと云ふ墨附あれは是へ出だせ 甲「イエ左様も墨
付のございませんで……何う為やう 乙「詮方が無へ通して仕舞
をうじやア無いか 甲「然らばモ一好うござい升から何うか通
りを願います 辨「ナニ通れと申したつて通るべきや、山伏の身
上、布施も預らん内に通ることよは相成らん 甲「困つたあア。と番
兵も實は獨つて仕舞つたが如何程か呉れなければ通らあいと云
ふのだから詮方が無い番兵が大勢寄合つて出しつこをして紙へ
包んで三寶の上へ載せて 甲「何うぞエ、…… 賊も何うも修験達
是れは輕少であるが番兵の志し關守が居りますればモソツト何
うか致し升が關守が居りませんで何うか是れで修勘辨を願ひ
ます 辨「イヤ何とて施主の志し、多少を論すべきや、長者の万燈貧
の一燈、有難く受納いたす、大和坊是れを納めヨ、義經公布の袋を出
して布施を納めて辨慶心中も大きに悦び 辨「方々番兵が斯くす

武藏坊辨慶

す者でござるから一足先きへ通り玉へ 一回然らば先達伊先き
へ参る、伊免候へ。小先達筑前坊は先き立つて十三人トヤ、關
門の外へ出て行く様子をみて辨慶念數を爪繰り、番兵一同又向つ
て一盤張上げ 辨「南無日本第一大和權現熊野三社大權現加賀
又は白山大權現、八大金剛、大小の神社坂本三王を始め二十一社、須
く六十余州の大小の神社又願ひ奉る、何卒義經主従迷い迷
ふて當三の口關所又掛り、當所の人數又召捕られるやう神佛功德
吾等の行力を以て斗らわせ玉い、何卒當所の番兵をして鎌倉殿へ
義經を差出ださしめ玉へ、大きな聲で祈つてから小さな聲で
辨「吾々主従是れ迄首尾好く來たり候が無事又奥州へ落ちさせ玉
い落させ玉い、甲「何んだい同役那の徹さあ聲でショヤ、と云
つてるのは…… 乙「那れか、那れは眞言秘密の法と申して此分ヒ
やア義經が今も此關所へ掛つて來るだらう。モ一遠く通つて仕舞

武藏坊辨慶

つた、何を云つてゐるんだか分りません、扱て主従は首尾好く關所を
通つて原中と云ふ所の觀音堂で辨慶の來るを相待つと云ふ此所
ぞ觀音堂笈改めの一段に押移ります

第三席

此方は主従原中の觀音堂よりつて笈を下して辨慶の來るを相待
つ、然るも供人二十人程先を拂つて一人馬も跨り三ツ鳩の紋付い
たる大紋烏帽子まで來掛る、是れ當國の住人まで鶴賀小太郎と云
ふ者なり觀音堂の原中より大勢の修驗者が居りますから夫れと見
るより馬を進める一同の者は見て大きき驚き辨慶の未だ來た
らぬかと心配をいたす折しも拜み終つて武藏坊惣々ど觀音堂を
差して來りましたが向ふを見ると今小太郎が馬まで乗込ひ様子
見るより辨慶足早も觀音堂へ來り辨慶の足早いから馬で煽つ
て來るより先へ觀音堂へ來て乗込む人物の器量を試さんと駒を

武藏坊辨慶

早めて來りし時よ 辨アイヤ羽黒山伏是れも扱へたり馬上乗打
無禮あり扱へられヨ羽黒の山伏が觀音堂より休んで居る所へ馬上
で通つたつて無禮あつても何んも無いが當人の器量を試して
見やうと云ふ、小太郎驚き馬よりヒツリと飛下たり 小是は
行者達是れも在せしを知らず馬上乗打許し玉へ、吾等ハ當三の口
を堅めたる小太郎盛近と申する者客僧達ハ何れの修驗あるや
辨ハ、ア扱てハ此奴何も知らん奴だ抑も拙僧等ハ出羽の國羽黒
山大黒堂の別當荒哉と申する者あり 小扱てハ 尊き山伏か
あ然し吾等鎌倉殿の命を受け三の口の關守を勤むる者なり役目
あれハ一通り問はんと思へども某し至つて無智短才として山伏
の古法古實を聞けども更も相分らず、然し賊の山伏あるか偽山伏
なるか笈の内を拜見いたさん此儀如何に候や、辨慶此時大きに困
つた饒舌ることなら何んどでも胡麻化して白いを黒いと争う心

武藏坊辨慶

でいあるが何を云ふも正物で見られての中は何んか物が道入
つて居るかも知れぬ各々勝手物を入れてあるであらうと
思へども今此所で改めさせまいと云へば猶疑念を生ずるであら
うと思ひ辨如何も心易きことあり一通り改めたる其上の一
同の笈の洗い清めて返されヨ。盛近は是れを聞くと少し困つた洗
い清めて返せと云つた所が何んなことをするんだか分らぬ夫
りやア存じませんと云ふ知らぬ見せることの出來ねへど
云ふだらう、イヤ見た跡で洗ひ清めるのを忘れたと云つても済
むだらう辨慶の方じやア然ふ云へば屹度知らぬことだから分
らねへど云ふだらうと雨ち横着者だからだらう、でやつて居
る小如何も心得て候なり 辨、ヤ、此りやア不審だ此奴
の餘程大膽な奴だと思つて 辨、一同笈を是れへ……と云ふ大
ツと芝原へ笈を並べた盛近進んで第一番の笈を明ける常陸坊海

武藏坊辨慶

尊の笈でケス中を見ると法華經五の巻が七巻這入つて居る流石
の佛門で育つた人の笈だけに差支へが無い經文の本杯を見たつ
て盛近よ分らない第二番の笈の君の笈提婆品女人成佛の
本が五巻三番の笈の仁邊平三の笈中よ袴に櫛よ弁よ黒髪が這入
つて居た辨慶是を見て心中に愕然といいたした小太郎是れを見る
と小アイヤ修驗此笈の内よ袴一具弁黒髪杯の納めあるの不審
の一ツ山伏の笈の内よ何とて斯様な物が納めあるや。是の卿の君
を稚子姿よ直したる時の品々辨慶此時ぬからぬ顔みて 辨、去れ
ばなり坂田金剛丸の母人の多病たる故本山よある時よりも祈
を頼まれたり此度諸國を修業いたすよ付息子金剛殿を同道いた
したり是れに付き泊りにて祈禱いたし呉れヨと仰せあつて
女の罪の深き故よ黒髪を切拂ひ衣類よ添て渡されたる故是を以
て祈禱いたすに何んの不思議か是れあらん金剛丸と云ふ稚子の

武藏坊辨慶

母が病氣で祈禱の爲に品々を預かつたに云やア夫れ迄です 小
然らば次の筈を拜見いたす四番目の筈の伊勢の三郎義守の筈だ
開いて見ると中から鍋が出た驚いたねへ何うも……辨慶も是れ
を見て詰らない物を入れて置くと思つたが詮方が無い 小「アイ
ヤ修験是れなる鍋の何れも用ひ候か 辨去れば成り山伏の人の
らざる所へ詣でるを譽れとあす深山幽谷に分入つたる其折から
谷の水に米を清め薪を折つて粥を作り同行の者も與ふるよ鍋
無ふての叶ふべからず 小「成程……乃公が知らねへと思つて色
々なことを云つて胡麻化すと思つて 小「流石の大先達と云ふの
は是れだ又々五番目の筈を見ると餓が頭ばかり……柄の無いの
が這入つて居た是れ熊井の太郎の筈 太郎「アイヤ修験是れある
ヨキの頭何んも用ひ候ぞ 辨去れば道無き所を道とあして山
々を傳へる身なれば谷間を向ふへ越へんといたする時の大樹を

武藏坊辨慶

切つて是れを柄となし樹木を切拂う是れ第一の道具なり 小如
何様左様も候か六番目の筈と來ると龜井の六郎重春だ重春の
始末が悪いものだから黙つて居ても能く無いと思ふから 小「大
先達私の鎌と兎が這入つて居る此奴のギョツとした 辨「鎌兎
ハ困る剃出しかと云ふと 六「イヤ白布へ包んで確乎と四枚糸で
縛つてある 辨「未だ剃出して無いだけ始末が好いと思ひ此筈を
開いて見ると白布で包んであつて四枚糸で四十八所駒結びに成
つて居る一寸解けない白痴も重いから盛近の 小「アイヤ修験此
内ハ何が納めあるや脅迫さなけりやア切解いて杯と云入れた日
にやア面倒であると思つたから辨慶眼を怒らして 辨「ヤヨ夫れ
ハ山伏の本尊大日不動の金物を籠めたるが故又猥りも無禮さ
ば其分よハ差置かんぞ芝打の柄へ手を掛けて身構へたる様子辨
慶の勢ひ宛ら生ける仁王の如く小太郎是を聞くと驚いて跡の所

武藏坊辨慶

へ退つたが 小「何んぞ爲たら好からう是れ迄見て胡麻化されち
やア詰らない跡のをスツカリ見ちまつた曉もサア見たから洗ひ
清めて返せと云ひ入れて困る何か尾を掴まへたいものだが……
イヤ、是れ迄見たもんだから此所等で詫て仕舞う方が好いと
コ一考へましたから 小「扱て客僧中ば拜見をいたして不圖心注
さしが吾等箒を洗ひ清めて返し申すことを殆んど失念いたし
たり箒を洗ひ清めると云ふの如何いたして宜しきや最早疑ひ
晴れたれば其儀を致へて頂きたい。辨慶此で 辨「世よ白痴よし
た奴があるものだ何んも知らないで大膽あウヨシ、一番遊
んでやらうと存じましたから 辨「如何様山伏の箒を改めて後洗
ひ清めるの法は先づ第一に毛並揃つた馬十二疋 小「ヤ、
大變な物が要るんだ 辨「黄金三十三枚、白米三石三斗三升、八ッ葉
形鏡十三枚、酒三升早々是へ取揃ひられヨ。是じやア小太郎盛近身

武藏坊辨慶

上振ひ又相成つて仕舞ひます 小「大先達誠と相濟んが残らず見
たと云ふ理由で無し中ば改めただけのこと願く其所を減少
なすつて角格と洗ひ清めるやうなことを願ひたい 辨「ウ、
詫るとあれバ夫れ迄然らば米三升酒三升黄金三枚差出だされよ
馬と鏡ハ許して遣いさん 小「フ、ヤ、何方爲ても黄金三枚生
捨れることか……ヨ、宜しい委細承知仕つたと此所で黄金三枚
米三升酒三升早速調へて一同の前と差出だされた 小「何うか是
よて珍辨を……と云ふから 辨「如何も承知した吾等の方で
洗ひ清めるであらう 小「然らバ珍を蒙るとホ、と云ふて
盛近放々の体で馬で逃げて仕舞ひました跡で持参いたしたる所
の酒を一同で飲んで勇氣を加へて出立をいたし升たが首尾克く
辨慶の智で虎口を免れ段々と道を急ぎ玉ふ是れより羽黒への道
と尋ぬるに未だ北風激しくして寒氣激しければ未だ登山する者

武藏坊辨慶

なしといふさればと陸地を廻りて越前府中に着きにける此所
一泊あし翌日早天は此所を立つて義經公一同は打向ひ 義武運
長久の爲常地は名高き平善寺の観音は参詣いたさんと存づる是
を聞いて一同の者の 甲「仰せよ候へども如何なる事難義あるや
も計られず候へば此處の事見合せあつて然るべし 義「イヤ
又といわれぬこと故は是非参詣いたすであらうといふ又來ると
ども出來あひからは是非参りたいといふ夫でも止しなさいとい
へせせんから道を横に切りまして急ぎ玉ふ程は心も空も盛り勝
ち北吹く風も身は染みて急ぐとすれどはか取れぬ只あらぬ身の
北の方身体は重く足許も定め兼ねたる道芝の折も折とてチラ
と降出す雪の肌へさへ血に交れれば赤くなる心を鬼氣の張弓、猛
將勇士と建立ちて歩めば次第は腰む雪の憂きこと積る道さへも
見渡し兼ねる白妙の肌も凍へるばかりなり漸うは日の暮方に平

武藏坊辨慶

善寺の観音堂は若し玉ふ皆々堂の内にて休息をいたし辨慶はじ
め四天王の在方へ食を求めに出て行く此時寺の坊主早くも見付
け三四人にて長老の所へ行き 甲「只今観音堂より多くの修験者
立出でましたが一義經主従でいかに存じ升が義經主従あ
れば搦め取つて鎌倉へ差出たす時の當山の幸ひあらん如何仕ら
んやとある平善寺の長老是を聞いて若坊主に向ひ 長「僧侶の容ら
ざることを遣越も遣恨もあらざるは万一の事いたせば吉野法師の
如く不覺を取るべし要らざる腕立爲玉ふなど盡く戒められたさ
れども血氣にはやる若坊主聞容れずして段々集つたる所の坊主
等は何れも鎌倉殿の恩賞は預からんと慾は滿ちたる所の法師二
百人ばかり甲冑は身をかため得物くを携へて一同はて観音堂
を取巻きますと此時早くも主従の者の皆柄は手を掛け身掛へた
り夫と見るより海尊は 海ア、イヤ各々はやり玉ふな拙者一人

武藏坊辨慶

よて彼等も向い叶ぬ時はお味方下され先づ〜吾も任し玉へ
と堂を出でる所へ辨慶始め一同の人々吾も〜と取つて返して
中も辨慶縁側も飛上がり 辨夜前と申し一同も甲冑に身を堅
められたる何故よて候か又如何なる總事か次第も由らば多味
方仕らんと云ふ一人の法師夫へ進み 甲去れば客僧達の体判官
主従も紛らわしく候故斯の如くなり抑も〜 辨僧達は何れの方
あるや辨慶莞爾と打笑い 辨ヤ扱ては吾々共の疑ひも候や吾々
は出羽の國羽黒の山伏よて決て左様者よは候わす 甲扱ては
左様あるか然し山伏たる者が道中女を召連れ玉ふか 辨ナニ此
内よ女ありとは……と振回つてマロリと卿の君を見て 辨ア、
一那の者なるか那れば女よわらず羽黒名代の稚子にして坂田次
郎の息子金剛丸と申する者此多方へ對して狼藉いたさる當
山の多爲も宜しからず此頃ハ賊よ寺々よて能き稚子の流行ま

武藏坊辨慶

した時分で然るよ此羽黒の金剛丸と云ふは日本中の寺々よて實
よ評判の稚子だ去れば是れを聞くと 一回ヲ、金剛丸よおわせ
しかど勇氣も掛け伸上つて室中を吾勝ちよ覗ける有様は多くの
及の中へ美婦人が現われたやうあものでワ〜 騒いで頭りに
堂中を覗く爰も羽黒の誠の修験と云ふことで稚子まで連れて歩
いて居るんだから斯んか堂へ置くのも氣の毒と一同の評議の上
でカラリ製つて本堂よ案内をすることよ成つた十三名の者は悦
んで去らばと誘われて来る夫れより若主が長老よ此事を話しを
するも心中よ萬一發經殿あれば後々當山の人無きやうよ笑われ
るのも残念とあつて發經とあれば僧等一同騒ぎ立てるであらう
し又其多方なれば多痛わしく存づると若たいすよ知れあいやう
に和郎さんを義經と承知して居て待遇して見免すのだと云ふ所
を何うか見せて置きたいと云ふ又老僧の深い所がある、本堂よ

武藏坊辨慶

通して精進ではありませうが夫れへ出し先づ銚子をつけて出
た時又一同の大層な歩馳走も有付たど久しく旨い酒も飲ませ
い物も喰わなから今夜は心安をして本堂で酒が飲めると思
て居る若法師夫へ進んで 甲山伏宗派の人々は無味なりイザ召
上がられ口どある辨慶此時夫れへ進んで 辨アイヤイ心付け
酒を賜ふこと有難く候得共此度の羽黒へ立歸る迄師の坊より
酒を戒められたり然らば行中の事故断りす一同辨慶の顔を
見て 甲詰らねへことを云つて居る歩馳走する者を飲まねへ
んて辨慶も困るじやア無へかと思つたが辨慶の然ふじやア無
酒と云ふ者の幾分か腦へ揺みを付けて我君の一大事斯様な場合
を以て無益んことでも饒舌るやうなことがあつて成らんと思
ふから酒を断つたのであり升 甲然らば齋を參らせんどありま
す陰方が無いから腹ん中じやア愚痴を云つて居るけれども

武藏坊辨慶

ふ其後長老出て來つて一同の山伏は挨拶をして暫く休息をいた
して居ります内よ 長扱て歩勢も候わんが當山の若者共金剛
殿の腰に笛を付け賜ふを見て一同より笛を一曲願いたしと申
呉れ口と餘儀無き願ひ歩迷感ながら笛を金剛殿に願ひ申す辨
慶是れを聞くと困つた笛杯を腰へ付けさして置く理由じやア無
い男と云ふ印しと笛を付けさした吹かせることが出来ぬ心
得が無けりやア好いが心得のある人が聞けば男子が吹いてるか
女子が吹いてるか直ぐ分る 辨アイヤイ好みではあるけれど
も金剛殿は笛は感能に候得共外よ心を奪られ候癖ある故に羽黒
へ歸る迄笛は戒められたり然し好む道故取扱うだけ前された
りあれども若坊主の好みとあれバ致さん歩氣の毒アレ末席
も罷りある修験こそ金剛の、笛の師匠なり彼のものよ笛の名
代を勤めさすべし。一同悦んで師匠が吹とそりやア又格別然らば

武藏坊辨慶

何分願うと云う辨慶我君を見たけれども又吹かせるにも心配だ
辨如何大和坊勤めヨ羽黒一山の耻辱は成らざるやうな心を
籠めて吹き候へ 大和ハッ……と答へて義經公上席に直るこ
よ成りました、羽黒一山の耻辱は成らんやうと云ふのは少々上手
くつても好いから餘り旨く吹くと義經公と云ふのが分るから好
い加減はやつてお呉んあさいと云ふ謎だ長老又進み出で 長
らバ金剛どのの琴を願はんどのある辨慶又困つた琴は卿の君の得
手爲此所で琴をやられては卿の君と云ふのが分る 辨金剛殿は
琴を知り玉わず枇杷なれば……と云つたが枇杷杯は大抵無から
うと思つたから云つたので長老是を承わると 長イヤ夫ハ
千萬辱け無し然らバ早々枇杷を是れへ……と當山の稚子ハ箏と七
力をさせやすべし……と爰で四人の合奏成つた忽ち其所へ
枇杷が吐ましたから 辨忍ろしい此寺は鳴物の揃つて居る寺だ

武藏坊辨慶

と感心いたして居る扱て合奏物の又別段でございます一段終つ
たる時に一山の僧侶ハ只酒又酔ふたるが如く夢現の如く地獄の
罪人極楽世界ハ生れ出で、歌舞の菩薩の音楽を聞くが如く茫然
たるばかり長老は心の内ハ確か義經主従と悟れども大勢の若
者あれば夫と無く待遇して居られました然る内ハ東天光と鶏の
聲、其所で仕度をしてしまして一同又厚く禮を述べて立出でける若
坊主ハ於てハ山の下まで送り來つて扱て其所を出立をして觀音
堂を跡ま爲し唐津を指して急ぎ玉ふ辨慶杖を留めて天を仰ぎ
辨嗚呼生從の困苦いくハくや或時の穢々たる峯又昇り古木の
露を擦どなし又或時の險々たる松ケ枝を橋とあして谷を渡り旅
人の袖に越して道を求め疲勞てハ在家ハ出で、食を求め時なる歳
はと云も思ふありと思はづ辨慶勤息を致したり、又氣を取直して扱
是より府中を差し急玉ふ、此日の篠原ハ着き玉ふ、翌朝草鞋を精直

武藏坊辨慶

て松上り松を跡よ爲し次第く安宅も近くありあける、此時向
ふより一人の武士大紋立烏帽子よて馬上優か打跨がも供人十
四五人を連れて来りけるが是を三の口の關守にて加賀の唐津の
住人井上左衛門なり、辨慶是を見て面倒と思ひ、一人づゝ別れ
又相成つて素知の顔で通り過ぎる、馬の上でコーやつて見下して
居りまする内、義經公合力の姿よて笠深く召され一番跡からお
出でに成る、左衛門の傍の所よて来ると風がドーン……かぶれる
笠を風よあをられて猪口のやうよ成つた、縁よ手を掛け仰向く途
端よ左衛門の見下すとヒラリ馬から飛下りまして義經公の歩前
よ兩手を突へて左ハ、ア。義經公少し驚いて跡へ退がる 左尊
さ行者達の歩通行を馬に乗打恐れ入る平よ歩用捨下さるべし
一同の者の回顧つて見ると義經の前へ最前の武士が平伏して何
か云つてる様子、イヤく引返して来る中に辨慶 辨伊身の何を

武藏坊辨慶

グワく云われ居るか如何よ此人ハ吾が召廻れたる合力なり
其者が御身よ對して無禮よてもありしか。左衛門辨慶を見て左
扱の歩自分の先達にて候ふか拙者の加賀の住人井上左衛門と申
す者此度鎌倉迄の仰せを受け義經主従作り山伏と成り此邊を
通行いたすとのこと、右よ付吾々共三の口の關守役を仰せ付け
られたり、吾れ一應願ふる役目なり也各々方ハ作り山伏よ非ず然
も尊き山伏なり、斯る行者の前を乗打せし故只今此方より歩詫申
せし所なり、吾等の無禮許し玉へ去れ也此先きくも關所多く
候得ば定めし歩道中も歩難儀ならんが随分歩心注けて通り玉へ
途中にあらざれば吾等某しかの布施物を差出すべきも斯く途中
のこと故是ども許し玉へ。辨慶此時 辨扱てハ歩心極へ辱け無
く候あり 左イヤ苦しう無い歩田であれ 辨然らば是れよて伊
別れ候はんが泊りくよても歩身の姓名を以て武運長久を祈る

武藏坊辨慶

呼バサバ此方へ来る理由も無し番兵共、知れやう童子、聞へるやう、此方へ呼バんど思ひましたから辨慶扇を取つて芝原へ立上がり舞を舞ひながら、辨ア、面白の景色やあ……ア、面白の景色やなど、大きな身体をして舞つて居ると子供、早くも是れを見て、甲「ヤ、イ、那所で坊主が踊りを踊つて居らア、往つて見ろ」と、忽ち其所へ駆けて来て、甲「ワ、イ、坊さん、モット踊つてお呉れ、面白いなア」と、辨「ワ、踊つて見せてもやるがな、方等も少々尋ねたいことがあるて、甲「何んだ坊さん、乙「何んだい、辨「此安宅の關所を通らずして外へ抜道の無いか何うだ、甲「無いヨ……と云ふと一人が、乙「伯父さん、抜道のあるヨ……あるなア、源ちゃん、辨「抜道があれば教へて呉れ、乙「何か伯父さん、呉れるか、辨「ウ、貴様達の欲しい者の何んでも遣ひす、乙「ヒヤア、教へてやらア坊さん、其棒を伊、呉んな、辨「イヤ、此れ、山伏の第一の道具

武藏坊辨慶

で、汝等もやる理由の不可ん、乙「じやア何を呉れる、辨「是れを遣ひす、乙「夫りやア坊さん何んだ、辨「扇だ……、乙「扇てへの何んだ、七百年せんの里の童子、杯の扇を知らない、辨「これ、風のいる時、よ、コ、撥げて、短く、好いかいらなくなれば、コ、又合する、乙「ヤ、此りやア坊さん、面白もんだなア、夫れを呉んねへ、丙「乃公も、呉んねへ、辨「待て、常陸坊海尊のを一本、龜井の六郎、己れのと都合三本、辨「然ふ、大勢もやる程無い三本、きやア無いから、放つてやるから、拾へ、甲「然ふか、伯父さん、此方へ放つて呉ねへ、乙「坊さん、此方へ放つて呉ねへ、ヨ、と身の丈九尺三寸、撥た扇を、手を延して、放るから、ヒ、と、風を切て、落つる、パツ、ナラがつて、子供、夫を、拾ひ、甲「ヤ、乃公も、拾つた、乙「吾も、拾つた、と、悦んで、ドン、と、馳けて行くから、辨「コリヤ、童子、暫く待て、甲「坊さん、何んだ、辨「何う、参るのか、抜道を、教へて、呉れ、乙「ハ、ハ、

武藏坊辨慶

拔道の無いヨ此安宅の馬に拔道がある位いなら富樫之介と云ふ
家い方方が關所杯を立つてハ置かあいよ白痴坊主ヤ一と子供
は手を叩いて逃げて行く辨慶童子の跡を見送り金剛杖を草原へ
投出だし辨ア、一如何あれハ斯く智慧の短かく相成るものか
あ世よある時ハ平家の大将能登守教経新中納言知盛ですら易々
と欺き終せたる辨慶も如何に世よ捨てられハバとて小兒の爲よ
欺かれ扇三本只取られしかどハフクと落涙よ及ぶ何思ひけん
義經公ハナサ刀を抜くより速くアツヤ生害と相見へたり大き
よ驚き一同ハ是を止め辨道ハ何故の御生害……義其所退け
イヤ放せ義經あれバこそ汝等を欺の如く苦しめる義經が首打つ
て鎌倉へ下りなバ汝等ハ一國一城の主人よ成ればさ者共のみ吾
此ハ又於て生涯せん予が首を取つて鎌倉へ下向いたせ辨道ハ
何事を仰せられ升る君無かりせば何とて斯くまで辛勞いたすべ

武藏坊辨慶

さや君を安々と奥州へ送り奉り再びの旗揚げを勸め申さんと
斯くまで心配仕るあり高の知れたる富樫之介三寸の舌頭を以て
嚴重ある關門を通抜ける何んぞ憶するよ足らんと言ひつハ辨慶
一同を罵りして用意の具を箆の中より取出だして今や是れを吹
かんとなす一同の人々の是れを打敗つて通らんとなす辨慶是を
既て眼を怒らし辨アイヤ方々静り候へ安宅川の急流矢よりも
早く才を以て後と爲し智を以て糧といたし渡るに何んの難作あ
らん今富樫の關で義經主従狼藉を働いたとあれバ先きハハハ
更嚴重あらん鬼もあれ吾よ任し候へと言ひつハ辨慶眞先きに立
つて安宅川の邊りに來れば實よ奥羽の大河にして逆巻く流れ目
を驚かすばかりなり辨慶河縁よ立上がリ……と具を香太
よ吹上げたる時よ番兵ホラの音を聞て搦木を取つて板木とボ
リリハ早速に船を漕出だしたが二丁ハかち通つて流され

あがら此方の岸へ来る二隻の船、是のベカ船でござい升ヶカ船と申すのベキのベカくする奴少し位の岩角より引掛けても船の方で柔らかな受けるやうな成つて居る此方の岸へ着けて番兵イヤ修験乗る玉へツロく是れへ乗つて離無く以前の通り二丁ばかり逆つて下りまして一同上陸をいたしまして關門の前へ来てつて見ると山伏の首が三ツ切て盛の上へ並んで居る背恐しい所だと思えて居る卿の君は此の様子を見ると流石な女的心ナレと戦慄して仕舞つた門の貫板を引抜けてギイイと明け番兵修験此方へ還入り玉へとある辨心得候なりと辨慶真ッ先き主従十三名中に這入つたギイイ……ドーン……ガク……と取返して中へ這入るとギリく番兵五十人程主従十三人を中と判取圍みましたが是れより辨慶強々安宅難問申開きの件りに相成り升が次のお栗み……

第四席

義經主従の愛よ至つて最早袋の中の鼠同如何もすること能はず此時一人の番兵進み出で、甲此度判官源義經奥州へ下向いたすよ付き途中よて召捕れ口と鎌倉殿より服しき殿命客借達の有様義經主従よ勢懸たり關守の詮議相済む迄一名たりとも通ること相成らず強て通らんとわれバアレ見ヨ向ふよ並べたる三ツの首の如く成らん。辨慶熱々を見て辨ヲ、那の首の判官迄のの首級あるか番兵事も愚かなることと申す者か義經を既に討つたることあれば身等を調べんや強て通らんと爲したる故義經に非ずと雖も新く切棄てたり。辨慶聞て辨イヤ世よも無法の人々か首を切られるが恐ろしいとて通るべき所を通るまじさや如何よ力々よ吾は此所よ留まり關守に對面爲し前を受け参る故よ各々は先よ越候へ、日も高くは能登の國まで越さるべ

武藏坊辨慶

し。と言つ、海母は配せをする。海然らば大先達海先へ参る一
同吾も續かれ。ト海母が一同と連れて行かんとす。番兵大さ
怒り、甲、ヤ、無法の山伏かな強て通らんとあれ。先づ此通り。
言つ、弓矢を以て五人で取巻く辨慶を見て、余人は兎もあれ。真
一飛道具もて我君も怪我あつては成らんと。スツリ我君の
方へ立上つて大手を擡げ、辨、ヤ、扣へ居れ。番兵等吾等は南都東
大寺再建の山伏なり。勅命の山伏あり。一矢なりども射て見。とあ
る是を聞て番兵大さ驚き、弓矢を投出し。一同平伏。及ぶ南都東
大寺の山伏と云ふのを聞て驚いて番兵が平伏をする。然んなこと
を云つて皆歸所で驚く位いあら。是れ迄關所へを通る時に傳辨
慶が是れをやつて通つて來り。あものだと思召しませうが勅命
を偽ると云ふは容易ならん理由。去れども今此場合。至つて君の
大事。然んかことを云つて居れ。いから據る無く南都東大寺勅命

武藏坊辨慶

の山伏だと偽つた抑も、南部東大寺の大佛は十六丈の大像に
して日本で名高きもの。然るに此大佛が壽永の乱。平相國清盛の
爲に戦が起つて焼けて仕舞つた。所で當後白河法皇が最愛の后よ
別れ玉ふて浮歎の餘り。大佛を再建いたしたいとの仰せ。去れ
ば鎌倉へ右の趣きが勅命と成つて來た。スルに頼朝の答へる。は
未だ國治つて何年も経過す。萬民離離の折からです。今暫く傳
延引を申上げた。此時又帝が然らば國々。於て勸化をいたして
弘く奉願を以て再建をいたさんといふ。所謂然んなら和郎の世話
ばかりには成らん。國々を勸化を廻したら好からう。このこと。去れ
ば頼朝も夫りやア成りません。とも斷り兼ねる。由つて勅命。又帝
るとありまして。此勸化は坊主。申付けん。頼朝は申上げる。又帝
の思召では出家では十方だの十念を授けるのといつて急な理由
も不可ん。然んなことを云つて居ると廻るの。埒が明か。んから山

武藏坊辨慶

伏又申付けるが然るべくと斯ふ云ふことと極つて内幕は後白河
法皇が本願人で頼朝が世話人なので、夫では面倒であるからと
云ふので表向き本願人が徳行上人で世話人を八宗の僧侶といた
した、昨年の十一月から勸化いたすことと由つて殊
此度勸命の山伏通行いたし候に由つて國々於て粗忽無きや
う取扱うべく貴賤上下係らず志しは多少由らず寄附いた
すべきものあり
と云ふ勸命が日本中へ出て去年の十一月から山伏が諸國を勸化
して歩いて居り升、然るよ今年の二月義經主従山伏と成つて奥州
へ下向いたすよ付夫と見たらば召捕れと云ふ鎌倉から沙汰が出
たから何んどなく山伏のこと、云ふとゴマクして居る、辨慶は
ヤソと此事を心得て居るよ由つて勸命の山伏と怒鳴付けた勸
命で粗忽あきやうにとある奴を粗末いたしたのであり升から

武藏坊辨慶

是れ容易あらんことであるよ由つて番兵が弓矢を投棄て平伏を
した、然るよ此時は丁度三月三日のこと、富樫之介の奥の方で酒
宴を催して居りましたる所何と無く關所が騒がしき故、撫子の
紋付いたる大紋の烏帽子にて悠々と關所へ出で來りました辨慶
早くも是を見て扱つて關所ならんと心得ましたから金剛杖を提
げてツカ、と關所の前に突立上がり、辨、アイヤ、身、關守あ
るか、富樫如何にも拙者富樫之介將廣と申す當安宅の關守で御
座る、辨、ア、左様であるか、當關所の人々の是非をも詮さずして
狼藉に及ぶは貴殿のお指揮あるか、南都東大寺勸命の山伏なり、富
樫、聞て少しも騒がず、左衛門切ては勸命の山伏途、雜兵共が某
しよも達せず無禮を申せしか、不届き者めと云いつ、番兵をハッ
と白眼み、左衛門、然し此度九郎殿作り山伏と成つて奥州へ下
向の由途中にて召捕れよと頼朝殿より沙汰あり、彼是れ山伏の

武藏坊辨慶

儀又付き殊の外混雜いたし居る故に番兵共も無禮爲したり然ら
バ雑卒の無禮某しの知る所も非ず偏に許し玉い 辨番兵の無禮
咎むるも及ばず 左衛門早速のお許し辱け無し身等勅命の山伏
とあれば吾等如何にも寄進し候わんが然し役目あれば一通
り調べ申さん 辨然らば是非も及ばず調ぶることあれば調べ候
へ然し吾々は勸進の行者なれば一時も怠り難き身の上なり夫れ
を無益に長く止め玉へば是れ佛罰身身に報い來るゝあらずや
左衛門如何にも路次を留めるは佛罰あらんかは存せねと役目あ
れば又止事を得ず一通り調べざる内に通すこと相成らん或一
怪しと認むることあれば鎌倉より見知人來るか左あければ沙汰
ある迄逗留いたされヨ 辨然らば是非も及ばず此方於て其儘
まては濟されず加賀の國富樫の關まで止められたりと天子も奏
問いたすべし然し又笈を背負ふて立つて居ること甚だ難義なり

武藏坊辨慶

宜しく笈と安置する所を出來へ玉い 左衛門如何にも承知いたし
たり然し笈を安置する所とは如何ある構造も致べきや 辨去れ
ばなり先づ笈を安置するよ法こそあり精淨無垢の木材にて庫
裏を作り其内も笈を安置いたすあり荷も吾の背負ふたるの大
日大聖不動明王の尊像を籠めたるが故に片時も下り置き難し萬
一左無くんば身吾も代つて笈を背負ふて立つてはられヨ然ん
ば物を背負わされて堪る者で無い富樫是れを聞て莞爾と打笑い
左衛門如何にも承知いたしたり然し山伏の笈と申す者の中々六
ヶ敷き物なるかな某しの旅の調度を籠たると思ひの外六ヶ敷き
法を聞くものか 辨如何にも容易ならざる者なり是れ則ち須
彌の四天と申すあり此時富樫スイト前も進んで是れより如何な
ることを問ふか辨慶勸進帳の件りの次も伺ひます

武藏坊辨慶

扱て永らく伺ひ續き申した辨慶一代記のお話しは彌々佳境も這入つて來ました此一二回の所が辨慶の最も骨の折れる所追々に伺ひますが扱て富樫左衛門のヨリと膝を進まして左衛門彦身只今申されたる須彌の四天どの如何あることか……辨去れバあり四角あるの東西南北も象り四天と申すの東方の金三帝明王南方も軍陀利夜又明王北方も金剛夜又明王西方も威徳明王是れを稱けて須彌の四天と申す左衛門然らバ先達事の序でも問申さん伊身頭も戴き候砥巾と申す者は如何ある次第あつて象り候や辨去れバ亦も砥巾の山伏の本尊大日大聖不動明王の形状を表し第一の始り申すの我宗祖役の正徳葛城の山中にあつて行十二年雨も打たれ風も吹かれ露も濡れ艱難を厭はず行を遂へたる其時頭も戴きたる鳥帽子破れて只痕のみ残りたる是れ砥巾の始めたり左衛門然らバ其形状圓形なるの如何……辨是は

武藏坊辨慶

天地方圓の形状として是も十二のヒダあるの則ち十二因縁を表し左衛門其十二因縁と云ふ……辨五月蠅も問ふものかな是の只今説くに遠無し強て問はんどもあれは是非及ばざれど容易に説難きものかれは是を前し玉ひ左衛門然らバ外達問申さん首も掛けたる輪袈裟の如何も辨去れバ輪袈裟の形状圓形あるの天地方圓日月の形状あり左衛門四つの房……辨是の四大天王を表したるものなり左衛門シテ又四大天王とは辨コミン、シエモン、ビシヤモン、ソチヨ一是を稱けて四大天王と云ふ左衛門然らバ手に持ちし金剛杖の……夫の只勞れたる時身軀を休むる爲も突き玉ふか辨アイヤ行者と爲て何とて勞れを厭ふべきか金剛杖は固より尊き者なり釋尊未だ阻礙沙彌と申せし時阿羅漢仙人も仕へ難行苦行を爲玉ひし後其一心撓まぬを仙人是れを感し玉ひ阻礙沙彌を改めて聖比丘と号け玉ふ其時金剛銀杖を授け

武藏坊辨慶

玉ふ其形状を取つて役の正受是を用ひたり、テ三國を經歷爲す
斯る尊き所謂あれば吾々も一般是を用ひて候なり 左衛門然ら
バ先達事の序でよ問ひ申さん手に持らし法螺貝の…… 辨去り
バ我輩第一の必器あり、虎は天よ登らんと爲て吠ゆる時は其聲山
を貫き唐の獅子に似たり、獅子の諸獸の中ては可さたり、獅子一
度吠る時は諸獸皆身を潜む法螺は其聲も似たる物あれば是を吹
て惡獸毒蛇を退くるなり、行者万一山よ迷ひ道にはぐれたる時は
是を吹て掛引さす第一の品よ候なり 左衛門然らバ手よ持らし珠
數は何んの爲よ候や 辨左れバ珠數は佛法第一の品に候なり、其
數百八ッあつて百八煩惱を象る 左衛門百八煩惱とは…… 辨時
々刻々よ起る煩惱心よして一朝一夕の論よあらず、御身吾等を疑
ひて詮議よ及ばんとする是れ煩惱の一ッなり 左衛門然らバ御身
等が腹よ付けたる袴の如き者をヌッ分け申すは此れも仔細

武藏坊辨慶

が候か 辨去ればあり、是れ前名を鷹分法衣と申したり、蓋を渡
草を分け山谷を經歷爲し故よ鷹分法衣と申せしよいつの頃よか
誤つてヌッ掛けと申し候あり 左衛門夫れに八ッのヒメあるの如
何よ 辨是東西南北仁義禮智の八ッを象り身よ纏たる者よて候
左衛門然らば黒色の脚絆は夫も仔細候か 辨是ハ大蒼海の
黒色を表し 左衛門八ッ目の草鞋は 辨八葉の蓮華を踏だる心な
り 宣八相淨道とは 辨ホセツ。カイカオンツ。ホク。ホメイ。ブツ。ホ。チ
ハ。ン。是。を。号。て。八。相。淨。道。と。云。ふ。と。問。よ。任。て。答。る。辨。慶。の。有。様。ハ。怯。す
憶。せ。ず。溜。々。と。して。水。の。底。き。よ。就。が。如。く。あ。れ。ば。さ。し。も。の。富。盛。左。衛
門。も。心。中。大。い。よ。感。心。爲。し 宣勇氣と云い器量と云い智略と云い
是れ正しく辨慶よ相違無し然し答ふる所に流みなければ取押へ
ることも出来ず扱て 義經は好き家來を持たれたりと心中よ
猶々感心あり 富盛扱て今日は好き折から斯る名僧よ出合ひ思

武藏坊辨慶

わす迷ひを開らきたり、あれども役目あれば今一應問ふことあり
僧は皆一体又其形状定まれば、雖も今や山伏宗派の人々を見る
又惣髪あり切髪あり、又は怪しく束ねて後へ髪を下げるもあり
其形状様々あるが是も仔細が候ふか、辨去れば、山伏又三
種あり第一を比丘行と云ひ第二を摘髮行と云ひ第三を鳥羽相行
と云ふ

第一比丘行と申すは釋尊未だ檀特山に入玉いて出家なされし時
の姿あり、其後十二月八日山を出で玉ひし時、空中に雲あり諸
行無常と唱へたり、釋尊驚き振仰向いて見たる時、大いなる鬼座禪
を爲してあつたりける釋尊曰く如何なる尊き所の謬言葉と承知
いたしたり其お跡を聞かせ玉いと云ふ、彼の鬼然々釋尊の顔と打
眺め腹が減つて物が云へんと云ふ、釋尊法の爲には何んの身命と
惜むべきやと言いつゝ、懐刀を抜て左りの股をそいで鬼又興ふる

武藏坊辨慶

と鬼は其股をバク／＼食して世生滅法と云ふ、又其お跡を聴聞い
たしたし、何うも腹が減つて物が云へん、又釋尊右の股を興がうと
バク／＼食つた消滅滅意、又其お跡を聴たしとある、腹が減つて物
が云へん釋尊此度は唇部の肉を殺がんとすると鬼曰くイヤト曰
其位いの者では口が利けん、然らば何を差上げるや、人間を丸食み
よ然あければ物が云へんと云ふ、何んぞ法の爲よ我身命を惜むべ
きやとあつて夫れへ釋尊進んだる時、鬼はバツクリと大いなる
口を開いた、心得たり我命を参らせんと此時鬼の口を開いた中へ
バツ……飛込みたり、アツヤ我身命の微塵……と通りを見れば口
中よのあらずして釋尊自ら大いなる岩の上よ座したりける、釋尊
愕然として慈悲玉ふ折から空中に聲あつて寂滅爲樂と答へたり
去れば諸行無常世上滅法生滅爲寂滅爲樂、是れ釋尊が天より教
へを受けたる所、其跡を修自分よて作りしが諸行三害生、右吾十法

武藏坊辨

方と付け玉ふ、是れ眞言秘密の行あり、是れ比丘行の濫觴なり
第二摘髮行と申すの釋尊願々其行もつみ玉ひて濱邊より出で玉ひ
里人等を教訓爲玉いんと説法を爲し玉ふ、去れハ夏の夕又蚊の集
るが如く諸人隨つて集り來たり釋尊則ち方辨經を説聞かせる四
十四年の内又五百人の弟子が出来、其内又十六弟子十六羅漢と云
ふ者あり、十六弟子といハ大迦葉尊者、阿難陀尊者、舍利佛尊者、日蓮尊
者、阿那律尊者、須菩提尊者、富婁那尊者、加旃延尊者、優婆離尊者、羅
羅尊者、此十人あり切て十六羅漢ハ其名爰に申さずと雖も斯る名
高き弟子其外も多く集めて日々説法爲し玉ふ、菩薩如來迄も來つ
て是れを聽問爲す其時の姿ハ摘髮行なり、是れ摘髮行山伏の濫觴
なり
又鳥羽行と申すの釋尊の行力又用ひ玉ひ、其修徳の高大あること
佛けの頂きの十八天有頂天の上にあリ、佛の修足の十八足蓋谷の

武藏坊辨

底にあり其徳高大無量、釋尊の十大弟子十六羅漢も是を拜すること
と能はず、然れども四十二菩薩の目にも明かなり此時の御姿を鳥
羽僧行と云ふ、是れを後世模範して鳥羽僧行の山伏あり
抑も山伏又三種あるハ此理あるを以てあり 左衛門成程修身の名
論よて其迷ひを晴したり、然らハ問ハん餘の僧ハ肉食妻帯を盡く
戒め、是を犯す時は其罪の爲又種々の處刑あり、然る又山伏宗派の
人々は多く肉を食ひ妻帯をあすども是れを咎むる者無きは是又
も仔細を候や 辨、イヤ五月蠅も問ふ者かな、然し説かされハ疑ふ
べし、抑々肉食妻帯は役の正體より起れり、扱て是れから辨慶又成
代つて桃葉が看客諸君又言上をいたし升が大分勞れましたから
一寸一服

第六席

爰に三好三惡三行の一子として釋尊と云ふ者あり、母ハ大宮寺

武藏坊辨慶

維則の娘なり、此清行の一子は公卿の家よ生れて公卿が嫌だと云ふ、武家も嫌さら町人百姓も嫌だ、出家を爲たいと云ふ本人の望みよ任して九才の時よ出家を爲して東山延慶寺よて修業をいたしまして二十二才の時よ住職に直つてヒつよ餘念も無く益々佛學修業をいたして居つたが性来の美男子、其故參詣人がみあ住職へ悪想をする位い、日々怠らす説法を説く、然るに毎日説法座の經座の前よ乳母よ抱かれて來たるやつと四ツか五ツ位いの女の子、泣きも爲さぬいで毎日相殺らすキツキと來たる、是を見るよ悪念の相がある餘り住職も不思議よ心得て四ツか五ツ位いの子供よ悪念の相がある理由が無いと思ひますから或日のこと説法が終つて若參詣人の「イヤ」立歸る、彼の乳母の小兒を抱て居りますから一番跡よ残りましたから 貴モ、少し乳母や待ちなさい乳母、ハイ 壇私女さんは毎日、斯うやつて經座の前よ來て

武藏坊辨慶

居る説法が面白いから 乳母何ういたしまして私しよハ説法と申す者は更よ分りません、令娘さんが何所へ往つても泣きませすが一度此方へお連れ申してから泣きませせん、其説法へ行つとすると那方よと被仰る、此方へ來ると温順くしてお出でなさいませ、私も樂でございませすから當御寺へ參りますので 貴ハア左様か「ハイ、好い兒だ何才、乳母四ツでございませす 貴ウム、コレ坊やお前さんは説法は好きか色白な兒じやの成長の後何を良人よする心得じや、子供は紅葉のやうな手を出して住職の顔へ指差して君あらではと云ふ、貴諸はブル、と震へて 貴扱ては未だ我行力の足らざる所なりと心注て直ぐよ此寺へ住職を定めて唐土へ渡つて三年の修業をして歸る、今京都一條小橋の所へ掛つて來た、此小橋と云ふのは當今の辰橋、あせ辰橋と云ふのよ貴諸が小橋へ掛つて來た時よ向ふから立派な葬式が參りました、見ると己

武藏坊辨慶

其女子の顔は悪念の相が出て居ります。貴和女は何才だ。女子「ハイセツでございます。貴ウムー和女は成長の後は高位高官の奥様も成れるであらう。といふと。女子「イエー。私に君ならでは……。と指差しを爲れた時、貴諸懐刀を引抜いて突然「ッ」といふと其女子の咽喉に突立てました。女子「キヤッ。といふ外の佛力の足らざる所なりといふので又々唐へ往つて仕舞いました。此度は八年ばかり修業をして京地へ歸つて来た時、京都も高き八坂の五重の塔が暴風雨の爲、頂上のクリンが曲つて仕舞い、また是れを足場を掛けて直さんといふ、多くの人足が掛つて是れ容易ならん所の巨大の金子が掛ります。貴諸は是を承り、するど其クリンの曲りを直すのに人足を掛けるより及ばん拙僧が佛力を以て真ッすぐみしてやらう。といふこと、サア何うも大變

武藏坊辨慶

な評判、遂に貴諸の佛力を以て是れを直して仕舞いました。其後時の帝、病い重く醫藥を盡すと雖も、更其功無く次第に重体となり、玉ふ、是れを貴諸が佛力を以て、佛全快おさせました。此後、由つて其後の折々、主上へ召されて龍顔を拜すこと、成りました。其節に、主上からいろ／＼の事を尋ね、成る、何事でも答へる。是れぞあるとあらゆる事に就て答へ、出来ないと云ふこと、無い、主上も賦と器量ある者故、此者も政事を取らしたら、賦と速かなものであらうといふ事、多心注がれて、還俗を爲ると度々、多難め、成る、更、貴諸が聞容れない、固より三好參議清行の息子、生れて好んで出家、成つた位、だから聞かぬ、三度まで、命があつたけれども、更、用いない、流石、主上も逆鱗あつて、十二の修門の外へ、貴諸を出すなど云ふこと、確と言付たから、出さん、貴諸も捕わす、一間の内、引籠つて、經文讀誦をいたして居ります、何うか

墮落をさせんといふので毎夜一
に出すけれども更な狼りケ間敷き
毎晩く交るくに出で居りますと
さいます然るは十二日目夢とも
と契りを結ぶことと相成りました
する女と思ひ能く顔を見ると咽
ます貴其方の何れの者である
娘でございます貴シテ咽喉の所
た女ハイ七才の時父の家の門前
がお出で成りまして私の咽喉を
されましてが醫者の丹精屈きまし
さう驚きまして貴ハ一其方と契
よ及ばん然し三年の内に一人の
八十六

よの汝を差殺して吾も續いて那
必ず忘れるなといふ然るに三年
を佛丸と名を稱けた此子供が三
の衰へる者か衰へんものか萬一
して大麓の魔王とやらんと釋の
加茂川の水を我祈りて逆に返す
早速許しよ成りました何うも此
逆は源の方へ流すと云ふ何うも
と云ふ是れ迄の壁にも
主上の御慮より及ばんもの御山
と云つて御山の坊主と加茂川の
んと云つた位い式を祈つて逆に
も人の出るの出さいのヒヤア無
八十七

武藏坊辨慶

備けしやうと云ふので今昔しも慾み代りありませんから河
原へズーッと色々物を仕込んで商ひも出る、皆諸人の商賣を休
んで見物も出掛けて行く、當日貴諸親子三人の加茂川縁に來つて
見ると何うも大層な見物だ、親子三人加茂川縁に並んで暫くの間
だ水面を眺めて居りました、が貴諸の念數を取上げてサラ／＼と
採立て／＼祈り立てる程、川風の爲め法衣の裾が煽つて逆立つ
様子、兩眼の血走りまして髪の中の逆様も立上がり、宛ら其様の大
聖不動の怒れるが如く暫く立つ内、加茂川の水邊に不思議なる
哉ヒマリと流れが留つた、一回、ヤーンと流れが留つた流れなく
成つた。と云つて居り升内、川の中へから切つた如く向ふ河岸の
方のゴ／＼と泉の如く又流れるかと思ふと釋僧從貴諸の祈り
立つて居る方の水のゴ／＼と云ふ物音と共み源に向つて流れ上が
るの有様、片側の下り片側の登りと云ふことと成つた、實に諸人感

武藏坊辨慶

服いたしたと云ふ、其所で釋の増從が成程是れは肉食妻帯の爲て
も佛の力の衰へんもんだと云ふことを發明いたしました、由つ
て是れから肉食妻帯と云ふことを許されませんでした、辨慶が役の正覺
が濫觴だと云つたの、正覺の則ち釋僧從のことであり升、是れ迄
の辨慶が富樫左衛門將廣と話して居る所を演者が辨慶と代つて
申上げたのでありまして、此時辨慶詞を改めて、辨斯の如き次第
まで肉食妻帯の我宗祖釋僧從貴諸より許されたり。富樫承はり
富然らば先達つ今山伏派の人を見る、口は經問を唱へ正しく僧
の如くなれども腰に太刀を佩き武門の人の如く僧か佛か見分る
こと能はず、佩ける太刀の將人、人を切らん爲めの太刀なるか又
脅しの爲に佩き玉ふや、辨アイヤ案山子の爲に佩くべきや、將
切らん爲に佩く太刀なり、尙も佛法も仇爲す者、惡獸毒蛇の勿論
へ人間たりとも主義も由りて、切つて棄てん、左衛門王法佛法に

武藏坊辨慶

仇爲す者の其太刀よて切つて棄ると雖も目も見へぬ所の無明の
陰氣王法佛法の妨げなま何を以て切り玉ふぞ 辨其時の九ツ
の眞言を以て切斷せんよ何んの仔細あるべきや 左衛門シテ其
九ツの眞言と云ふの事の序でに教へ呉れ玉ひ 辨イヤ是れ我
宗門よて念秘の大事あれども云わざれば身疑ふべし夫れ九字
と申するは所謂臨兵衛者會詢裂在陣の九ツなり是れを唱へて祈
る時の如何ある陰氣煩惱氣惡魔外道生靈死靈は申すよ及ばず忽
ち氷又熱湯を注ぐが如く莫耶の劍も何んぞ是れよ及ばん昔へよ
り是を以て無明の陰氣を退じたること多くの書物よも見へたり
其外種々よ恨み成したる者よ就て無明の功德廣大無量あり穴賢
こく私すべしと。と辨慶辨に任して答へければ宮燈を聞か
れ暫く辨慶の面を眺めて居たりしが 左衛門如何よも尊さ山伏か
な今日は能き行者に對面爲し暗夜よ燈火を得たる心地せり最早

武藏坊辨慶

候ひ暗れ候間た心静かよ通り玉い路次の勞れも候り一日二日
の修宿もいたすべさかれと勸進の行者たるよ由つて止むるに由
無し然し勸進の行者とあれハ勸進帳所持なるべし初帳よ付き
候よ山つて勸進の主意讀み聞かせ玉いと云われし時よ辨慶も是
れにはハツと當惑をいたしました劇場でも長唄でも能くやり升
が然んな者は元々ありやア爲ない筈の内より蓬萊の巻物一卷取
出だした杯と云ふことあり升が然んな者がありやア心配はし
さいので實の所辨慶が日記を付けてある帳面を取出だして讀ん
だのだ辨慶暫く當惑をしたが常陸坊海尊よワロりと目配せをし
て 辨筑前坊勸進帳と是れへ…… 常陸へ、エ。相手が常陸坊海
尊だ大膽な者で笈の内から蓬萊の一卷と取出だして恭々しく辨
慶の前よ出だした武藏坊辨慶此時よ一聲高く張上げて
夫れ熟々慮ん見ればだいをんさやうしやの秋の月は夜半の雲

武藏坊辨慶

と隠れしやうぢちやうやの長き日よゆめおどろかすべきひと
もあし、爰に中頃の帝ましく、聖武皇帝と申し奉るは最愛の后
よわかれて追慕の念やみがたく悲歎の涙かわくひまなく、故に
菩提の爲ろしやあ佛を建立し玉ふ、然るも壽永の頃兵火の爲よ
焼失しおわんぬ、かほごの靈場絶へなんことを歎き玉い信丈坊
長源よ命と諸國を勸進しおわんぬ、一志半錢たりども附賽の輩
は現世よての無明の樂みと極め、未來よての清き蓮臺の上よ座
さしめんと欲す、歸命頂禮勸進の趣意斯の如く

柏原親王承之

と讀上げた左衛門如何よも初帳よ附き候わんと云いつ、白木の
臺の上よ加賀絹を五疋金圓一包み、又富樫の奥方よりの白絹の袴
一具、伊家來の女房から櫛を納める者もあり、簪を出す者もあり、様
々の納め物をいたす、辨アイヤ方々、汗の一祈り仕るべし、各々の

武藏坊辨慶

先へ越させられ、日の高く、鹿登跡迄参られ、海尊、海らら
先達伊先へ参る、小先達が先立ちよ成つて二人三人づゝ番兵の並
んで居る所を、段々よ通つて行く、義經公の合力の事故よ、漸う安
心をして、跡より通る時よ番兵ヒヨイと義經公の顔を見て中よ見
知る者があつたる者ゆへ、甲アレ、那の合力こそ判官殿よ紛
れ無し。と怒鳴る、此時富樫聲を掛け、富、ヤ、此内よ判官と、を見
知る者ある上から、一人も通すこと相成らん。辨慶大いよ驚きま
してツカ、と前へ進んで來つたが、辨、ヤ、日己れ柔弱なる所か
ら、良もすれば判官と、の義經ヨと路次の妨げさるゝこと幾何ぞ
や……アイヤ、關守と、の是れある合力吾々下向まで、笈の儘お預け
申す、お預り下さるべし。預けて置くこと云やア關守も義經じやア無
ひと思つて許すであらうと思ふから、預けて行くと云ふんだ、相手
が富樫だ、左衛門如何よもお預り申すべし。ア辨慶、困つた預かる

武藏坊辨慶

と云われた日にやア詮方が無い、金剛杖を持つて義經公の前へッ
カツカど進み由り 辨、ヤヨ合力汝ある故同行路次の難義いくバ
くぞや、ア、一腹立ちや〜と金剛杖を振上げて置てボカリッホ
カ〜リと殿打る、加減を爲て殿打れば相手が富樫故早くも其心中
を察し升又由つて意の内を覺られて成らんと思ふから笠に掛
つて殿打る、痛いの痛く無いのと云つて義經も驚いた 辨、率その
こと我手又殺し呉れんと諸、振被つた様子を見て富樫も心中よ
いろ〜と考へて見ると氣の毒な由だ、頼朝から沙汰があるか
ら詮義の爲て居るやうなもの、義經へ人の功あつて落度の無
い人だ、辨慶の力量で殿打られる、義經も痛からうが打つ辨慶の心
の内を考へて見ると嘸かしと思ふから 左衛門、アイヤ先達暫く杖
を止め玉ひ、益ざらん番兵の疑ひより尊き山伏に疑ひを掛け、路次
の妨げいたして申譯あし、許し玉ひ、最早疑ひ晴れたれば此所を通

武藏坊辨慶

り玉ひ。辨慶之を聞て心中よ悦ぶと雖も猶も荒々しく 辨、ヤヨ合
力汝許し難き所なれども大禮那の仰せある故命だけは助け呉れ
ん先さよ参れヨ。と言つて義經の襟髪を引搦み關門の外へドーン
と放り出した、一同の者は遂て、關門の外へ來つて是を様々に介
抱爲して主従此所を出立をすることと成つた、辨慶心の内よ 辨
モ一乃公一人あら平氣だと思ふからホツと一息吐き、念數を取つ
てサッ〜と揉立て、大音を揚げて 辨、日本第一大龍權現熊野の
三社大權現加賀の白山大權現、近江の八大金剛童子、京都坂本山王
二十一社三田又白月大明神其外須らく日本の六十六國の大小神
祇又謀みて申す、願くバ我合力と此經の功德よ由つて義經主従迷
ひ迷ひて此安宅の關に來たり當關所の人々よ功名を爲さしめ玉
ひ、功名を爲さしめ玉ひと祈りければ番兵一同は大悦ぶ、辨慶心
中よて 辨、何卒此關所を首尾克く通りたる候に無事よ吾々主

武藏坊辨慶

從を奥州高館へ落ちさせ玉ひく。と頗り祈る、祈り終つて番兵
を送り出だされ早々出立ち、切て一同一里ばかり來つて岩市の觀
音堂まで辨慶の來るを相待つて居る義經公の御身体を様々に介
抱爲て居る所へ辨慶來つて夫と見るより金剛杖を草原へ投出だ
して大地へ辨慶へ、ニ。平伏を爲す。辨慶も今日は如何なる悪日
なるか如何に計畧とは申しながら重恩の御主君を打ち奉り辨慶
の臂癩るゝばかりに候、安々と君を奥州へ送り奉り秀衡公も御對
面のいたしひ上の武藏が五体八裂に相成り候ども争でか君を恨
み奉るべきか、夫れ迄の君の体と召して我身体は暫く吾も預け
玉ひ。どさしもの辨慶數行の涙も君たりける、此時義經容体を正し
て辨慶が雨の手を取つて御自分の額も當て玉ひ。義今日汝無か
らせば吾等とはじめ一同の者の安宅の關へ戸を叩すべし、唐の文
白の慈母も打たれて慈母の力量の衰へたるを哀き、義經の汝が杖

武藏坊辨慶

の下は勢力の熾んなるを悦ぶ。う。と仰せられた
今義經が仰せられた文白といふのは何ういふ理由だと申し升と
此りやア唐の人で子供の内から悪戯で、詮方が無い、所で追々
成長をして三十才も成りました時、何か粗忽をして此時はお
阿母が餘まり腹が立つから毆打ると云ふと、
出した。母此奴め人を白痴にしやアがつて子供の内は貴様が粗
忽をした時、
やアがつて、
怒つた時、
云つて泣くんじやアありません、
時、
母さん、
母さんが

武藏坊辨慶

したと云つた、
義經は是れをお引きなすつて唐の文白の慈母の杖は打たれて慈
母の衰へたるを歎き又乃公の貴様の杖は打たれても實は痛かつ
たがア、未だ辨慶は是れだけの勢いがあるかと云つて悦んだと
いふ所を仰せられたのであります此時義經言葉を次ぎ義是よ
り如何ある難儀ありとも汝の力量を以て安々と奥州へ送り呉れ
よと仰せある先づ多機嫌も直り辨慶立上がりまして又々一同よ
て此所を出立をいたす道を早めて急ぎ玉ふ程は加州竹の端にと
着し、此所にお泊りあされ翌日の朝は越中路は掛りまして此所
よ一ツの關所あり是れを通るは又面倒なりとあつて此所を通ら
んやうは船を乗りて越後路は差掛る花園の觀音堂は着しました
此觀音堂と申すは往古八幡太郎義家奥州の逆徒宗任責任を征伐
の時此所は於て護本尊の觀音を祈り玉い夫れより奥州を首尾

武藏坊辨慶

克く平定せしめて歸路此へ移立寄あつて堂宇を建立せられたり
と云ふ最も靈驗あらたかある觀世音であります去れば此夜の此
所は通夜をあされ武運長久を祈り、切無い時の神頼みと云
つたもので年を取つた人の神信心の好い時は信心をする、若者の
神信心のイザと云ふ時で無ければ信心をしない、老人の何か好い
ことがあると甲何様の利益だ、早速移参りに行あけりやア成
らんと云ふ、若い内は然ふじやア無い、好い時は神様杯のこと
思やアしない、少し悪く成つて來ると俄か神信心を始め、乙
斯ふ悪く成つちやア詮方が無いから堀の内へ柿を絶うか知らん
杯と云ふ、扱て此堂へ這入つて辨慶はじめ一同人々の在方へ食を
求めに行くことと成つた、跡は義經公は北の方へ増尾權頭主從三
人、然るは此所の漁師百姓是れを見付け、早速越後國分の領主上月
權頭は此事を届け出だした、此權頭の關所は此先の直江もある、

武藏坊辨慶

所の者より届けを聞て見れば扱て捨置かれんから漁師百姓郎黨
を始め二百人ばかりを引連れて乗込んで来りました、義經公夫と
見るより堂より出で、義彦邊達何れの人にて何事よて騒ぎ
玉ふや。權頭進み出で、權吾等の當國の領主上月權頭あり客僧
達よ何れの修驗よて候ふか。義經進んで、義左様……と云つた
がトツチタ返答よ差支へたの羽黒と云をうと思つたが程近い
所ですから直ぐ尋ねに行かれて成らん、義某し其の熊野よ
り羽黒へ參詣の者あり、先達はじめ一同の用事あつて近邊へ罷り
越し候故後刻お出であるやうよ。と云ふ折から一同立歸つて来て
夫れと見るより急いで多くの人数を辨分けて堂の内に入り何ん
であると尋ねると義經より斯様く、と云ふ事を辨慶又次郎を物
語る、辨慶坊尾權頭に打向ひ、辨吾々共の信心の筋あつて三十三
体の佛を羽黒へ納めに參る者でござる。上月權頭暫く考へて、

武藏坊辨慶

身達を尋る此度鎌倉の、弟判官義經殿奥州へ下向の
由、右よ付途中よて召捕り差出だすべくとの下知あり、役目故一
度の改め申す然し吾等の佛教を知らず、死んや山伏の古事杯の聞
ても分らず然りと雖も一通りは尋ね申さいれば役目立ね、同詮
すが先づ第一よ山伏どの如何なることよて唱へ候や、辨去れば
なり、險山幽谷に別け入り、惡獸毒蛇、其外往來の旅人を惱ます山賊
を退治、万民の爲に身命を願はず、天下泰平の政事を助く、故よ腰に芝
打を佩き手よの金剛杖を携へ、武門の人の如く肩へ袈裟を掛け念
敷を爪纏り口よの經を讀み無智蒙昧の女童子を教訓なし、現世を助
け未亦を助け、暗よ天下泰平の政を補けん爲夜と無く日と無く山
に伏し野よ伏して六十六州を廻る、由つて山伏の名あり、權扱て
も尊き宗門かな、其宗祖は如何ある者あるや、辨、我祖は役の正覺
あり、此人殿上人より出で、國家の爲よ道無き所を切開き、食無き

武藏坊辨慶

案よりては荒行あし然らば我輩正覺の未たる者は苟も身命を惜まず其行者を徒らふ止むるは身こそ佛敵なり山門の法より比すれば其罪輕からずハツタと白眼ひ其有様は無禮なら切棄てべきの有様なり組子の面々は是を見て吾れ知らず跡へ退がる又漁師百対等の二人三人づゝ退きて殘るは僅か二十人ばかり皆上月の郎等なり楳頭も今は詮方無く構切て一骨先達なり今は疑念も晴れ候今宵は我陣屋までお宿申す辨イヤ仰せ辱なく候得共道を急ぎ候間だ是れまでお別れ申す楳然らば供物として船一層参らせんと早速船頭も申付けて船を海岸もやわせ一同別れて楳頭は早々引取る辨慶先立ち船に乗らんと云ふ義經公引留め萬一船中にて多くの兵船にて取巻かれたる時如何いたす辨左様あこと候はず必し學者にてありあがら何れも知らぬと申して山伏の古事を聞かざるの吾々を義經主従と

武藏坊辨慶

知るが故あり君世も出で玉へ彼を重く用ひ玉ひ然らば……と一同も安心して船へ乗込んで見ると酒肴が充分も入れてある一同も悦んでもやいを解き船を出すことに成つた借も春の夜の明け易く東雲の空晴れ渡り曉の月の西へ日の東天も昇れば海尊船を取つて押出だし直江の港を遙か洗れつゝ觀音ヶ嶽より吹下ろす風も追ひれて沖の方へと乗出だす折しも北の邊りに妖雲山の腰を離れ立登る様子片岡が是を見て片岡の習ひか知らざれば彼の雲の風雲成らん。と云ふ間も程無くゴ……ゴ……ッ……と北風吹出したるよ由つて辨慶の聲を揚げ辨向ふよ遙かに見ゆるの佐渡が島なり那の島へ船を寄せよと聲掛けられてて心得たりと一同船を寄せんと俄く然るよ風浪益々強く次第次第吹流される様子一同の者は生きたる心地無く辨慶此時空を打見やり辨天如何なれば吾々主従を憎み玉ふて斯くまで苦し

蔵 坊 辨 慶

め玉ふぞや。義經此時海面を白眼み 義如何入大龍王確よ聞け
日、義經の我日本の國主上の命を輕んじ、平家の大敵を西海
に破り、今泰平近きよ臨み吾の其功を賞せられず却て北條梶原の
讒言の爲に義經主従街又彷徨ふ、吾も於て罪無し然るに罪無き義
經を苦しめ北條梶原が如きを其儘も差置くの何事あるぞ、憐れ義
經の誠心を知らば此船を陸路も向け日と云ひつゝ、白柄卷の太刀
を龍神も奉るゝ海中も投込み玉ふ北の方も紅色の袴も鏡を添て
投入れ玉ふ、誠心龍神に通ぜしか順風と相成りし故一同悦び急ぎ
船を押し切れれば日はハヤ西へ落ちて海面青空を敷たるが如く雲
間も漏れる月星の最と静かび見へければ一同蘇生の思いをな
し曉近き頃よ至りて何所とも知れざる陸へ着しければ船をもや
つて陸よ昇り見ると多くの漁師が居り升から 辨アイヤ此所は
何んと申す所である。と問へば船頭怪訝を顔をして 甲ハイヤ此所は

武 蔵 坊 辨 慶

ア寺泊りだアね 辨ア左様か辱け無い。是より一同上陸して 辨
然らば最早高館へは程近し、某しは伊代参として一人羽黒へ参詣
せん我君はじめ各々は清川にて待ち玉いと云いつゝ、早々辨慶一
人よて代参も行くと成つた、一同は清川を差して急ぐ此清川
と申すは熊野岩川羽黒の清川と云ふ名高き大河でございます
此所で一同が辨慶の歸りを相待つと云ふ儘かばかり立つ内は辨
慶立歸り、夫れより揃つて會津へと出立する、爰も北の方の伊羅
より奥州乗込みの一席は餘り長く成り升から次よ……

第 七 席

此時辨慶義經公に打向ひ 辨我君是れより平泉までの三日路よ
て候、然し瓶割山を越て直ぐは安巢川へ出でたまへば二日路よ
候、二日路の代りよ道路險惡にて難所多く、君何れより涉越しあ
され候哉。判官聞玉いて 義經長度の旅路に飽きたれば少しの難

武藏 坊 辨 慶

所の苦しからず、一日も早く高館に着きたし、辨、然らば瓶割山を
登るべし。翌日一同瓶割山へ掛る、實に聞しにまさる難所であり
ますから一同昇り兼ねる所がある、山又山へ入り又ハ半腹へ掛る
スルと北の方の俄か又心苦しく、伊産の氣色、是れ女の大役、男ハ
かり故、只一同「ゴク」するだけのこと、辨、産所を掛へんと尋
ねる、山奥へ一町ばかり分け入ると至極宜しき所がございましたか
ら、圖ある大樹の下へ敷草を爲し、是れハ伊産所の形狀を掛へ、漸う
伊産所へ上げる、然るに北の方の苦しき伊産、又て人々又打向い
北「コレ、衆房曰、汝と我君あらでハ叶わん、夫とても本意ハ候わね
ど、女魁の是れ又あらざれば、掛る無し一同ハ「ヤク」立退き玉い
一同口を揃へて一同心得て候ふ。此方ハ來つて様子伺つて
居る義經此の様子を熱々見て、義始より斯くどの知りて、い
れど捨置ぐも不慮の至りと召遣來り、來りしが此道すがらの干

武藏 藏 坊 辨 慶

幸万苦營へる者も無し、偏ハ神佛の加護ハ由つて今高館へ近く成
りし、山より夫れ迄待たれヨと祈りし所の甲斐も無く、此所まで分
婉せん、この悲しさヨ。指尾權頭仰せを聞て、衣の袖を濡し、男泣き
又落涙、及びました。此時北の方は苦しき息をホツと吐き、北
かある水一口、口奥へ入れヨ。辨、心得て候なり。辨慶是を立出
で、諸々を尋ねる、ハヤ暮近き火とぼし、頃露さへ深き深山なれど
水ある所も知れざれば谷へ下りて、峯へ昇り、那方此方と尋ねれど
したる水の氣さへ無く、只聞へるハ鹿の遠吠、猿の泣び、思はず歎
息なし。辨、ア、一疎ましや誰あらうぞや、清和の末の御孫、君伊産
生、まします、只一滴の水だにも得るに難きハ何事ぞ、ア、情け無
きことなれ。鬼の目、涙とやら辨慶怒つて手又持ちし金剛杖、よ
て傍へある岩角を丁と打つと、不思議や清水とばしりて、邊をひ
たすばかりなり、辨慶是を見、大きに悦び、ホラ、貝よて水を汲み、漸う

武藏坊辨慶

夫れへ持参いたして一同も勇み立つて是を差上げることよ成つた然るも北の方へ絶入り玉ふ耳も口寄せ辨慶大音を揚げ 辨水一ト口開し召せ一同も聲を揚げ 一回伊氣を確かよ持たせ玉ひと言ひつゝ口中よ注ぎ入れる主従一同よて聲を限りよ 一回伊心確かよ持たせ玉ひと丹精爲す内よ北の方へ伊心注ぎ玉ひしが判官殿のお手を取つてハラと涙を流して又々絶入り玉ふ辨慶氣を勵まし 辨ヤヨ兼房心弱し其所退けヨと云ひつゝ北の方を起し奉り 辨南無八幡大菩薩願くハ伊平産を爲さしめ玉ひ伊無事よ分娩あれかしと一心籠て祈りましたから漸らよ伊息を吹返し玉ひ 北ウナァー……と云ふ途端にマギヤァー……初産高く伊誕生一同悦ぶッレ伊誕生ヨと立騒ぐ辨慶掛け 辨名々静かよ召され伊氣分に障る静まれ義經公の赤子を抱上げ玉ひ木の間に漏る月陰に伊顔を凝視玉ひ 義ア、如何なる宿世の因縁や

武藏坊辨慶

此幼子の義經の子と生れ母の胎内より虎の尻を踏み毒蛇の口に望むの危難も出逢ひ出産のときに望んで猪鹿の子よひとしく樹下石上よ初聲を發する今斯る丹精をして末よ憂目を見せんより物心無き内よ冥土に旅立ちさせ申さんど落涙なして仰せある夫を聞て北の方へハッといかり泣玉ひ 北這の情け無き我君の伊誰かな會々人世界よ生れ出でたる者を月日の光りをも見せ玉わや聞から聞へやり玉ふどの何事や生れながら父上の御不興を蒙ひることの口惜しさヨヤヨ兼房其子を是れへ……是より都へ歸るとも此子を育てずよ置くべきやと心の矢竹よはやれども最と苦しくぞ相見へたり辨慶 辨御心を確かに御持ち遊ばせ此若君の辨慶が御預り奉ると云ひつゝ辨慶抱き上げ 辨恐れながら若君よ御果報の伯父鎌倉殿よ似させ玉ひ智畧の父君にあやかり玉ひ武勇の懼りながら此辨慶よ似させ玉ひ御壽は千歳を保ち

武藏坊辨慶

玉ふやう武藏御名付け親と相成り申さん瓶割山の龜と鶴の千歳
を加へ、御名を龜鶴君と祝し奉る、と云ふ義經公はじめ一同大き
悦び玉ひける、此御子様が後と經若君と申上げ奉る、ハヤ東雲の明
鳥里とあらね、啼聲も耳と響かぬ山々も明らむ様と人々は互ひ
と面を見合して先づ御二方とも御無事こそ芽出度くの辭、
し岩を砕いて滝と爲し笈の中より鍋米等を取だして落葉を集
めて炊く内に少しく經過て漸々又御飯が出来たから皆一同食事
をして是れより一人里へ下つて一疋の馬を儲けて北の方を乗せ
参らせ、御抱申上げて其日の栗原寺と着し、辨慶の若君を懐中へ入
れて別と乳も養上すと雖も温順く遊ばされ、扱て此所より龜井
片岡兩人の平泉へ使者に遣わすことと成つて此事を聞き秀衡大
きに悦び、早速又和泉の冠者を出向ひと申付ける、此時佐藤庄司も
同道いたして白河の關所へ出張をいたしてお出でを相待つ、此頃

武藏坊辨慶

の白河と申すの當今の白石のこととございます、是れ奥州の咽喉
首あるが故と是れ迄出張いたした、權太郎秀衡も此關所を堅めさ
せるよ、無双の忠義の者で無ければ成らんと存じましたから庄
司元春と此關所を堅めさして居りましたので、此所に高札が立つ
てゐる其文と曰く
修業の山伏と接待宿をいたすものあり
としてゐる是の義經主従が来るよ、都合が宜しいやうと秀衡の
斗ひでございます、扱て主従十三人よ、此所へ乗込み來たる、早々
庄司出向ひ申しお案内をして一先づ己れの屋敷へ移連せ申上
げて御一同を席上へ直し、遙か下つて庄司、庄司の妻、昨年死し
たせし故庄司の次席が娘、是は嗣信忠信の妹なり、其左右の今年
十九才と相成る春藻、是は嗣信の妻、方々の十七才忠信の可成嫁、其
外侍女腰元まで一同罷り出で、夫へ居流れる、此時庄司 庄司

武藏坊辨慶

や申付けたる品早々是れへ……侍女扱ひましてございます多
くの女中が酒肴の用意が出来て居るのだから一同の前へ並べる
結構なる所の山海の珍味吾々が來客の時に用ひるやうな天麩羅
や鮎の差身との違ふ善盡し善盡したる品々扱て一同其所で
酒宴が始りまして宴中へ至つた時庄司元春膝を進め義經公
に打向ひ庄恐れ入り候得共酒宴暫く中止仕る申上げたき儀
坐候夫の外ならず明日主人秀衡の少しも早く君の御無事なる
顔と御覽さされたしと度々の御迎ひ殊よの主人最早老年は相成
り物事急と思ひ立ち候其思召入らせられるやう義ハア左
様であるか委細承知いたしました庄夫は就き君は申上げたき此
所に扣へ候う女どもも某しの娘遊みともうすものでございます
又た私しの左右もひかへ居りますもの右の嗣信の妻春藻と申
すもの左りの忠信の可成嫁春風と申ずるものにもあります然る

武藏坊辨慶

又最前より君の御入りと聞て女子共只皆ソワくど仕り居る夫
と申すも彼等兩人の良人嗣信忠信の君の御供の内は加ひり花々
しく東國差して下りしに今御歸りの時當り兩人の者も此席に
連るべきの所姿さへも見へ申さず夫に付き心許無く存じ居る者
と見へ候右兩人の者君の御席に連ならぬ定めし陣中も於て御
勘氣を蒙りしか未練も逃隠れいたしたる者か承わゆるも恐れ多
く候得共兩人の妻未練なる所より伺いたき由を願います固より
未熟の件ども如何なる次第にて當座に連らぬか御遠慮無く御聞
かせくだされたく……と元春兩眼も涙を浮めて御面作つて云い
出でける嗣信忠信の妹の遊まで膝をすゝめて詰り密すれば義經
公は此時ハツと當惑して暫く黙然として差俯向く頃あつて頭を
掻げ義コリヤ辨慶汝早々物語れ辨慶ハツと平伏して心中は
辨我君の風が悪るいや御自分も云い憎けりやア乃公だつて云

武藏坊辨慶

い憎い何んでも貧乏聞と云ふと乃公の方へ搦ぎ込んで来る何う
しやう。と是れも差俯向いた此折一同人々も酒の醒めて仕舞つて
開け渡つて扣へたり所へ春藻の味を進ませ 春藻は父上のお叱
りも顧みず恐れ多く候得とも方一人……と云いさして跡の
得云わす差俯向く義経再び 義経は武藏夫れにて汝物語れ
辨ハ、ア。仰せを受けて武藏坊膝立直して扣へたれ、是れより一
場の愁歎場も相成りますが鳥渡休息……

第八席

武藏坊辨慶は膝立直し軍扇取つて 辨さん候、然らば兄弟が忠義
の程こそ聞かせ申さん去ぬる頃我君はじめ我々共迄花々しく富
國を出陣爲し上州野州と鞍押し揉みに揉んだる其勢い扱て勇
ましく聞へける、我君に因む武藏の國隅田河へと押出だせハハ
兄弟の駿府まで繰出し玉ふと聞し故猶旗の手を閃かし進む駿府

武藏坊辨慶

の浮島の廣野に滿ちし十万余騎、吹抜きバレン旗差物、小細馬印し
合印し落ち無く揃ひし有様の三國一と思われたり、夫に屈せず先
手又向い只今奥州高館より御舎弟九郎義経公參陣いたして候ふ
と申す間もあく案内にて兄君へ御對顔の其時、君の左右も副信
忠信後よの吾等をはじめ一同が星の如く居流れたり、此時兄弟
の早くも頼朝公の御目よ留り左右よ扣へし若者の最と逞しき武
士あり夫れも家來も候ふか、我君答へて申すらく、是れこそその秀衡
が幕下の臣佐藤庄司が悴にて副信忠信と申し候と仰せの時、兄
君の仰せよの扱て、優よやさしき武士よて未頼母敷き者共な
りと伊太刀一振りづゝを賜りて猶吾々へも夫れゝの御引出物
を賜つたり、其時木曾殿都も亂入恐れ多くも帝より義仲征伐の給
旨を下し猶も先手の惣大将金の采配、龍頭鉞形打つたる兜よの緋
よ威したる伊鏡よて、鴻の羽三ツ葉の尖り矢の森の如くよ背負ひ

武藏坊辨慶

なし滋藤六分の弓を左手に確と持添ひ玉ひ其十万を率なす大
將どの我君のいさをしあり夫に頼いて吾々まで實に輝かす鏡の
袖扱て宇治川を打向ふ佐々木梶原前後の争ひ浪立ち花の小島々崎
より名代の重忠打出で橋の上より熊ヶ谷平山難無く宇治川を
打破りて木曾の粟津を滅び玉ふ此勢ひは押寄せよと猶も進んで
嶋越鉄柵ヶ峯の絶頂より平家の内裡へ飛下り遂平氏を追落し屋
島檀の浦の船戦さ此時平家二名の高き能登守教経が人にも曳け
ぬ強弓より十三束大尖り矢……三ツ伏掛けて半月の如く弓絞り
我君の馬面を向ひ夫は波らせ玉ふの當手の大將義経と見たの辟
目か如く申す某しの平家も強弓曳きと名の高き能登守教経なり
美事吾等が矢先きを受玉へとアワヤ切つて放さんとす我君避る
暇も無く今や教経が矢先きと掛り玉うかど皆手に汗を握る其時
早く彼の時遅く教経兵と切つて放つたる時君の馬前も立塞つた

武藏坊辨慶

る者こそあり何かの以て堪るべき胸板より羽の鞍までも射通し
たり馬も堪らず真ッ逆さま此忠臣の何者ぞ佐藤庄司が砕にして
同姓佐藤嗣信あり此時敵も味方もおしなべて感せぬ者の無かり
ける思ひ出だすも涙の種可惜武士散らしたり……然し忠義の末
世の鏡は映しく存するあり。聞て春藻の進み寄り 奏ア、一能く
討死を遊べしました然し此度の下向みの子供の内は在すかど
今日迄も無事を祈りし神へ對して勿体無い嘆殘念……イ
ヤア御嬉しうございませうと云ひつゝ涙を押し包む体はいぢらし
く見へよけり此時春風進み出で 春姉様の良人たる嗣信様の末
世も朽ちぬ名を懸けて花々しく討死は羨しく存じますシテ
テ私の良人の其場を逃げでもいたしましたか又是不興でも蒙り
ましたか流矢でも當たらせられ名も無き討死いたしましたか
聞かしてくだされ武藏さまと云ふ間も無く其所へ乗出だす妹健

武藏坊辨慶

も諸共に 蓮一人の兄の生死の程多聞かせ下され辨慶さま……
と武藏の前に進み寄る元春見兼ねて 元コリヤ扣へヨ武士の姿
へ忘れしかど叱る者も口の内此時辨慶一騎張上げ 辨さん候左
候兄又劣らぬ忠義の働き多聞かせ申さん。と膝を進めて言出でま
したが一寸此所で辨慶の言葉又變つて看客諸君も桃葉が申上げ
ます、前々回も申上た通り忠信の傳記の扱く積りでありました
が斯ふ成つて見ると何う爲ても申上げおければ成りません。由
つて鳥渡畧いたして忠信の成行を口演いたします
却説忠信の吉野山中五重の塔に於て義經公をはじめ主従を落し
参らせ、己れ義經を名乗つて吉野山の荒法師覺範をはじめ多くの
法師を打退け、爰又自殺を遂げやうと思ひました。が死を留り氣を
取直して吉野山を安々と下つて免れ、て京都入り、京都三池

武藏坊辨慶

通り小柴入道の娘小車に己れが君堀川に御繁盛の頃かくまつて
寵愛して居た娘です。から是れへ來つて隠れました。然るも小車
於ての 小車君よの克うこそお出で又成りました。君よ別れて其
後の片時も忘れ兼ね寝ての夢覺めての現幻の如何のしやうと思
つて居ました。が何れにお出で遊ばすことか、多目又掛ることさへ
出来ず神も祈つて今日が日までお待ち申して居りました。が今日
ゆくりなく是れへ移越しあると、偏又神佛の加護も由る所、お嬉
しう存じます。と流石の斯んなことを爲て居る女だから調子も克
く酒肴を取出だして充分な馳走をして二階へ寢かした。然るに此
女の今何んとも無いかと云ふと義經京都を落ちた後に帝守護の
頼朝公の命を受けて梶原源三が仰せ付けられました。けれども梶
原と來ると義經の來來が骨肉をそいで喰をうと思ふ位。いだか
ら北條梶原の身内と云ふと何うも未だ餘炎が醒めまいから怖く

武藏坊辨慶

つて京都へ這入れない、其所で源太景季が仲の梶原五郎兵衛景宗
を出役さした、六條堀川へ屋敷を持たして何爲る年わかでありま
すからいまで、帝守護の梶原五郎兵衛景宗が爲て居ります、去れ
ば此小車の景宗の當時世話を受けて居ります、如何に妾をするの
が商賣でも敵味方とも論ぜず妾と成ると云ふ、小車も薄情な女
であるスルト、此女の忠信の時より此方から惚れた理由で、無い
ホンの慾徳盡くで妾を爲て居たのだが、何う云ふ機みか景宗より
小車の方から戀着と来て憎からず思つて居た、今忠信が尋ねて來
たのを景宗に召捕らせれば、景宗の大功と成る、己れも惚れて居る
男も功名を爲したいと思ふ所から充分忠信も酒を飲まして居る
足差足二階へ昇つて行き、大小を三味線糸でナヨイと扱け、い
やうも縛つて戸棚へ放り込んで、ピンと錠を下して密と寐息を
伺つて家を振出だし、六條堀川の景宗の屋敷へ來て、小車私し方

武藏坊辨慶

へ忠信が落ちて來て、今二階と寝かしてあり、升から早々御召捕下
さし、と云ふことを注進を爲ました、五郎兵衛景宗の帝守護の爲
出張を爲て居るのでございまして、然んな浴人を捕へる役で、無
いが兎に角頼朝の命を受けて出張を爲て居る以上注進をされて
見れば、閉棄てよ成らん、出張を爲なければ成らん、だが此景宗と云
ふ者の一見識ある者、氣の毒さの忠信、如何に妾といふ云ひあから
小車と云ふ奴の憎い奴だ、壁へ儘かな内でも己れが世話も成つた
身体、其人の落目に成つた所でもつて注進をするとい何事だ、餘り
と云へば情無き仕方、ヨシ、其儀なりせば……と景宗の悦んだ
る体にて小車に向ひ、景、好く注進をして呉れた恩賞、何れ鎌倉
殿より興へるであらう、早々出張をするから知らん顔をして宅へ
歸つて居る。と小車を返して、家來共、内意を申合めて人数と權め
て景宗は小柴入道の娘、小車の宅へ出張をして家の廻りをヤリ、

と追取圍んだ、一同の家四方を取圍んだることよて大音を揚
まして 甲「ヤー」 此家よ佐藤四郎忠信あることよ注進の者
つて確かよ知る、尋常よ繩よ掛るか左無く生捕んか如何よ如何
にと呼つたる時よ不圖目を覺したる所の忠信、ムツクと起上つて
見れば大小が無い吃驚いたして居ると其内景宗家來一同の
甲「ヤー」 此家よ忠信あるとを當家の娘小車の注進よて知つた
り 乙「當家の娘小車が注進よて出張いたしたもど怒鳴つた家
居た小車の驚いた内所で知らしたのに其奴を大勢よ怒鳴れりや
ア大勢、是を忠信が聞たから傍への戸棚をドン……と足を揚げて
蹴た、如何程錠が下りて居たつて忠信よ蹴られて堪るもので無い
忽ち戸がビツと折れましたから中から手早く取出だしたる所の
大小を腰へ打込むが否や三味線糸で擲けてある奴を引切つてト
ン」 与「」と楷子を下つて來ました、組子の面々ハッレ下て

來たと云ふと四方からドヤ」と家内へ乱入いたした、忠信かた
へよあつた碁盤を右手に振上げると其勢いよ恐れて人数はドッ
と左右よ開く、小車は忠信が下りて來たから吃驚して表の方へ逃
げやうとするよ五郎兵衛の組子の者は胸を捕へちやア家の中へ
突込む、表口から出やうとすると裏口よも組子が詰めて居て家の
中へ小車を突戻す、出ることが出来ない、ヒヨロ」して詮方が無
いから如何の爲やうと思つて居ると忠信は吃驚度此方よ目を注い
で 忠「ウー」 憎くき女郎……と云いながら引抱へると云ふと小
車の眼はピヨン」と飛出して仕舞つた、垣根の外よ居りまし
ても暗がりよ立上つて居るから確かよ見へる表の方を見ると火
事かと思ふやうよパーツと明るい、松火を万燈のやうよ照して居
り升、此時忠信様側へ立上つて大音を揚げ 忠「ア」イヤ當家の娘
小車の注進にて憶かよ知ると云ふ情けある言葉辱け無し、今宵向

武藏坊辨慶

いしは何人なるか姓名を聞かせ候へ 景宗ヲ、梶原景季が一子
五郎兵衛景宗出役いたしたり 忠扱ては梶原景季の一子五郎兵
衛殿までおわせしよあ情けよ向ける 及は無し此所よ於て忠信美
事よ切腹いたさん、誠の武士の切腹の有様、後世の龜鑑よいたせ
様側へ立上つて突然大刀を引抜きアツリと腹へ突立つて右手の
方へとコゝ引廻した、眞實の切腹、グイと引抜いて左りの手に持直
して右の手で腹の中へコゝ突込んで腹をズル／＼と引摺出し
忠、ヤヨ誠の武士の肝を喰つて強膽よ成れヨと云ふと龜み出し
た腹をコゝと景宗の方へ投げた、景宗バツ…… 体を開いたから頭
の上を通り越して後よ居た二三名の新兵の面へバツ 甲ソイツ
生温けへ…… 弱い奴があるもんで此臍を打付けられたんで氣
病みで三日煩らつて二三人死んだ奴があるよと云ふ、亂世の世の中
よも斯んな者があつた、腹てのこども忠信の又刀を右の手は持直

武藏坊辨慶

してヤツと云ふと自分で自分の首を刎ね、其儘よ佐藤忠信死んで
けり、扱て其首をバ京地に於て鹽漬けよして早々鎌倉へ送つた、鎌
倉よて頼朝に於て最後の話しを聞て 頼何のやうさ首だか然
ふ云ふ英雄の首を見たいと被仰つた、然るよ畠山重忠が 重君の
仰せでござるが夫りやア宜しく無いと云ふのを何んでも見た
い。このこと據ろ無く頼朝の實檢よ直して鹽漬けよいたした首を首
桶の上へ据た、頼朝扇を開いてコゝ己れの顔よ當て扇面の間だか
ら見ると眠るが如き忠信の首、頼朝の方へ向つてバツト目を開い
て齒を喰縛つてハツと白眼んだ、頼朝ハ凄然と爲ました 頼ア、
見苦しい下げいと被仰つた、由つて早々此首を下げる、流石ハ重
忠ハ剛い者、斯くあらんと考へて居られたのでございませ、重忠早
々京都へ沙汰をいたしました忠信の剛骸を取寄せて此鹽漬けの
首と胴骸とを一緒よして鎌倉へ葬りよましたが未だに歴然として

武藏坊辨慶

基盤忠信と云ふのがある、之れ皆、畠山重忠の情けでございませす、去
れバ忠信の終りの斯の如く愛が結局でございませす
借て辨慶再び言葉をつぎ 辨、先づ屋島樓の浦又平家の一門を亡
して宗盛以下を生擒つて勇み立つて引き上げる道も折ふし腰越
にて我武者押を止めし、北條梶原我君の武勇智略に恐れし故兄
君頼朝公の伊前を取持つて有ること無きこと讒言なし、之を信じ
て鎌倉へ入ると許さぬ愚將の頼朝是非無く夫れより引返して京
都又入りて帝又奏問、主上も最久懸れみ玉ひ京都の守護をおうせ
付けらる、扱て堀川へ館を構へ、市中の警衛帝の守護、忽かせならず
民百姓君の徳四海に溢れ上下均しく尊敬爲し、之を嫉みて謀叛
と言立て、鎌倉殿の仰せを受けて土佐坊昌俊堀川館へ夜討を爲か
け其時吾等過つて遂に昌俊を抱殺し、其罪君又及ばし遂に都を立
退き玉ふ、懸れや大物の難風よて供船残らず、扱り只残りし御

武藏坊辨慶

座船のみ是非あく陸へ上り玉ひ、吉野山へ入り玉ふ、此寺よて
名代の悪僧、與川の善次覺範はじめ吉野法師三百余人押寄せ來り
て我君を討奉つりて鎌倉殿の恩賞又預らんと黒み渡つて見へた
れバ愛ぞ大切と仰せの時君の具足を賜りて猶諱名までも頂戴な
し、吾こそ清和天皇五代の孫左馬の頭義朝の一子伊豫守源の義
經之又ありと群る中又只一人與川の善次覺範、柳倉の法橋をはじ
めとして四方八方に切捲りたる其人こそ佐藤庄司が末の男同姓
四郎忠信とて天晴れ名譽の武士あり、揃ひも揃ひし兄弟が君又代
りし討死の誰も及ばぬ忠義の鑑み、又あるまじき方々あり、思ひ出
すも涙の種、伊許しあれヨ方々……と言ひつゝ、辨慶軍扇を押し出
て俯伏ける、春風顔を上げ衆ねしが漸う涙を拂ひ 春、扱て此
世又居賜わぬか、今一度伊目又掛り一ト言でも承わつて又申上げ
たきことだも致々ございませしたるの、何んといたして宜しう

武藏坊辨慶

ございませう。と泣き伏す有様も義經公を始めとして居座
びましたる鬼をも喰ふ英雄も涙を胸よ止め兼ね鼻をかむやら座
を立つやら咳も紛らす者もあり袖を濡らさぬ人も無し、此折進
み出で 選り二方とも揃ひも揃ひし餓さよ武士の譽れを現し
玉ひしが妻の女のかよひさよ父上又の我君へ何んぞ忠義を立て
ませう。と云ひつゝ泣伏したり此時庄司聲荒く 庄見若し
の女ども其處立てヨ 三人長りました。と三名の一同立つて奥へ
引取る之より又々酒宴と相成る、庄司義經公も打向い 庄娘ども
の粗末の働さ御詫を致す。暫く経つて庄司侍女を呼び 庄コリヤ
春藻春風も仕度を直して侍前へ罷り出で侍待遇申せヨ。と申付け
る 侍女長りました。と其所を立て入れ代つて雨人の妻侍前も出
で、見れば雨人共尼の姿も一同是をばてアツ……と只驚くばかり
り雨人の手を突へまして 雨人父上に伺わすして其の姿も値者

武藏坊辨慶

と申召すでありませうが是れ迄の不孝の罪の許し遊ばし下さ
ど其儘雨人共差俯向く有様の最としほらしく相見へました。元
も併りのことよ果れ果て暫時言葉も無く此時判官の 義ア
……番の花を此儘に咲かすで敢らす義經が罪、元春許し呉れヨ。と
伊言葉の下に庄司元春 元春共の覺悟の上は候得共只親の愚痴
みて二人の嫁を不慮の至り……。辨慶歎息爲し 辨ハ、ア如何な
れバこそ此國の人々は良人よ劣らぬ婦女子の振舞、又あるべきと
も思われず感入つて候なり。と一同の方々落涙よ及ぶ、然る所へ
次の間より一人家來が 臣申上げます 庄何事を 臣只今高館
より義經公の侍向いとして三百余人を引率なし和泉の三郎侍迎
として参向仕りました 庄、左様か。切て是れより義經公の春
藻春風連の三人も伊手當わつて元春始め一同の家來も別れを告
げ義經主従の和泉の三郎の三百余人の同勢に連れられ、勇み進ん

武藏坊辨慶

で高館へと乗込、秀衡も待ちよ待つたる事故、迷かよ、伊案内申
上げてと直様對面、一同の人々へも充分の手當でございます、くだ
くだしければ都てのことは略します、秀衡は義經公と一別以來
の挨拶、濟んで秀、扱て義經殿抑も、某しが、出陣の禰り申上
げたる如く果せる哉、今日の有様、這は君が餘り、智略衆、又勝れ、高
木は風、又折らるゝの習い、決て今日に至つて、某しが、兎や角申す所
は無、い、伊、約、束、通、り、高館の城は君の爲、又明け置きたれば、是れへ伊
道入、あるべし、嘸、々、道、中、伊、難、義、又てありし、あらん、最早、是へ出で
あれ、大、丈、夫、伊、心、静、か、よ、時、節、の、來、る、を、待、ち、玉、へ、と、一、城、を、貸、與、へ
て、其、所、よ、主、從、お、道、入、り、な、さ、れ、て、時、節、の、來、る、を、相、待、つ、然、る、に、鎌、倉
よ、於、て、は、頼、朝、公、義、經、主、從、秀、衡、方、よ、沈、着、た、と、云、ふ、こ、と、を、聞、及、び、敵
々、秀、衡、方、へ、首、打、つ、て、差、出、だ、せ、と、云、ふ、こ、と、を、命、じ、る、然、り、と、雖、も、秀
衡、は、願、ど、し、て、應、じ、ま、せ、ん、秀、義、經、公、は、功、あ、つ、て、罪、無、き、方、で、あ、る

武藏坊辨慶

是れを打つて首差出だすと云ふは如何、忍びざる所である。と
云つて聞か、頼朝も無理、と云ふ理由、行きません、なせ行か
んと云ふと秀衡は陸奥守鎮守府將軍と云われるお方、奥州の大領
主であり、升から流石、日本總追捕使の頼朝も如何、んどもする事能
はず、其儘、又手を束かねており、升と爰、又義經等の運の盡きと申す
ハ秀衡が病氣の爲、遂、又死去いたしました、其子、泰衡は秀衡の心
又反して義經等を討つて、其首を鎌倉へ差出ださんと、父、秀衡が泰衡
を枕邊に召て、義經公を以て國主とあし、汝、是れ、又従ふ可とありし
よも、係、ら、ず、泰衡の父の遺命、又背き、ま、し、て、自、か、ら、秀、衡、の、跡、を、次、で
義經を衣川の館、又移し、參、ら、せ、た、然、る、又、國、人、始、め、蝦、夷、人、の、義、經、を
尊、む、こ、と、國、主、泰、衡、よ、り、も、重、う、ご、ざ、い、ま、す、か、ら、額、更、面、白、か、ら、ず、折
が、あ、ら、ば、討、つ、て、取、ら、ん、と、眼、ふ、折、し、も、恰、も、好、し、文、治、五、年、閏、四、月、鎌
倉より

武 藏 坊 辨 慶

義經主従の首速かよ討つて鎌倉へ差出たすべし若し命は従ひ
すんば大軍を以て征伐せん
と云ふ脅しの書面が到着いたした夫で無くつても義經を殺さう
と以ふ下心のある處斯る使者が来たのですから其處で泰衡兄弟
は俄かよ三万の兵を起して不意に衣川の新高館へ押寄せました
此時義經主従は僅かよ百五十騎如何に智略を勝れた人とは云へ
三万と百五十騎ぢやア蟻螂が斧を以て龍車に向ふが如くでござ
います去れば大きき騒ぎました手の舞足の蹈む處を知らず處が
秀衡存生中に義經公よ一巻の巻物を渡して 秀万一君の危急存
亡の時至らば此巻物を開いて見玉いと渡されてあつた判官不圖
心注いで是を取出たし開き見れば其巻物の中よ万一當國よ異變
あらば蝦夷へ渡るべし其謀略は云々斯様と細かき認めありまし
たから義經ハフと涙を流して 義伯父秀衡が斯く迄吾等よ

武 藏 坊 辨 慶

死後までも心を配り呉れたるはいつの世よか是を報ひん。と
涙よ暮れたる時よ辨慶進み出で、 辨秀衡存生よ未前を察して
妙計を君に残すこと誠に感激の至りあり去れば今泰衡兄弟の大
軍に向い殿無くては君を安々落し奉ること叶い難し某し此所よ
殿留まつて美事討死いたす程よ君よハヤハヤ落ちさせ玉いと
云ふ時鈴木の三郎進み出で、 三郎イヤハヤ辨慶殿の仰せなる
が壁へ此所よ殿留まつて君を落し参らするも跡よ似たる身代り
の首無くては後日鎌倉殿の御疑念もあらん人の噂さよ承わるよ
某しの相鏡君よ勇腕たりこのこと由つて吾等君の御身變り成
つて討つて出で花々しく敵を引受け其後高館よ火を掛けて討死
仕らん。と勇み立つて申しましたから義經兩眼に涙を浮ゆ 義吾
れ今運拙くして身を隠すや當り臣一人は万人よも替難く重家よ
討死させんは如何よも残念至極であるが……どの仰せ辨慶眼を

武藏坊辨慶

怒らして辨是れ迄數度の合戦爲し玉ふと雖も斯く憶したるは
言葉は無き今一大事望み斯るは言葉の意とも覺へず重家
の申す所至極道理なり時を移さば敵押寄せ來らん早々用意あ
るべしと急立てましたから義經是非あくは鎧の勿論は伊太刀
を重家と賜り且つ辨慶は仰せあるもの義辨慶其方の世人の
恐れる者であるから此所は藝人形を指へ汝の姿に打拵せ衣川の
中央に置くおれは敵押寄するとも容易に進み來るまじ其間も用
意を購へ間道より落行くべしと其所で俄か又藝人形を作りまし
て辨慶の平生の打拵を装ひ衣川の中流に立せ頃ハ文治五年閏四
月二十九日義經主従二十一騎密か新高館を落玉ひました此方
の三方の兵は斯くどの知らず衣川を差して関を作つて押寄せる
然るに衣川の中流に西塔武藏坊辨慶が大薙刀を振舞して仁王立
ちに突立あがつて居りますからアレク
那れは辨慶扣へ居れり

武藏坊辨慶

道の如何のせんと躊躇して一歩も進むこと能はず此内は義經主
従の蝦夷地の地理を熟せし秋田の住人下關太郎と云ふ者を案内
と連れて和泉三郎忠衡と命じ武器兵糧杯充分の用意を爲て船よ
積み同月晦日寅の一天津輕三厩屋の港より蝦夷地を差して落
行きました英雄の末路最と憐れなことであり升シテ見ると辨
慶の高大なもので辨慶の藝人形が立て、あつたればこそ悠々と
落ちられたので其頃辨慶の武勇此一事を以ても知るべきこと
とございます却説一説に義經はじり辨慶に至る迄衣川に討死を
爲たどありますが全く然ふで無い義經主従の蝦夷地へ渡つて
蝦夷を平げ滿州を征込んで遂に支那四百餘州を切平げ皇帝の
位いよ即いたと云ふこと十八史畧其外義經再興記杯も出て
居り升、全く鎌倉の頼朝を憚つて主従討死を爲たと流布したので
ありませう抑々九郎判官義經の秀衡方にあつて時を伺ひ兄頼朝

百三十六
が伊豆に兵を起す。當つて忽ち是に應じて軍務總帥と成つて木曾義仲を粟津に滅し、平氏を屋島檣の浦に平ぎ、英名を末世に残し、たは義經智ありと雖も又辨慶の頭かつてからある所でごさいませう。扱て永々伺い續きました西塔武藏坊辨慶の傳記も是れで讀切りと相成ります。

第九席

エ、本編辨慶の傳記の書肆兩輪堂伊主人よりの注文中で前後二冊で讀切りの約束で口演を始めました。然る所が原稿が出来上つて見ると何分にも下編が足りません。尤も初編口演中餘り長過ぎても成らんと存じて除して申上げた所もあります。是れより不足を補う丁數だけ辨慶が未だ觀山の勤慶阿闍梨の許にありつて修業中辨慶と云ふ豪傑の柄に無い色づばい伊話があつた。夫れを二三回伺つて不足の分を補います。から看客諸君左に講演いた

す所の初編のはじめの所だと思召して不悪すは讀分けを願ひます。辨慶と云ふと一ト言ふア、那の坊主か、那りやア色氣も何んも無い強い一方の荒法師だといふ云ひますが何う爲て中々然ふで無い、辨慶とても木の股から生れたでも無し情慾を知らぬと云ふ法ありませせん、爰に辨慶未だ神佛と申せし頃鯉を退治て母の仇を復し誰にも斷らずしてアいと京都の渡邊次郎右衛門の已れを一度養子と爲しやうと迄云つたことがあり升からはへ來つて厄介も成つて居たが何分も氣性が荒くつて陸方が無い、其所で次郎右衛門が觀山の勤慶阿闍梨の許に頼んで佛學修業をさせました。始めの勤慶阿闍梨の徳も服してか餘念も無く修業を爲て居たが追々地金を現にして來てモ、今ヒやア經あん子を服んだこと、ハ、かい、間があるたア山へ昇り谷へ下たり猪だの猿ばかり追掛

武藏坊辨慶

て歩いて居る、少しも法師の様子に無い、阿闍梨も采れ果て居られ
ました、然るに神佛丸の兄弟子一人常陸坊海尊と云ふ者がござ
いしました、是の後にて辨慶の下に付て義経が奥州へ落ちさせ
道々も辨慶が大先達と成り海尊が小先達と成りましたが此の頃
には海尊の方が兄弟子でございしました、此海尊と云ふ者は少しは
才學はありすが其性質の邪慳として情けを知らず、表は眼を半
眼に見開き珠數爪繰つて殊勝氣又は相見へます、表と心とは大
きく相違、所記悪僧でございます、鯛を天蓋と名を稱けて是れを喰
い、鯛のことを踊り子杯と名付けて是を喰い、玉子のことには伊所車
と云つて是れを喰ると云ふ、おせ伊所車だと云ふと中から君が出
ると云ふ何んだか落話しのやうでケスが都て生醒い者は名を替
へて何んでも喰ふ、酒は飲む、女は好き、申分の無い破戒の坊主、ム
と常陸坊は妙なもの好みまして女色も好きだが男色を願ふ好

武藏坊辨慶

む、なれど外又相手とする者が無いから或る日己れの弟分の徒弟
神佛丸向つて挑みました、神佛丸は大きき怒つて突然拳を固める
と、神無禮なことを申すな、と海尊の頭を健かよ打つた、海尊大
怒つて海己れ憎き振舞兄弟子の吾等を打つと云ふ法やあると
云たが腕盡くでは逆も神佛に及べんから其儘泣寝入り又成りま
した、が是れより神佛を怨むること夥しく是れからは神佛丸のこ
とを師匠の前へ出ては色々と罵るく云つて寺を追出せうと致し
ました、去れども阿闍梨は海尊如き者の舌頭に乗つて神佛を追出
すやうな者では無い、阿闍梨へ愚かの者よ、せよ次郎右衛門の頼
み、黙止難く且つ父母も無き孤兒なれば左様なことを申す者では
無いと中々承知が無い、此時海尊海師の仰せではあります、が
彼れは佛學を教ゆるよりも更にお勉むること致し申さず、教へたど
て何んの益無き者でござれば薪を構らせ水を汲ませ下賤の業を

武藏坊辨慶

勉めさずるが彼れ相當のことであり升から左様遊ばして下さるやうよ……と云ふ阿闍梨も阿夫れなれば怒の出る迄據る無から其等の業をいたさせ置て然るべし……との仰せでありますから海尊は大きき悦びまして直ぐ神佛丸を呼んで海師の坊が斯れく仰せであるから和郎は今日から佛學を勉強するよは及ばんよ由つて山へ往つて薪を取り又は水を汲んで庫裡の用を働けど云われた神佛も嫌じやアあるが師の坊の仰せどありやア詮方が無い神好うございます。其日から山に登つて薪を折る自分の背より高い荷を背負つて歸つて来る普通のひと違つて神佛が一背負いと云やア馬は一駄位いの物を背負つて来る毎日其の如く薪を取り又水とドク汲んで居る一山の人々は是れを見て流石の毒と思ひ甲ア、彼れ由ある者の子だと云ふの如何よ白痴だからと云つて佛學もさせずして徳夫の如

武藏坊辨慶

く日々山へ昇つて薪を背負つて來るとは何事であらう可愛想な者である。と密かゝ語り合つて居たが神佛は机の前又坐つて四角な字を讀んで居るから見りやア餘程此方が悠氣で好いと日々山へのみ往つて居りました。内又月日又ハ關守無くハヤ神佛十七と相成つた。或る日のこと叡山又於て京都六波羅迄の急用が出来た。勸慶阿闍梨はハテ此使いは何者よ命じたものであらうかと考へ遊ばしてお出でさる時又海尊は進み出で、海恐れあがら愚かな者でも何かの御用よは立ちますもの彼の神佛丸の年齢未だ十七才なりと雖も力量勝れ足の疾きことば風の如く此御用は神佛丸こそ至極宜しひかど存する。と申上げた海尊の考へじやア一ツ困らしてやらうと云ふ所存。勸慶も成程と思召して勸慶コヤ神佛京都六波羅まで急用を汝も申付けが首尾好く勤め呉れるやどのこと、神佛は悦んで神お師匠さま如何よも急用とあ

武藏坊辨慶

身体を任せ、お餘りは小哥等が頂戴する、出やうに由れば何所まで
も此方も少しは達引もあるが嫌の應の吐しやアがれ、罪なこ
とでも為さくつちやア成らねへ、然んな事を為たく無から物柔ら
かよ説すのだ、ウンと云つて親分の言ふことを聞かせへ、と毛、
オヤラノ手を延ばして既手荒なことでもいたそうとするから
彼の娘は益々愕き何うあることかと思つて居る 甲「サ、何
も然ん赤に驚くこと無へやモ一妙齡じやア無へか……ヤイ此
奴等ア方々又眼を配つて居る。別々何も来やア為めへな 乙「頭何
来やア為ません 甲「ウム、姐や氣の毒だが今も云ふ通り思ひ込
れたのが和女の因果、温順く乃公の云ふことを聞て呉れ、娘は漸々
涙を拂つて頭を上げ 娘「ハイ……何んど仰せがありまして、其
事ばかりは何うぞ御免なすつて下さいまし、お金子でもお詫と差
上げるんでんいますすが何為ても庭から突然と貴郎方よさらはれ

武藏坊辨慶

て来た私し、何んもございませんから是を何うか……。と頭も差
て居る命管と差出だす 甲「ハ、時代なことを云ふ然ん赤和女
の差て居る管差を貰つた所が詮方が無へ、怒けりやア管差位への
此方で呉れてやる慾氣を抜きの色氣一方、じやア何う為ても云ふ
こと聞けねへと云ふのだ、娘何うぞお死遊ばして 甲「好し
じやア斯ふ為てる……。と引寄せる 娘「アレ……。と云ふ内もク
ルリと夫れへ引繰返して今上に乗らんとする、最前より此体を辻
堂の中で見て居た神佛 神「己れ憎くひ奴だ、モ一勸辨成らん。と大
きよ怒つて突然木建格子を蹴放して夫れへ踊り出だし 神「ウ
何を為る。と云ふと一人の襟髪捕つてヤツと上へ投上げた神佛丸
の力量で放り上げられて堪るものじや無い三丈ばかりの高さあ
る木の梢へ引掛つて仕まつた、スルと彼の親分と見へたる一人が
甲「ヤ、汝、何所から降つて来たか、沸て来たか、邪魔な所へ出

婆張つて……覺悟を爲る。と息荒く罵るを神佛九の冷笑ひ。神憎
くき小盗人の仕業かき。と云ふと傍への杉の木をヤツと根こぎよ
してビシリリ儀よ拂つたから二人ばかりブーンと向ふへ飛で往
つた。此様子を見た二三人の悪者の。〇ヤ、此りやア人間じやア
無へ、命が大切ッレ逃げる。とドン／＼逃げて行く、神佛も殿打られ
た奴の其儘息の絶へたる様子。娘の大地は平伏して只有難涙よ暮
れて居りました。神佛邊りの静つたるを見て、神ヤヨ娘御曰か怪
我の無いか。娘の恐る／＼顔を上げて、娘ハイ何所の誰方さまで
ございますか。危い所を御救ひ下し置かれまして有難ふ存じます
る、ホノ又貴郎の命の親……神ヤ其様も神云ふよ、及ばんこ
とマア、御無事で好かりし。と云ふ時又一天候かよ揺曇り、墨を
流したるが如くの有様。とボツ／＼と細繩を提げたる如き
雨の忽ちの内はザ／＼と車輪を流すが如く雷鳴さへも加わ

つてヒカッ／＼と云ふ、神ヤ、此りやア困つた、モシ娘御長いこ
どもあるまいから暫く此社堂の中へ休んで居なさい、雨が止んだ
ら何所だか知らんけれども和女の宅まで御送りやすから、娘ハ
イ有難ふ存じます、何うぞ夫れで、然ふ云ふことよ遊ばしてと云
わぬ、謂ふよ勝る言葉少々の彼の娘、地獄で佛と悦んで兩人の社
堂の内へ逃込みまする途端一聲激しくガ／＼と鳴響いたる雷
鳴、娘のアツと驚ひて、娘ハ許し遊ばして下され。と神佛目掛け
て抱付いた、神佛丸も女も抱付かれたの、生れて始めて、且つ先刻
より電光の閃く隙かして見れば所は稀ある美人よてア、一成
程今の悪漢が戀慕を言掛けしも無理ならず、と心の内へ神佛丸も
情慾押へ難き折であつたるから今娘も抱付かれたを幸ひよ遂に
怪しき夢を結びました、願てのこと雨も竭み雷も止み廿日亥中の
月の東天よ昇り、千草よすたく虫の音も物静かでございます、娘の

武藏坊辨慶

乾度形状を正して 娘今宵の思ひも寄らぬ難義の場合をお助け
下され餘りの嬉しさも雷さまの怖しさも何所如何なるお方とも
知らず怪しい夢を結びました去れを慰みよ似たれども女の生
涯一人より外又枕を替す方のごさいませぬ其故妾の貴郎より
外又良人とする方とても無く何うぞお慈悲お情けよ何所の方
かお宿所をお明しなすつて下されまし聞て神佛 神イヤ不圖爲
たこのの機みから斯ふ中よ成りました縁があれば逢ふ程よ
何んよも聞かず今儘よ此宵の別れて下され夫れどの晴れて云へ
ぬ身の上シタ 其方何れのお娘子であるか 娘ハイ妾ハ此
先の三上村の豪士よて土肥八右衛門と申す者の娘でございま
す神佛丸も聞て驚いた土肥八右衛門と云やア勸慶阿闍梨の寺の
檀家だ、顔を見知らあきやア好いと思つて 神ア、左様か三上村
土肥八右衛門殿と申されるお方の娘子かイヤ縁があつたら又逢

武藏坊辨慶

ひませう 娘此品を後日の証據の品よ貴郎よ差上げ置きます
譬へ一夜でも枕を替したお方の生涯の良人よする方此品を以て
後日お前ね下されと己れの誓差を抜て渡した所がガヤ 大勢
の八右衛門火提灯振照して 甲何んでもハア此方へ連れて來られ
たよ違へ無へんだ 乙然ふだどもアソツてへ聲が此方の方へ
聞へたんだとソイヤ 娘ハ是を見て 娘貴郎様今那れへ探
しよ参つたの私の家の者でのお名残惜くのあり升が私しは是れ
でお別れよいたし升 神如何も私がお届けすしたいが斯
ふ云ふことよ成つて送つて参るも何と無く後めたく然らば吾
等が居ぬ振よて是を出でられヨ某しは身が立去つた跡で悠々
此所を立つであらうから 娘ハイ 左様なれば 娘
の名残惜しげよ立つて木連格子を明けて外へ出で 娘皆の者迎
ひよ來て呉れたのでありますか 甲ヤ 娘様能くアア無事で

武藏坊辨慶

居さつしやいしました 乙「ヤーお嬢様旦那が何んなよ心配爲て居
さつしやるか知れせんサア」一「緒よ坐らつせへまし。ど大
勢の悦し氣よ娘の四方を取巻て山を下つてスタ」行く跡見送
つて神佛丸 神ア、一飛んだことを爲た、幼少よりして佛學の修
業をなし、今海尊の爲よ斯る下賤業のして居るが未始終の名僧智
識も成らうと思つて居た甲斐も無く斗らず助けた今の娘よ煩
惱心を起して遂々邪淫戒を破つて仕舞つた、此りや如何いたした
ら好からう。と暫く考へて居りましたが 神ア、儘ヨ詮方が無へ
ドリヤ早く歸つて師匠と逢つて六波羅の返事を申し上げやうか。と
娘より呉れたる所の管差を肌へ付けて社堂を立出でました。が月
の光りよ道も明るく神佛丸の急ぎ足よ叡山を差して立歸つたが
神佛此娘の爲よ發起をなすの件りの次回……

第十席

武藏坊辨慶

却説愛よ江州三上村に土肥八右衛門とやす豪士があり升、先祖の
新羅三郎と仕へたる者であり升が後、是れへ來つて豪士と成り多
くの田地山林を所有して世よ不足と云ふことを知らぬ身の上、八
右衛門の文武の道にも暗からず近村の者よ三上の旦那と云つて
神の如くよ尊敬して居る、此八右衛門一人の娘がございます、其
名を玉虫と呼び、今年取つて十七才、玉の顔月の眉、實よ高貴人の
娘と云つてもをさく、耻かしからぬことであります、八右衛門も
實よ是を愛しまして何くれと無く仕込む、去れハ糸縫の勿論茶の
湯活花琴三味絲何一ツとして辨へぬと云ふことも無く八右衛門
も行く、の貴人の妻よもさせんと云ふ、然るよ先き頃庭よ涼み
よ出て居つて悪漢の爲にさらわれ、幸ひよ無事に探しの爲たもの
の夫から後の何と無く勝でございまして一間よのみ籠つて
居り升から八右衛門の心配して醫者ヨ藥といろく、手當をした

武蔵坊辨慶

百五十二
が別よ是れと云ふ病氣も無いこのこと、八右衛門も大方餘まり喫
驚為たので虫でも起つて居るのだらうと何時までも子供の了聞
然るゝ其年の七月十三日、八右衛門の父の七年の法事、相
當するから近村の者を呼んで大盤振舞を爲やうと云ふので近村
へ案内を出し、自分の寺の叡山でございませすから勤慶方へも申送
つた、近村の者の大悦びで、甲、ヤ、土肥の大旦那が阿父さんの七
年の法事をするに云ふ、往つて伊馳走も成つて来べい、乙、平生の
旨へ物の喰へねへ水呑の乃公達だ、往つてシロタマ喰ひすんばあ
るべからず、と近村から當日を待兼ねてドン、押掛けて来る
甲、ヤ、旦那今日七年の阿父さんの御法事だそらで伊殊勝あこ
どでございませす、乙、何うもムア私共へまで伊案内を下すつて有
難ふ存じます、とソ、イ、く、やつて来る、ハ、皆さん能く来て下さい
ました、何んもございませせんがホンの法事の印しでございませす

武蔵坊辨慶

奥へお通んなすつて、一同有難ふ存じます。と一同のブ、奥
へ通つて先づ佛の爲よと云ふので大きな珠數を持出して百万遍
を始めやアがつた、只今の餘り見受けませんが昔しに能くやりま
した、中央へ坊さんが座つて鐘を叩きながら南無阿彌曼、ブ、
……と云ふと四方へ丸く座つた人が大きな珠數を廻しながら
一同、南無阿彌陀佛。と珠數を廻して行く珠數を廻しながら大きな
玉が自分の所へ来る、とナ、ヨ、イ、と頂く、自分白痴、しいやうだが
昔しに能くやりました、未だ寺から坊さんが来ねへと云ふので村
の名主さまを中央へ入れて百万遍をやつて居る内、其所へ追々
と膳部が并ぶ、ハ、サ、ア、く、皆さん何んもありませんが今日の
無禮講で伊充分又召上つて下さいませし、一同、ヤ、何うも此りや
ア伊馳走様で、然んならハ、頂戴いたし升。と待兼ねて居たことだ
から酒が始まる、一人の百姓が、甲、ア、源右衛門、源、何んだね

武藏坊辨慶

甲「あんだつて佛様のこと、精進料理が當然だ。ア、今日の料理
の肴だが何う云ふ理由だらう。源「夫りやア肴だらうが精進だら
うが佛が喰べる理由で無へだから好いだ。乃公達平生肴杯の
拜むことも出来ぬへ喰ひたからうてんで。伊情け深へ旦那様だ
から肴の料理も爲て下すつたんだ。何んどもハア乃公達が悦んで
旨がつて喰へば佛様の悦ぶだ。甲「ハア成程……ヒヤアア遠慮
無くバク、喰ふのが佛様の功德かね。源「マア然ふヨ。甲「然
ふかね夫じやア頂くべし汁の蓋を取つて。ヤ、此お汁の中よ肴
が這入つて居るだ。源「困つちまうなア味噌吸物と云つてお汁と
云つちやア不可ねへだ。甲「成程旨へ物だ。今日の料理番、誰だア
ね。源「三上村の九兵衛、六八だつてへことだ。甲「流石ア那奴等
ア京都の料理屋、奉公を爲て居ただけあつて料理の旨へ者だ。ソ
イ、と云つて一同酒を飲んで居る、叡山の勸慶ハ海尊を呼んで

武藏坊辨慶

海「コリヤ海尊ヨ。今日の三上村の八右衛門の家で七年の法事が
あると云ふことであるが私ハ行かれんよ。由つて山門の内よ道る
者ハ大勢居るが其方勤めて来て呉れヨ。海「畏りました。と海尊悦
んで今日の鰹腹旨い物が喰へるだらうと早速仕度及んで釀の
八右衛門方へ参られ八右衛門又面會して今日の師匠伺うべき筈
で座座るが風邪の氣味でござるから某し代りよ参りましたと八
右衛門又云ふ。八「夫ハ伊苦勞様でございます。何うぞ伊經又お掛
り下さいましたと云ふ海尊直ぐさ佛間へ通つて酒々ど經を終つ
て大勢が飲んで居る座敷の上席へ案内をされて前へ膳部が出る
見ると己れの精進料理だ。海尊の固より破戒無殘の惡僧故精進
料理の好しからずと雖も流石出家の身として肴を呉れろとも
云へませんから咽喉から手が出そうだが詮方が無い精進料理で
ガア、酒を飲みましたからハヤ充分又酔も發して伊客を周旋

武藏坊辨慶

の爲よと座敷又今日を晴れと着飾つて出て居ります娘玉虫の
顔を見て海ア美くしき所の娘子であるに恍惚と爲て居りま
したか主人八右衛門が八「サお弟子様何うか伊分又召上つて
……海イヤ伊主人誠又今日の遠慮無く充分又頂戴をいたした
然し兎角酒と申す者の男同士よての旨く無い今日の伊法事斯る賤し
も酒のたばと云ふて女無くての旨く無い今日の伊法事斯る賤し
き農夫等又山海の珍味を伊振舞あるに此上も無き佛の爲よの
るなれ此上彼等をして樂ましむるに猶此上も無き佛への功徳
かど存する八「ハア此上皆さんと樂しませると申すの何う云
ふことよいたしたら海去れば伊當家のお娘子玉虫殿と仰せ
る方々天晴れある所の美人且の諸藝又擡んで中より琴の妙手
と聞く願く此席よて琴の一曲を聞かんよの歌の菩薩の音楽
の妙ある聲を聞かんよの遊かよ勝る樂みよて百姓共の勿論のこと

武藏坊辨慶

と伊先祖の亡き晩もさや悦び玉ふてござらう是れ千巻の経
よも勝つて千万無量の功徳でござる願くば御主人此儀伊聞容れ
下されたしと始めの殊勝氣も似もやらすハ「酒よ心を奪われ
て己れの身をも打忘れ酔眼朦朧として言出でました土肥八右衛
門の是を聞まして八「法事の座敷又音楽どの其意を得ぬこと
暫く考へて居たスルと最前よりガ「やつて居たお百連中に
於ても一同ヤ「坊さん好いことを仰しやつた成程是れは面白
からう且那今日の無禮講と仰しやつたから何うかお嬢さんに
非顔ひたいもんで甲中々那の坊さん年は若い粹な坊さんだ
杯とワイ「云ふから八右衛門も娘自慢のことでありませすから
強てこも断わらす八「皆さんのお望みと云い且那寺のお弟子の
お頼承知爲ました然し決して妙手と云ふ程ではござらん只ホノの
糸が明て居るだけのこと其思召しでお聞下されヨ……ヨ「ヤ

武藏坊辨慶

娘仕長を直して皆さんよ一曲聞み入れろ 玉ハイ……と云つて娘の顔を赤らめて奥へ這入る暫くあつて玉虫は衣服を改め侍女は琴を持たして静々と其所へ進んだ有様又海尊はじめ一同が屹度是れへ目を注ぐと又一層の美しくし見ぬ唐の楊貴妃が三保の松原よ遙降ましくたる天津乙女も是より遠く及ぶまいと見へた海尊の見るより涎をマラク流して海ア、一婢妍窈窕たる美人どの伊當家の令嬢のこどか行末の高位貴人の妻と成られるの必定伊主人囁お楽しみでござらうの焼野の雉子夜るの鶴子よ迷わぬ糸の無いから八右衛門の只悦んで居る玉虫の差俯向て顔又紅葉を亂らしながら片腹痛きことと思つて居りまする 八ヤ玉虫早う一曲を奏して皆さんの傍聞に入れる 玉長まりましたと是れより琴を引寄せ音律正しく一曲を奏したから理由の分らぬへ百姓達も思わす耳をかたむけた願て一曲を奏し終つて

武藏坊辨慶

玉誠よ拙き妾の業伊許し遊ばして下さいましと云いさして琴を差置く 甲ヤ何うも娘さまの琴面白うございしました 乙理由の分りませしねへが好い心持でございしましたと又々酒を酌替して皆一同譁つ稱へつし今日の馳走を厚く謝して立歸る海尊の此美人を見又美音を聞て益々恍惚として海天二物を興へずどか申し縹緖の好い者の音聲宜しからず又音聲の好い物の必ず容色の好く無い者然るよ此美人の聲と云い容姿と云い天下よ又どあるべからず斯る美婦を一夜よても思いの儘に爲たなれば今死するとも恨み無し……と心におもへど去あらぬ体 海イヤ貧乏面白ふござつたと酒を述べて立歸りましたが是れより海尊玉虫の姿目よ遮ぎり寐ても覺めても忘れかね煩悩の猶の追へども去らず已れ法師の身よあらずんば如何ある手段もありつらんが法師の身の悲しさに立寄る術も外に無く如何のせんと取つ措つ日々

武藏坊辨慶

此事のみを思つて居りました。未だ修業の至らぬ所此方八右衛門の娘玉虫ハハ妙齡でございますから其標致を垣間見て縁又怒い雖も行かんと言寄る者ハ数多くございます。八右衛門の考へでハ「標致又惚れて言込ひやうな人ハ母母しからず何カ金子杯ハ無くとも身分の賤しからぬ氣性勇猛として仁義厚き者を録として我老の身を樂しく送りたものであると、コト思つて居るから決して承知をしまひ好い加減を返事として是を斷つて居りました。然るに娘の玉虫ハ何うも先頃から心地が悪い様子であつたが別けて此頃ハ顔色悪しく兎角ハ酔ッ氣の物を喰べたがつて胸が悪い杯と云つてケレケレやつて居る母親ハ驚いた。世旦那様ハ「何んだい。母何うも娘の此頃の様子を見まするよ。其病氣ばかりではないやうで。八ハ「ア何か手付つて居るのかい。世私の考へでハ懐妊でハなからうかと存じます。八和女

武藏坊辨慶

白痴あことを云ふものじやアない。未だ小供だ。相手もあいな。供が何んで懐妊とするものじやア無い。冗談も程がある。母ア夫が親白痴子利口親と云ふ者ハ何時迄も子供だと思つて居る。内早晩虫が付くのが小娘油断の成ない小娘と云ふ下世話の壁へもあるでございませぬか。何うも今迄嫌いな風波離爲た物ばかりを喰べたがつて生つばきを吐て居る。工合ハ懐妊とより外見へませぬ。八白痴なことを云ふも程がある。じやア相手の誰だ。い。世、相手が知れて居る位ハ心配ないたしませぬ。萬一貴郎が鹿言だと思召たらばお醫者又見せて。珍遊ハせ。八「然ふ。夫が一番好い醫者又見せなさい。早速醫者を呼びました。醫者の暫く玉虫の脈を取つて考へて居たが。醫旦那是れハ懐妊でございます。す。八右衛門ハ聞て大きハ愕き。八「エ、全く懐妊でございますか。……然んなどい無い筈。醫有る筈でも無い筈でも懐妊でござ

武藏坊辨慶

る既五月でもありませすから帯を締めさせなければ不可ません
八五月………相手の誰でございませう 醫夫りやア醫者も分
りませんと醫者の歸る八右衛門の未だ信じあい 八何うも私の
娘に限つて然んか頼らあそこのあるべき等があい。又一人の醫
者を呼んで見て貰ひましたは是も懐胎だこのこと、八右衛門も餘
りの不審な醫者に向ひ 八貴郎方の仰せでござるが拙者の家
の捉服しく去る頼らあこの出来べき所謂無し且又娘とても愚
かあがらも人倫五常の道に辨へ居る者あれば親の許さぬ不義を
致すべくとも思われず、是の失禮ながら各々方の御見立て迄いで
のありませすまいか 醫者疑り御道理でござるが拙者の産科方
を頂いたする者まで決て見立違ひのござらね等今令嬢のお脈
の様子を伺ふよ心脈の動氣甚だしく腹脈の二夕筋も成つて鼓動
をするの候は相違無し平生の腹脈と云へる者の一本なれ候

武藏坊辨慶

妊すれば二本別れ一本の親の身体を肥し一本の子宮も道入つ
て子を養ふ然し某し苗を見るよ女子二十歳を越へて男女の交り
をせず無理な情慾を堪忍ぶ時の其氣凝結して夢中も男と交るこ
とを爲し夫れより孕むことあり然れども誠の陰陽交合するよあ
らねば孕むと雖も眞の子ならず血の塊りを産むことあり是を血
塊と云ふは當家の令嬢の未だ十七才といふ云へ或は去る病氣無し
とも保し難し由つて血を下すの薬りを盛つて差上げますから其
薬を服して血液下れば血塊の下地又其薬を服するとも功無き時
ハ眞實の懷妊と思召せと云ふので醫者が薬を盛つて呉れました
から其所で飲ましたが更其印しも相見へません八右衛門も今
は疑ふべくも無く如何ある者が相手と無理に問ふたら娘心よ
又取詰めたことでもされては成らんと親の慈悲で深くも答めず
其儘別よ何も問わす大切にして置きますと其年も暮れて明くれ

武藏坊辨慶

ば正月のこと、玉虫の腹は益々大きく成つて来た八右衛門夫婦は
何んでも保養が肝心だと今までは許しませんでした。此
程では日々野や山へ連れて行き、未だ充分な雪は消へぬが春の景
色の長閑さ所帯を見せて居た二月の十三日のこと、叡山へ参詣せ
んとて八右衛門夫婦は娘の玉虫を連れ、多くの女中共をも連れて
叡山の勸慶阿闍梨の許へ来ました。常陸坊海尊の大きき悦ぶこと
限り無く、海乃公の思ひが届いて久々で戀人の顔を見ること
出来るソ、いそいそとして土肥主従を客殿へ伴つて茶だ菓子
たど豆々しく持運ぶ折ふし、勸慶は播州の書寫山へ叡山の惣代と
爲て何か用向あつて趣いて不在であり、升から一山の僧三十人ば
かりを本堂へ呼集めて己れが師又代つて本堂の正面へ座し、土肥
主従を本堂へ案内して酒々ど談經を済ませ、他の僧侶は皆己れの
坊へ歸る海尊再び客殿へ招待して四方山の話しを爲さながら折々

武藏坊辨慶

妙な目付を爲ては玉虫の方をワロく見ます、去れど玉虫の方
は少しも感ぜない、八右衛門は夫れへ澤山の布施物を差出だして
八、今日は誠に有難ふ存じます、是は御師匠様へお上げ下さつて
……又是は些少ではあり、升が貴郎へ差上げます。と出した海尊カ
ラカラと笑つて、海イヤ納所よ等しき某しまでへ御心注け辱け
無ふござる出家の身として金銭は石か瓦も等しい物なれど折角
の賜物故頂戴をいたすと、師匠への布施物は佛前へ備へて己れの
貰つた金子は袂へ押込み、海先づ當分是れで酒が飲めると云わ
ぬばかりの悦びの体折しも、神佛九は山より薪を己れの背よりも
高く背負つて、壘所へ歸つて来ました。海尊の遙かよ是を見て
海神佛へ、神何んだね、海何んだね、ア無い三上村の檀家
土肥の方々が今日は當所へ御参詣だ衣類を着替へ是れへ来てか
給仕でも爲る、神、ハイ……。暫くあつて衣服を着替へ補の長い法

武藏坊辨慶

衣を着て夫れへ出て参り 神是は皆さんお出でさされまし今日
は能う御参詣……。八右衛門ヒヨイト見ると身の丈け振群ましして
筋骨逞ましく一目豪傑の相行の現はれて居り升 八、モシ、お
弟子様此方も勸慶様のお弟子でござるか 海去れバ拙者の弟徒
弟であり升がイヤハヤ實又思か者で神佛とやし升 八、ヲ、倍て
は神佛九世のか京都壬生の渡邊治郎右衛門殿からお話しは承り
ましたが今は父母の此世に在さぬが天晴れ由縁ある方の落し嵐
であるとのこと世が世であつたら山又薪を取り又行くやうな賤
しき業をする者でござるまい、筋骨逞しく相形の有様後世恐る
べきの英雄豪傑も成りませう。海尊の憎いと思つて居る所へ産
められたのだから腹立しく思つて 海道に土肥殿の仰せでいあ
りますが仰せの如く身分尊き者の遺子あれバ自然と氣質も受次
で教へずとも普門品の一冊位い讀むべきよ左に無くして性賢

武藏坊辨慶

魯鈍賤しき業を好み人に罵り耻かしめらるゝ何んとも思はず
机に向つて勤學の氣つまりよりの草鞋を穿て山へ昇り薪を折り
間が好くバ猪杯を捕へて是を喰うと云ふ法師の身もあるよじき
所業多く是等を以て考ふるよ何うせ碌な者の種ではござるまい
神佛の阿母と破戸者と怪しい浮寝の草枕據る無く出来た子なが
ら出来て見れば左も云われず人前つくる虚言を決てお信じ遊バ
すな何うせ碌な奴の子じやアございませんと飽まで罵る海尊の
言葉土肥の親子の顔見合せ海尊を片腹痛く思つて居た神佛九の
カツと怒つて既よ己れの素性を云わんとしたか 神イヤ、母
が吾等よ語つたる其素性を今此所で語つたなら人も知らざる父
上の耻を語るよ似て快よからず又語つた所が誰が夫れを眞實よ
せん云わぬの謂ふよ勝るとん此事よてありつるか、どッット無念
を忍びまして涙を隠して堪へて居た此有様よ海尊の益々募る傍

武藏坊辨慶

若無人向も種々雑多のこどもを八右衛門親子に物語りましたから
流石堪忍強き神佛も今の勘辨成り兼ねましたが大磐石の如く少
しも動かさず眼を怒らし物をも云わず常陸坊を屹度白眼んで居
ましたのが海尊此有様を見てカラ／＼と冷笑い 海神佛何を然ん
な目をして居るんだ其しが語るこどもが傍で聞て居て口惜しい臭
い者身知らずどの汝のこども役もたぬ癖も少しのこどもを云われ
たどて兄弟子の吾等を何んで其様も白眼ひ如何程貴様が白眼ん
だどて恐ろしいこども怖いこども無い汝の罪障消滅の爲も吾等
が今土肥伊夫婦又懺悔話しをお話し申して居る夫が口惜しい
……ヲ、口惜しからう。と飽まで慕る嘲弄も神佛九のモ一是れま
でなりと思つたから 神己れ謂わして置けば好きな熱を吐き居
る勘辨成らんと謂ふと踊り掛つて海尊の肩と腰とをムンズと引
摺み八右衛門の驚いて 八アレ神佛殿待ち候へど云ふ言葉も耳

武藏坊辨慶

にの掛けす向ふの板塀を狙つて 神ヤツ……と云ふと投げた海
尊の塀又叩き付けられてギュー……絶氣して仕舞つた八右衛門
の 八アア神佛殿伊腹の立つのの伊道理決て和郎さんが悪
ので無い海尊さんが悪いが詮方が無い勘辨なさいと海尊を抱
起して水ヨ薬ヨと立働く願て海尊の屹度眼を開いて腰をさすり
ながら腹立しげに神佛を打見やり 海ヤヨ神佛汝も知りつらん
が我佛祖釋尊のお弟子も優婆夷、優婆塞、毘丘、比丘尼の様々の別
あれど汝優婆夷も未だ至らぬ身分を持たながら吾れを是れへ投
付けし悪行思ひ知れや汝が日毎山又行き樵る木又すら猶尊卑
あり棟梁と成りて人の頭も立つものあり又人の穿物も作られて
足の下よりづくまるあり阿彌陀も下駄も同じ木の端、拙者の如く
法師と成り今生の生佛とよばれ人よかしづかれ尊まれ來世の
寂光淨土も生れ蓮のうてなよ上品の佛と成らんの必定あり又汝

武藏坊辨慶

が如く性質魯鈍として法師の行いを爲すこと能わす、日々樵夫と
等しき行いをして自ら以て足らりと爲す、今生の人又賤しめられ
末世の地獄に生れて針の山や血の池、又阿鼻叫喚の苦しみをなす
是れ皆人の身と備わる運不運なり、是を木と譬ふる時、吾の阿彌
陀の木よいたして汝の下駄の木と等し下駄あれば足もて蹴るも
何んの不思議か、是れあらん覺悟をせよと足を揚げて神佛の胸の
邊りを蹴ましたから、八右衛門夫婦の勿論玉虫も餘りと云へ、海
尊が人も無氣なる振舞ふ心憎しむと思ひました、が神佛九が兄弟
子を足を揚げて蹴た一條があり、すから残念ながら手も汗を握
つて扣へ居りました、海尊の猶も附上つて神佛九も打向い、海
神佛曰、汝の寺院もありながら、苟も法師の行いの出来ぬと云
ふ、己れの職を盡さぬ、等しく是れを武士と譬ふれば、食祿を食
んで勤めを盡さぬ、祿盗人も等しき奴、ナト師匠お留守の其時の權

武藏坊辨慶

家の方々お出での時、經でも上げて勤めて見よ、吾等が居らぬから
汝如何にもすること能わさらん、去る愚かの身を以て吾等も手向
いするとの重ね、惜くさ奴イザ祿盗人の折檻の斯ふして呉れ
んど又々拳を固めて丁々發矢と打續けました、神佛九の今迄も喜
怒哀樂の情とて左のみ起つたこと、無いが今日と云ふ今日の口
惜涙も暮れたが、ワット辛抱して差俯向き無言で扣へて居りまし
た、が頭破れ血の流れた法衣の破る見るもいぶせき有様故情も弱
さ、女の常玉虫もあるも、あられず密か、八右衛門の袖を引さ
まして、玉虫お父上様見るも忍びぬ、此場の有様アノ神佛殿とや
ら餘りもお可愛想であり、升から詭言を爲て上げて下さいまし、然
してお経も済みましたら、早く歸らうでありませぬか、八ノ、
如何にも詭言を爲て遣りませう……アイヤ海尊とやら、腹立
の道理ながら、今日の師の傍坊のお不在と云ひ、譬へ弟分と云へ

武藏坊辨慶

師匠のお弟子であつて見れば斯る折檻も宜しからず最早許し
あつて然るべくと存する斯る責め折檻の傍出家の身もあるまじ
き所又候海尊の是を聞いて 海仰せで有り升が沙門の身もあるまじ
バこそ斯る折檻もいたし升のでも皆某しの慈悲でござる激し
く責めさいなみましたされバ少しの發起もいたしませうと存じ
て……昔し釋尊未だ悉達太子の頃迦比羅城を脱して檀特山の法
嶺にお身りの時阿羅々仙人の是を朝な夕な金剛杖を以て打叩
き悉達太子其苦痛堪難く人の及バぬ修業をなされて遂に那れ
だけのお方成られたと云ふ某し阿羅々仙人は非すと雖も折檻
するも師勸慶阿闍梨の爲又神佛の爲でござる然し大檀那の仰せ
どあれバ大抵よして許し遣ひしませうが今一ツ吾が鐵拳を喰ひ
せずんバ争でか愚僧の腹が癒へんやと言ひつゝ又も神佛の折檻
取つて膝下又据へ又續けさまに丁々ど打つ折しもナリンと音し

武藏坊辨慶

て神佛丸の懐中より落ちた物がありました海尊早くも拾ひ上げ
ましたから神佛の 神ヤ一兄弟子ヨ夫れを取られて……と
遠てふためき取んとするを海尊の其手を拂つて屹度其品を見て
あれバ一本の金簪でございます 海ヤ一……神佛此品の通
人の持つべき頭の品寺院もあるべき身の携へべき品にあらすヤ
此品の誰が貰つた物であるか神佛サット面色を替へ今迄驚いた
事ハ無い神佛此りやア閉口した 神海尊氏其事ハかりハ聞すよ
置て……海ヤ一 包めバ猶更聞かねバ成らん何所より貰つ
た品か大方ハ何れからか盗み取つて来て古道具屋までも賣り買
喰の資本よしやうと云ふ心であつたのだらう物を盗まバ取も直
さず偷盗戒然も無くバ法師の身として汝が持つて居る次第がな
い何所で盗んだキリ 白状爲て仕舞へ真ツすぐ白状をすれ
バ又師の情けを願つてやらんことハ無い外の事ハ兎も角も嶽山

武藏坊辨慶

の勸慶阿闍梨とも云のれる方の弟子が盗みをするに云のれて
山門へ聞へても此上も無き耻辱である、サ神佛黙つて居ての分ら
ぬ言譯あらば早く云へども又も襟首掴んで引寄せビシ〜
打ちました、土肥夫婦も此体を見て氣の毒どの存じましたか何う
も今度の読る手術も無いから此りやア今日の飛んだ所へ來合し
たど只茫然と扣へたり、流石の神佛丸も是れよ何んど答へんや
うも無く、神海尊氏同門の好誼、此事ばかりの許して下され、如
何よ某し愚かありとい云へ兼々師よりの救へもあれ、決て盗み
をする者よもあらず聞かぬの聞くと勝るの情け、下何う許して
ど柄よ似合のす読入りました海尊益々附上つて、海、二、許して
呉れも無いもんだ少しでも己れの理屈のある時、目上を目上と
も思ひずして投飛して置きながら己れの理屈が悪いとて其殊勝
氣の何事ぞサア云へ〜先刻も某しの云ふ通り親が録で無し

武藏坊辨慶

破戸者なればこそ其氣を受けて忤か盗人、身分ある落し胤も聞て
呆れる。サア云のぬか神佛、彌々謂へぬとあれ、斯ふして呉れうと
情け用捨もあらく〜しく又も拳を掲げて打たんとする有様、玉虫
の此体よ最前よりヨ〜と泣伏して居りました、今このモ一是れ迄
なりと神佛の傍よ駈寄つて落ちたる管差取るより早く己れの咽
喉を規つてクサとばかりに突立てれば、土肥八右衛門夫婦の是れ
の何うだと驚き呆れ娘の傍へ駈寄つて、八此りや娘狂氣いたせ
しか血迷ひしか。と謂ふも涙よ聲曇る妻も娘の脊を撫て、母何う
云ふ理由の生害予、理由を話して下されと云ふ聲聞て玉虫の苦し
き息をホツと吐き、玉、イエか父上……又母上様決て狂氣のいた
しません又血迷ひもいたしませんが月頃日頃、雨親を欺きし罪
を悔ての此生害先づ一通り、聞遊ばして下さいまし忘れもしな
い、去年の六月廿日の夜、餘りの曇さよ堪へ兼ねて床を抜出で庭へ

武蔵坊辨慶

下りての漫歩き肌へに風を入れて居り升ると突然黒塚を乗越へて二三人の愚者共妾を奪ひ搦ぎ上げアレロ〜と云ふ間も無く塀を乗越へ何所にも無く連行かれまして園ある辻堂の前を下るされ既又彼等に汚されんとしたる折から辻堂の中より出で、お助けなされて下されし此神佛様然る又雷雨激しくして如何んとも致し方無之さま、神佛様と諸共又辻堂の中へ遣入り升と又もや激しき雷の爲又怖さ恐ろしき耻かしさを打忘れて神佛様も密添ふたが縁の端既又危き所をお助け下された情けははだされ只一度枕を替しましたるが未だ其時はいづれのお方とも存じませぬ故いづく如何なるお人かと思ふ間も無く父の御無き振りよて宅へは歸りましたが其後のお恥しいことおがら辻堂よて枕替せし其方を片時たりとも忘れぬ何うか今一度お

武蔵坊辨慶

目又掛つて見たい者と思ふ内何とやらん心地悪しく酔い敗りかりが頂きたく扱ひ正しく彼のお人の胤を此身も宿せしかと思へば最う浅ましく去り云へ有の儘又斯れ〜と右の次第を申上げたなら悪戯者曰不義者とお父上や母上の御腹立を譲るのは知れたこと夫がつらさ只病どのみ云い切つて今日まで包んで居りましたが神佛殿の恩音と云い又妾がお渡し申したる誓差を所持の所を以て見れば辻堂よて契りし紛ふ方無き神佛ぬし親の許さぬ不義とい云へ女子の一生の良人の一人と聞くものをよしや顔も名も知らぬ人とい云へ一念のやわか通らぬ事はあらじと心の中よ蠢い参らせ今日まで父上母上を欺き居りし其罪の濟まぬことでありませすが今日と云ふ今日此所へ来て見れば相手が確か又神佛さま具懸し床しと思ふお方が海尊どの又打擲され言葉も無く顔も得上げぬ那のお妾争で他所目も見て居られませ

武藏坊辨慶

うす君の一夜の情けよ妾が百歳の命を捨つる心の内不慙と思召
し下されてモシ彦兩親さま先立つ不孝の許しなすつて下さい
まし……神佛殿彦身の口より一遍の回向が智識の引導より遙か
よ勝りて覺ゆるかし……父上ヨ母上様不孝の罪のゆるしてたべ
死ぬる命の惜からぬぞ日の目も見せず腹の子を闇から闇に迷わ
すが不便とばかり云ひさして跡の涙に言葉無し委細を承つた
入右衛門 八ア、一生者必滅會者常離今更悔て隠無きことなが
ら壁へ思かど云ふ噂さのわれを娘がさほと思ふなら壬生の渡邊
氏にも許しを受け又勸慶阿闍梨殿も彦相談を申上げて何のや
うにも詮術があつたるよ残念あこと爲てけり。夫婦が歎きよ玉
虫の兩手を合ひして虫の息 玉其優しいお言葉が千部万部の經
陀羅尼經より遙かよ勝つて好き引導有難ふ存じますると云ふ聲
さへも次第く……と其名よ因む虫の息始終を聞た海尊よ於ての最

武藏坊辨慶

とねたましく思つたか 海扱ての玉虫娘が病ひと云ひし神佛
めがそのかし懐妊したるよてあつたるか其故よこそ玉虫殿が
命を棄つれ神佛の八右衛門彦夫婦の娘の敵吾身の爲にの
の仇イア、息の音を止めて呉れんと神佛丸よ打つて掛るを今
迄伏して黙然たる神佛丸のムツクと起上がり常陸坊海尊の襟髪
を取ると見へしが目よりも高く差上げて遙かの庭へ投出たせ
バ海尊の庭の敷石の角よて頭を打つけ暫くの前後正体なく倒れ
た儘でありました此時合の唐紙をサツと開いて立出でながら
玉露のおのが姿を其儘よ
もみじよ置けば紅の玉
と意見の一首を詠みながら夫れに出でた師匠阿闍梨勸慶でこ
さいます神佛の見るより大きき驚いて 神扱てのいつの間よ
歸り遊ばされたるか面目次第もございませんと遙かよ退つて頭

武藏坊辨慶

を突へる、勸慶莞爾と打笑ひ、勸色則是空煩惱、則菩提、今を胸の雲、霧晴れて正覺、實相を得るの時、至れり如何、神佛日頃、又變り心地、清らかな成り晴れて、真如の月を眺むるの思ひあらん、神ハ、ア、恐れ入りましたる師のお言葉、今迄の罪何卒お許し下されよ、勸抑は答ひるに及ばず、汝今こそ剃髮染衣の時、至れり、去は云へ、亂れし世の中、法を説くとも中々以て衆生、濟度は思ひも寄らず、故に汝今より諸國を歩き、容は法師でありとも、武術を磨き、今誇る平家を滅ぼして、絶て久しき源氏の白旗を翻すやう心掛、け万源氏嫡流の方、あらば夫れ、又從ひ功を立て、日、然らば、慰い、又佛に仕へ、讀經に日を送るより、遙か、又勝りし、功、成らん、過去未來を助くるは死法、なり、現世を助くるこそ、汝の勤めなれ、汝は己れの身分は如何なる者か、知るや、知らずや、今吾れ、汝に語り聞かさん、汝こそは天津屋根の翁の苗裔、阿白道隆卿の後胤、文書博士左大辨、辨正の侍なり、今

武藏坊辨慶

より勤學、怠り無く行熟したらん、又は現世を必ず助けよ、かし此、必ず忘るゝな、と聞て、驚く土肥夫婦は、勿論娘の玉虫、又至る迄、切ては、どばかり、又驚き、おした、が娘は、既に弱り居たる事故、又其儘、其所へ命終り、ました、勸慶阿闍梨は、再び言葉、を次ぎ、勸今を去る二年、前京都王生の渡邊治郎右衛門より、頼まれて、神佛丸を、常山、又引取つて、より、既、又神佛の凡骨、あらぬを知ると、雖も、態と、下賤の業、をゆだね、心のまよ、く、舉動、わせしは、過去の因縁、をはたさせ、一度、男女の道を、知らせ、其煩惱の源、を脱離、させん、が為なれば、なり、吾れ、豫め此度の、ことも、悟ると、雖も、わざと、今迄、御身、又對面、もせず、海尊が、非道も、他所、又見て、居りたり、しは、皆宿業、をはたさせん、が為なり、八右衛門、どの、決して、左様、又お歎き、あるな、皆是れ、前世の、定まる所、にして、外典、又所、問、死生命、あり、争で、か、人力、の及ぶ所、ならん、生者、必滅、會者、常離、は、浮世の、習ひ、雲井、を出で、遠からぬ、辨正が、一子を、聲に、すれ

武藏坊辨慶

八家の譽れ娘の果法、決して御恨みあるな。と勸慶が滔々として佛縁を説きました。八右衛門は涙を拂ひ、八御坊の仰せ道理至極、決して恨みることがありませう。神佛殿如き素性尊きか方を、我家の聲とすれば、仰せの如く我家の譽れ……神佛ぬし今斗らすも娘は生害、盤へ娘は死すども血縁のなかる吾等夫婦、必ずお忘れ下さるな。神道の勿体無い仰せか、今更謂はんも其過ちをかざるも似て面目無きこと、あがら去年の六月廿日の夜、京都六波羅よりの歸り掛け、此村外れにて玉虫の、危難を助け辻堂に誘ひ入れし暗まされ、忽ち狂う意馬心猿押へんとすれど押へ兼ねたる春駒の割なく、枕を替せし何國如何ある人かとも、川ひもせず問われもせぬ。其暇も御身の家の子ドヤ、と來りし故も掛るなく名残惜しくも別れましたが、佛に仕ふる身を以て邪淫を犯せし罪深かけれども是も前世の宿縁と偏にお許し下されたし、其代りに、吾れ今よ

武藏坊辨慶

り普く世界を修業して専ら武門も身を密すども容の出家遁世の身にて生涯不犯も身を終らん、是れ玉虫殿が苦節も死せし恩義も報ふ一ツの寸志、其思召までお許しあれ。と神佛も實も涙も暮れたり、八右衛門の大きき悦んで先づ今日も是れ迄と娘玉虫の死骸の己れの屋敷へ一旦引取つて改めて寺へ送り野邊の送りを済ませました。跡も勸慶の海尊を呼生けて己れの前へ招き、勸コリヤ海尊汝の圓頂緇衣の身もあるまじき邪慳の心、今迄の吾れ黙して居たりしが酒を喰ひ肴を好み、既女をも愛すと聞く、夫を遠より知らぬ、よのあねと過つて改むるも憚かること無し、今日改むるか明日や身の行ひを正すか、と密か様子伺へ、益々慕る悪業亂暴、最早五戒の破つたる破戒無殘の者、かれは今日改めて暇を遣はす、万一吾が謂へること己が心と問返し自ら耻ることあれ、是より心を改めてありとあらゆる靈山も登り清き流れに煩惱の垢

武藏坊辨慶

を落し清淨賢相を現にして三世を助け後の世までも芳名を垂れ
日又自ら耻る所無くんば墮落爲て世を送れ強ての謂はぬ常陸坊
……と云入れて海尊も海ア、一吾れ過つたり。と爰に師の一
で發心いたしまして僧々と成つたが是れ又世の有様を見て過去未來の助
て六年目も名僧と成つたが是れ又世の有様を見て過去未來の助
くるども益無し現世を助くるも如かず然らば則ち誇る平家を滅
して源氏を再興なし上一天万乘の君の教慮を安じ奉り下万民塗
炭の苦しみを助くるも如かずと發心して遂に京都烏丸にて
曹子牛若丸殿と面會して忠義を盡くしました去れど勸慶阿闍梨
の云入れた如く神佛丸の方が智略武勇の遙か勝つて居るから
遂に神佛丸の方が義經公の伊家來ても常陸坊より上席あり
りましたの詮方の無い者で扱て爰に神佛丸の始めて今迄の迷ひ
の覺めて中頃將に墮落せんと爲ましたが師の意見の爲に心を取

武藏坊辨慶

直して是よりの夜と無く日と無く勤行怠り無く一兩年の内は忽
ち爰に非凡の志しを起し自ら西塔に住して西塔武藏坊……父
の辨正と師の勸慶の字を一つづつ取つて辨慶と相成つたので
さいます能く今日の世までも人様が辨慶の一度女の味を覺へて
斯んな者か何度……でも同じことだ詰らぬものだと諦めて以來
女よの目の暮れなかつたと云ふことを云ひますが決して然ふで
無い全く玉虫の道を立て他の女に眼をくれあかつたのでござい
ます最初も述べました如く此二回の初編の二回より三回に這
入るべき所を爰に口演したのであり升から皆さん宜しく其お積
りで伊藤分けを願ひます先づ辨慶が修業中の一奇談は是れでお
仕舞……

鷲尾三郎の傳

辨慶の傳記中にも龜井六郎の傳鷲尾三郎の傳等があり升が龜井六

武藏坊辨慶

郎の傳記の誰方でも存存してございますから爰に惣尾三郎のお話しを一席伺ひます借て惣尾三郎の身の上と就ての世評様々の説がありすが皆附會の説であります爰に伺ひますのが眞の三郎の傳記でケス少しく以前から伺うやうでござい升が夫れとても辨慶の出るお話しでケスから畧さず伺ひますが却説も源頼朝の義經主従の御味方より彌々熾ん相成りました破竹の勢ひで諸方を平げ時木會義仲信濃より起り立つて京都へ征込み平氏を西海に追退け己れ旭將軍と名乗つて暴惡至らざる無く此時頼朝の義經も命じて木會義仲征伐を命じました義仲聞て大さき驚き其軍備も取掛り居る内平氏の西海を征服して再び勢ひ熾ん相成り攝州と播州も跨がる浪花海一名一の谷と申す所へ新たに城廓を出來らへ不日都へ征登らんの有様でございます此一の谷城廓と申す所の東の方福原を大手として西の一の谷

武藏坊辨慶

を搦手と爲し東西三里の長さ福原を皇居と定め是に安徳天皇お出であり北の何れも山越しして高し南の大海も臨み万里の波濤滿々として前後左右の要害の堀を拵へ二重三重の高櫓を出來らへ三里の城廓も赤旗の懸るの有様實に目覺しく相見へました切て義經の頼朝の命を受けて追々西上して宇治瀬田を破つて京都に征入り木會の粟津に滅びたり後白河法皇義經頼朝の兩大將も平氏追討の院宣を賜りました兩大將委細畏り奉ると速かにお受け及びましたるから法皇も於ても盡くお悦み相成りました時元暦元年二月四日の早天も大將源義經浦の冠者範頼多くの軍勢を引連れて一の谷へ發向いたすことと相成つた浦の冠者範頼の軍勢も三万五千又義經の軍勢も一万余人頼朝の臣島山和田佐原河越平山逸見大庭の軍勢を始めとして譜代恩願の郎黨も一の谷城廓辨慶常陸坊海舟龜井片岡伊勢駿河熊井の太郎をはじめ

武藏坊辨慶

百八十八
として是に従ひ籠願の一の谷正門より征込むこと定め義經の
敵の不意を襲ふんと云ふので丹波の國へと差掛り二日路を只一
日で打越したることよて播磨、攝津、丹波三ヶ國の境ある丹波の國
氷上郡三草山の東の山口小野原と云ふ所へ陣を取りました夜よ
至つて二月上旬最早月も無く道暗くして黒白も分かぬ眞の闇一
歩を過れば谷へ落ちて命を捨つるに云ふ餘程けんんな所でと
さいます全で鼻を折られても分らぬやう亦有様でございますか
ら義經の辨慶を召して 義如何辨慶斯る山道何れが西か東か
更に分らず加之らず一寸先きも見へ分ぬ眞の暗今宵の内に今敷
里よても進み置きたく存するが這の如何いたして宜しからんや
普通の松火よての迎も四邊を照らす足らず汝智あらば出だし
て見よ。辨度カラく と打笑つて 辨這の君の仰せども覺へず千
里万里を一時も照らすの松火あれど君はお存じ無さや 義ホ、

武藏坊辨慶

百八十九
予は未だ左様なる重寶の松明を見たこと無し夫は汝今宵持參
せりや 辨如何も我此懐中又所持し居れり 義是非見たさも
のあり速かよ照らし見せよ。辨慶 辨委細承知仕ると立上つた義
經の 義辨慶が何んなことをするかと思召して居らせられると
辨慶又於ては其所等邊りの枯草其他立木一面又火を掛け山火
事を拵へた折しも山風激しくしてゴク と云ふ風の音と共よ
次第くよ燃擴がつて邊り白晝の如し辨慶大口明て笑ひ 辨君
是れこそ我幼年の時からいたして覺へのある大松明よて候と云
ふ、義經莞爾と打笑ひ 辨大松明どの何事と存せしは山火事
であるか如何よも大きき松明よて汝の云ふ所面白しとあつて此
明火の爲に道を早めて行軍いたす其内は鹿松村なすと申す山村
の僻知を通り越し爰よ於て義經の田代冠者信近土肥の次郎實平
よ七千騎を與へまして 義汝等兩名は一の谷西の正門より竝入